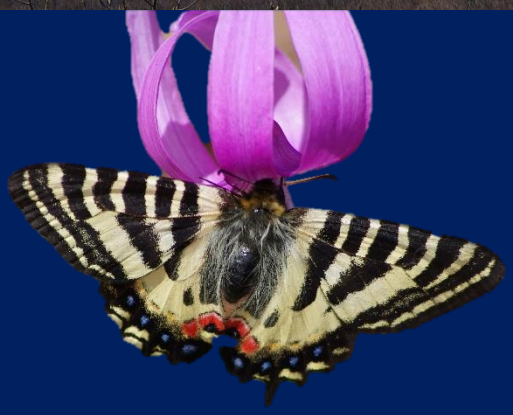
ウェブ短編集

春の蝶と花鳥

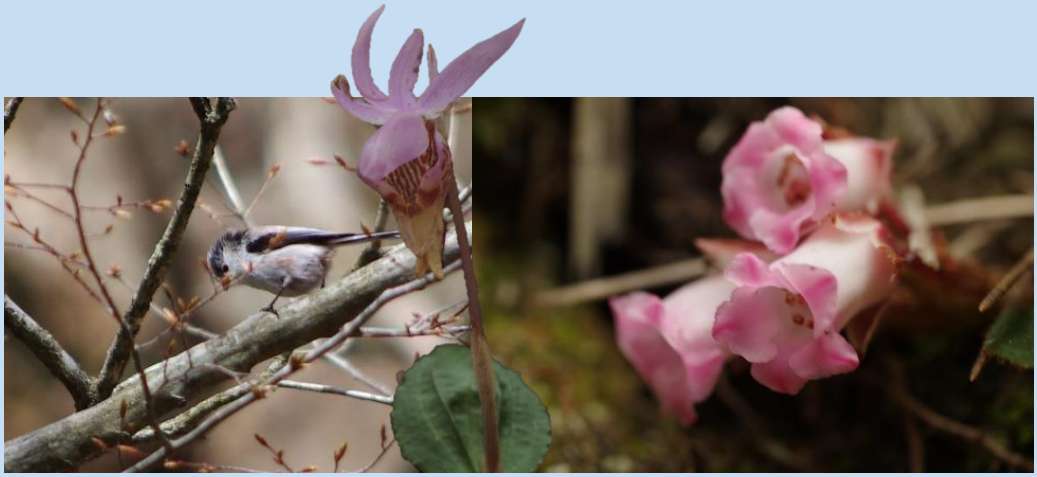


瀬川紀雄

目次

春の蝶と花鳥 …… 2
書物のほこり …… 19
部屋と大通り …… 36
イタチごっこ …… 52
熊と花 …… 64
古銭を振り …… 77
ふたりトンボ …… 86
あとがき …… 108

春の蝶と花鳥



緒言

あれほど待ち焦がれた四月も、はや中旬を過ぎようとしている。三月の中旬に先ずはと残雪に輝く満作（マンサク）の花を拝み、赤茶色の萼片と対照的に細長い黄色い四枚の花弁が元気に跳ねる姿に爽やかになって以来、もう一ヶ月にもなる。

四月初めは、林檎畑の山際の雪解け早々の斜面に福寿草の群れを訪れ、そこには菊咲一輪草（キクザキイチリンソウ）や東一華（アズマイチゲ）も群れていた。越冬した孔雀蝶（クジャクチョウ）や緋縅蝶（ヒオドシチョウ）も元気に飛び交っていた。津軽はもう充分に春になっている。その頃、弘前公園の一隅では、四十雀（シジュウカラ）を始め小雀（コガラ）、日雀（ヒガラ）、山雀（ヤマガラ）、柄長（エナガ）と馴染みの小鳥たちに、まだ冬鳥の花鶏（アトリ）や真鶸（マヒワ）が混じっていた。岩木川や支流の平川では冬鳥の真鴨（マガモ）もまだいて紅猿子（ベニマシコ）も間近にできては、馴染みの赤啄木鳥（アカゲラ）と緑啄木鳥（アオゲラ）も始終顔を出す。沼では箆鷺（ヘラサギ）を初めて見た。そうそう、二月に津軽富士見湖では紅鶸（ベニヒワ）を、三月には近くで黄連雀（キレンジャク）と緋連雀（ヒレンジャク）を初めて見たのだった。

身近な野山にはいつもと変わりない年だが、いま新型コロナウイルスの感染症拡散で日本も世界も大変な状況であり、ペスト、コレラ、スペイン風邪に相当する世界的な流行といわれる。テレビやネットでの報道に心を痛めている昨今である。患者の苦しさにも、危険な状態での医療従事者たちの献身的な姿勢にも、心の中で声援し続けるしか術がない。弘前公園も、日本一の桜といわれながらもその開花前に閉鎖となった。

不要不急の外出を自粛している状態であるが、観光地でもない近くの野山は人もいなく対象外であろうと、マスクを持参してこっそりと訪れている。生きものたちを愛ずる者には、細菌や真菌もそうだがウイルスも生物であることが心苦しい。環境思想における持続可能性と共生、そしていまウイルスとの共生という価値観の転換が迫られている。

津軽では夏もそうだが、春も短い。それなりに静かに春を味わいたい。同じ生きものとして義務のようなものを感じているのかもしれない。

一の章　ヒメギフチョウ（姫岐阜蝶）

平川市に白岩森林公園という名所がある。市街地から東の山際にあって、山間の入り口は道の左右が狭まり、そこの大きな岩肌に山守（やまもり）長の石碑が立つ。明治のことだが　三十有余年無報酬で凝灰岩が露出した白い山肌の美景を守ったという。林檎など畑の開墾にも尽くしている。いまだ松と雑木も豊かな山であり、かつて姫岐阜蝶（ヒメギフチョウ）がいることでも知られていた。

広く大きな岩肌が目睫にそそり立つのに誰しも驚くに違いない。その白肌に浸食から頑固に残った幾つもの縦の襞が景観の美を際立たせている。最も大きな襞は、鋭い刃が空を割きそうに峻厳である。岩肌の上際に　松の根が剥き出して垂れているのも風情があるだろう。特に老荘や禅に憧れている輩

は、しばらく草の上に胡坐(あぐら)をかきたくなるに違いない。白岩を見上げる足元は、上手い具合に丘になった松林である。

1

四月半ばのことである。風のない快晴であり、平川市にあるその白岩森林公園へひとり出かけた。暖冬であっただけに、そろそろ例年より早めに岩梨(イワナシ)と春蘭(シュンラン)が咲き出しているだろうと、勇み足でもあった。

暖冬に託(かこつ)けて真冬日の一月中旬に、雪の中の白岩がどんな景観になるのか見たくて、村はずれに車を置いて人の踏み跡を当てにし進んでみたのだった。四十分ほど進んで熊らしき足跡に不安になり、もう疲れてもいて引き返したのだった。それだけに春を待っていた。

家から三十分ちょっと車を走らせると、もう公園の駐車場である。昔と比べ、道路も随分とよくなった。そこからまだ先を進め、車が数台駐車できる場所に置く。

二人で初めて白岩を訪れた若い頃はまだ車を持っていなく、石灰岩質の真っ白な岩肌を見るのだけが目的であったような気もする。既に高山植物から身近な低山の花を求めてはあちこちの林道を走り回っていたものの、白岩の景観だけが目的であった気がする。たぶん、本来の地形と岩石、鉱物の関心からだったろう。

あの時は、弘南電鉄黒石線の平賀駅で降りて、尾崎までバスで来たのだろう。そこから歩いて、集落を抜けてまもなく、ちょっとした砕石場とその辺の道景色への想いがいまだ強く印象に強く残っている。こんなところに採石場が、似つかわしくないと思いながらも、こぼれ石に興味を持ちながら、川が沿ってきて曲がりかけては山に入っていく場景に、山道に来たという実感が湧いたのであった。何かしら懐かしいような思いであった。その後、一度も集落から歩いたことはない。

懐かしいといっても、恐らくこの時が初めての訪問だったはずである。グランドキャニオン風な、広く急峻に聳え立つ白い岩肌に驚いたのは言うまでもない。こんな地形があるのかと、この旧平賀町生まれ育ちには自慢にも思えた。

一日がかりの遠出であったのだろう。二人でいれば、どこであろうと、ただブラブラ歩くのだけでも満ち足りていた青春であった。

岩梨(イワナシ)は常緑の小低木であり花も小さく、平らな箇所に生えている場合は、五十ミリの単体マクロレンズでは肘を付くなりしないと撮れない。大方気づくのは、遊歩道や登山道脇の明るい斜面に生えている時である。そんな時は逆に撮りやすい花である。

近くて気軽に出会えるのは、車を置いた所から松林の丘に上がっていく径

の、その南向きの斜面に生えている。花はまだ早かった。それでも咲き始めたのが幾株かあって、その淡い紅色の花をマクロレンズでピントが合う限り接写できた。鐘形の花冠は長さが一センチくらいと小さいが、その先が少し五裂して広がっている。何度見ても、相変わらず綺麗な花である。一株に大方はそんな花が数個から八個ほど付いている。視力が弱いから、レンズで眺めている方が雌しべも観察できる。言うまでもなく採掘は禁止であるが、画像はそのまま家に持ち帰ることが出来る。パソコンでいくらでも大きく拡大して眺められる。しかも、何度も鑑賞できるのだ。デジカメとＰＣに感謝感激雨あられである。

松の丘に上がると、広く大きな岩肌が目前にそそり立つ。幾つかの鋭い刃となった峻厳な襞がほんとに空を割きそうだ。そんな岩肌の上際で、松の根が剥き出して垂れている浸食力の凄さも感じられる。遊歩道はそこから左折して続く。右折は進入禁止の赤いテープが張られていた。この日、久々に道を外れちょっと下りては右側の方に進む。そして右折の旧道らしきに辿り着く。途中、一株だけ岩梨が咲いていた。見事な濃いピンク色である。これでこの日ここを訪れた甲斐があったと思わせるものだった。

実はこの旧道らしきを辿ったのは姫岐阜蝶（ヒメギフチョウ）を念頭に入れてのことだった。最初で最後であった蝶。三十余年前、たった一度っきり出会った蝶。かつてはこの山の象徴でもあった。それが数十年も前から見られなくなったのだ。しかし、最近また生息しているらしいという情報が愛好者の間に飛び交っている。いや、棲息しているのだ。先日、フェイスブックにＦ先生が交尾の最中の画像をアップしていた。実に嬉しく思った。復活である。この山の有難さも再認識される。

姫岐阜蝶に初めて出会い撮れたのは、確かこの辺でなかったかと。この日はその影さえなかった。まもなく根曲竹を分けて沢に出ては、幾つかの堰を越え遡ってみたものの気配はまるでない。食卓である牛薄葉細辛（ウスバサイシン）も見かけなかった。

車に戻ると、傍らに駐車していた車があり、ちょうど女が出て来ては歩道へ向かった。車中で窓を開け持参の魔法瓶のコーヒーで一服していると、登り斜面の径で女は足を止めているのが見える。岩梨を見に来たのだ。遅れて後に続くことになる。今度は歩道通り左折して本来の登山口へと回遊するつもりである。それは一つに難波津（ナニワヅ）が目的である。

白岩の足元である松林の丘で女と一緒になった。

「やはりまだ早かった。この前も来たばかりなんですよ」

と言いながら女は笑った。つばのある素敵な帽子をかぶっていたが、容姿にもしやと思いながらも控え、難波津と小蕙蘭（コケイラン）、そしてこの山の姫岐阜蝶と近くの志賀坊森林公園に咲く鰐口草（ワニグチソウ）が話題になった。後者はまだ探せないでいる花である。

「ずっと下に花が付いていて、どうってことない花なんですが」

と遠慮がちにもその花を語る喜びが伝わってきた。

「姫岐阜蝶ねえ。浅虫にいるのは知ってるでしょうが、黒石の片栗畑にもいるってよ」

片栗にもいるというのを思い出した。雷山（いかづち）だという。姫岐阜蝶の幼虫の食卓である薄葉細辛（ウスバサイシン）だけを気にしていた。そうだった。成虫の主な食卓が片栗だった。

話しながら白岩の底にできた径を進む。平坦だが滑りそうな白い径で、水脈の模様が固定し、零れて来た凝灰岩の粒がアクセサリーを成していた。靴跡をつけないかと気を揉（も）みながら緩（ゆる）り進む。女とはすぐの東屋の分岐で分かれた。別れ際の箇所に紫八汐（ムラサキヤシオ）が咲き出していた。花を手前に背景の白岩をぼかすアングルも良かった。

登り切った林の中で、難波津はもう濃い黄色で眩しく咲いていた。

2

その五日後、折しもの快晴、再び出かけた。女の言った、姫岐阜蝶（ヒメギフチョウ）は片栗に来るというのを気にしていた。もう片栗は最盛期なはずである。今度は正規の駐車場を利用し、一気にメインルートの急登から片栗が路傍左右に咲く場所を目指す。路傍の幾種かの菫にも春を存分に味わいながら。

急（せ）いてか少し疲れ、休憩がてら斜面に春蘭（シュンラン）を探す。見つけたが、三枚の葦片はまだ開かず蕾に近い容姿である。隣に昨年の実を付けたままの春蘭があった。果実は茶色で長い紡錘形である。花の時期に成熟するという。中の種子は極めて小さく埃のようであり、翼や毛がなくとも風で遠くまで飛ぶといわれる。よく見ると、既に果実の先っちょが開いており、種子は飛んでしまっているのだろう。逆に、近くの姫青木（ヒメアオキ）の真っ赤な果実が鮮やかだ。ありふれた春先の果実だが、類似の中で最もルビーか何かの宝石を思わせてくれる。

径を登って行くと処々に黄色鮮やかに難波津（ナニワズ）が出迎えてくれるが、撮影など進む。むしろ、径に林の樹影が映るその模様を撮りたくなった。径は斜面で、しかも真ん中が少し窪んで湾曲している。それゆえの、予想だにせぬ影の模様なのである。それでいて、あのフラクタル図形のコッホ曲線などを思わせるのだった。

コッホ曲線か、少し昔日の想いに浸る。パソコンのプログラム言語、特にC言語を思い出した。フラクタル幾何学の初歩的なプログラムを作って驚喜していた。四十歳になる数年前から約七年間、野外よりも机上のパソコンに夢中であった。間違えばエラーが出て、正解だとその図形なりが現れる。人間社会や文学、芸術の世界と異なって、真偽すなわち正否が明瞭ですっきりしているのだ。

数学の意味をそれなりに自覚したのは高校二年の時だった。担任でもある数学のN先生が、最初の授業で数学の素晴らしさを語った時である。「皆さ

ん、花を見ると美しいと思うでしょう」と言い出し、花の形の中に数学が潜んでおり、いや数学が一緒に花を創っていることを情熱的に語ったのだ。そうなのかと数学の意義とその新鮮さを覚え、数学の勉強に夢中になっていく。次第に高点を採れるようになり、結局は三教科の合計点も上がり学年の順位がぐんぐん上がっていった。

そうなのだ。桜の花びらにせよ、楓の葉の形にせよ、植物たちは勿論、昆虫の形や脚にも数学が潜んでいるのだ。鉱物および岩石の生成変遷にも、地形や川の流れにも、更には気流や星々にも数学が潜んでいる。そんな数学に対する畏敬の念は今でも変わりはない。大学では哲学に席を置いただけに尚更である。デカルトやライプニッツ、フッサールやラッセルを考えただけでも了解されうるだろう。

我に返り歩を進める。まもなく、ずっと片栗の原が続く。歩みは右往左往して亀足になる。片栗は何度撮っても厭きることがない。風はなく光が十分なだけに尚更である。様々な方向から、林が背景に入るように広角で、幾花もまとめて入るように望遠で。そして、マクロでばっちり絞って被写界深度を強め、色も乗り見た目に近づくように。葯の先も雌しべの先の割れも明瞭に。

近くの片栗の花に何か蝶が止まっていた。意外にも、緋縅蝶（ヒオドシチョウ）だった。ヒオドシは樹液・獣糞・腐果を好む傾向が強く、花にはほとんど止まらないはずだが。今頃の時季よく見かける蝶であるが、まずはこれをと望遠で撮る。翅表はくすんだオレンジ色で、白い帯と黒い斑紋がある。陽の明るさによってはとても綺麗に見えることがある。

径に戻り亀足を続ける。離れた所を黄色い蝶が飛んでいく。紋黄蝶か。紋黄蝶はまだ郊外でも見かけていない。もしかしたらと追いかけた。姫岐阜蝶（ヒメグフチョウ）にも見える。片栗に止まったと思うや、すぐ離れまたパタパタと飛ぶ。追いかける。また片栗に止まる。近づいては逃げられ何度繰り返しただろう。ようやくカメラを向けることができ、フォーカスの音に興奮する。が、シャッターを押す前に逃げられる。確かに翅が黄白と黒の縞模様である。姫岐阜蝶だ。確かにヒメギフだ。足元よりも、蝶から視線を逃さぬことに集中して追いかける。止まり近づき逃げられ、駆け上がりずり下りては何度繰り返したろう。幾つか撮れた像は小さくとも、ヒメギフであることがそれなりに分かるだろう。三十有余年ぶりの再会である。

出会えただけでも満足と追うのを止め、展望所まで行くことにした。山に来た以上、どこか展望の写真も撮りたくなるのが常である。やや急登を登り出した。群落とは言えないが、左右まだ片栗が咲いている。すると、ヒメギフが路上で、日向ぼっこでもするかのように止まっている。少しずつ近づいていく。かなり接近できた。もうピントさえ合っていればこれで充分と言えるまで近づけ撮影できた。更に少しそっと近づいては撮影。それを数回繰り返す。もう逃げられてもいいと、マクロレンズに交換する。その音のためか、

蝶は逃げた。いや、別なヒメギフと二匹でクルクルと舞い上がっている。オスたちの陽だまりの縄張り争いなのだろう。舞い降りて来たのは元の蝶だろうか。マクロで近づこうとすると、すぐ下りの方に飛んで行き、今度は路傍の何かの葉に半隠れになった。下りながらまた近づいていく。すると今度はヒオドシが飛んで来て、二匹はクルクルと舞い上がる。ヒメギフがもとの場所に戻ってきたが、止まっていたのもわずかの時間で、更に下りの方へと飛んで行った。

姫岐阜蝶はアゲハチョウ科で、日本の固有種である。西日本で見られる岐阜蝶と同じ属で、姫がつくように岐阜蝶より少し小さめという。岐阜の名がつけられたのは、岐阜県で最初に採集され新種と確認されたことによる。姫の方は東北と北海道に棲息するが、里山の放棄や開発などで個体数の減少が著しい蝶であり、絶滅危惧種である。

展望所に辿り着くと、ヒオドシが飛んで来た。そして入れ替わるようにヒメギフが飛んで来た。しかし、どこにも止まらない。二匹とも何か見回りに来ているようだった。のんびり景色を楽しむ。眼下の幾つかの低山を越えて津軽平野の南部が広がっている。生まれ育った小さな集落も長閑な空気の中に見える。帰りに母に寄っていこう。三十何年ぶりに里山で蝶を見られたと伝えたい。そして平野の向こうに凛として岩木山が屹立する。生家から眺めるのとほぼ同じ容姿である。中腹より上がまだ残雪の、壮大華麗な雄姿である。もう少し月日が経つと、残雪の下方に青色の層を強め、中腹から新緑の色に染まり山麓に下りるにつれて緑色を濃くしては、それこそ季節を通じて最も美麗な岩木山になるだろう。遠くまだまだ白い白神山系が見える。

満ち足りた気持ちで下山する。縄張り争いをしていた径、そして左右一面の片栗の原。その原の終わりそうになる箇所で名残惜しさと謝意を覚えながら歩みを速めようとすると、ヒメギフが飛んで来た。そしてすぐ近くの片栗に止まった。近づいても逃げない。ゆっくりレンズを向け接近していく。スクロー状の長い口で吸密している容姿を側面からばっちり撮れた。その花から離れ、一メートル弱の片栗に移った。今度は翅を広げた俯瞰状態を画面一杯に撮れた。後翅の外側には青や橙、赤色の斑紋が並び、流石に美しい。何となく毛深い印象を与えるが、後翅に尾状突起を持ち形も美しい。何とも有難かった。

以来喜々としてばかりで、林の囀りが心地よく、金蛇（カナヘビ）がささっと逃げては立ち止まり、ヒメギフに会えたよ、と語りかけてはパチリ。径の最後の急な下りで、何ということもなく躓き転んでしまった。そしてニタニタ笑いが漏れ、しばらくそれを抑えることができなかった。

駐車場に戻ると、早速に家内に電話した。二人で見てから三十何年ぶりに出会えたと。母に寄るのがより楽しくなった。

里山の片栗径に岐阜蝶や

囀り冴えて金蛇じっと

二の章　ルリビタキ（瑠璃鶫）

1

街の南に久渡寺山がある。標高六六三メートルに過ぎないが、街並の道路などから間近に迫って見え、周囲に高い山がないから、でんと構えた山であり、市民の山と言って過言ではない。一九七〇年頃に市政八〇周年記念として全山が「こどもの森」となり、幾つかの登山道が整備された。

かつて二人で白馬岳、穂高岳、北岳など高山植物のお花畑を第一に、少し遅れて里山の花にも興味を持ち出し、その頃からこの久渡寺山にはよく訪れた。上にあった簡易なビジターセンターが下に移ってからは展示室が広くなって季節ごとに変わる陳列物の種類も多くなり、花の名前の確認に好都合だった。子供たちも二年ほどそこの自然教室のお世話になった。お蔭で一緒に冬山にも登れた。長らくその自然教室の中心になっていたのは高校の同期生であり、ともに早めに退部いや脱落してしまったものの、バトミントン部で一緒だった。

今は久渡寺山の頂上まで登ることは滅多にないが、中腹までは時に訪れている。そして、ここ八年ほど久渡寺山の裏の林道へは頻繁に訪れている。

姫岐阜蝶と出会ってから五日後である。もう四月下旬である。雨が零れそうだが明るい雲であり、久渡寺山の裏の林道へ出かけた。自宅からすぐのアップルロードを走って十分もしないうちに近道の林檎畑の農道へ抜ける。そして、岩木山を遠望しながら、道幅が狭くなったのをぐぐっと下って栃内川に沿う。小さな滝に木々が茂る最初の花鳥の撮影箇所となる。川辺の木々も疎らになった。何か鳥が逃げた。滝の道路向かいに小さな祠があり、そこは雪の下などの観察場所である。ところが、山が何年も前から伐採中であり、ついに祠の傍らまで禿げてしまった。日当たりが良すぎてぞっとしたが、祠の前の涸れそうな弱い流れに雪の下の葉がわずかに残っている。今年は咲くだろうか。ああ、山は禿山になってしまった。鳥影がよぎる。

栃内川に沿って進む。相馬地区からの林道に合流する。と言ってもそこまでは林檎畑であり農道と言った方がいいのかもしれない。林道は以後ずっと栃内川に沿う。完全に山の中なのだが、途中広い私有地である採石場の中を川は通過する。掘削した高い壁は恐ろしいほどで、平日は稼働していて埃っぽい。作業棟の玄関も窓も、その前に立つ飲料水の自動販売機も埃をかぶって白っぽい。鉱山用の濃い黄色の大型ダンプトラックが走ってくると委縮気味になる。そして渦まく塵埃。健康を懸念しながらも、労働者たちの逞しさに圧倒されてしまう。

その採石場を過ぎるとすぐ堰があり、そこからいわゆる林道となる。湯口

林道という。植樹祭のあった箇所など幾つかの植物と蝶のポイントを通り越して野鳥の二番目のポイントへ行く。駐車もでき、川に下りると少し蛇行していて鳥が過っていくのが時々見られる。また、池もあり周囲の枝に小鳥が来ることもある。この日は何の鳥影もなかった。川原も林床も菫以外に花の気配もなく、ただ山椒魚の卵塊だけは認められた。

かつてこの池で、家族みんなで翡翠を眺め、一人の時に近くに飛んで来た鶯を撮れた。花はつい最近まで曙繻子蘭（アケボノシュスラン）や鬼の矢柄（オニノヤガラ）などのラン科や、類葉牡丹（ルイヨウボタン）などが咲いていて、蝦夷蜻蛉（エゾトンボ）や蝦夷糸蜻蛉（エゾイトトンボ）も見られた。

ここ何年も林道の奥の方で伐採作業があり、切り出された材木が奥の方から処々道路脇に積まれ、ついにこの沼の正面にも材木の山ができた。

2

花と昆虫のポイントを通り越して、栃内川（とちない）が九十度蛇行して架橋のあるポイントに着く。ちょうど車を寄せる場所もある。折しも、材木を高く積んだクレーン付きトラックがやって来て、車を更に寄せる必要があった。運転手がニヤッと笑いながら狭い橋を左右ぎりぎりにゆっくり渡っていった。これまた橋が崩壊せぬかと何か恐ろしさを覚えたものである。採石場にせよ林業にせよ、いまだ筋力のある男たちの世界なのだろう。過ぎ去ったトラックはどこに材木を下ろすのだろう。あの池の付近だろうか。もうあそこは置く場所がないはずである。どこであろうと不安になるばかりだった。しかし、もともと林業のための林道である。その林道を勝手に使わせてもらっている。そう思うと、どこか悲しくなるのだった。

囀りを耳にしながら沢に下りた。樹上の鳥たちが飛び去り、下にいた小鳥がさっと逃げて、岸辺の茂みの枝に止まった。青っぽい鳥であり、逆光気味でレンズでもよく見えなかったが、少し近づくとサッと逃げてしまった。チャンスを逃したと思いながら、しばらく蛇行の内側の砂礫地で背を屈め待機することにした。

この林道のずっと先で初めて深山川蜻蛉（ミヤマカワトンボ）に出会った時には驚いたものだった。その翌年だったろうか、この川辺でそのオスとメスの両方に出会え、ばっちり撮れた時の感動を今でも忘れられない。そのお蔭で、ネットで雌雄の特徴を把握できたのだった。ただ、その頃、川の向こうにたくさん咲いていた花が何であったのか思い出せない。写真記録を残しているＵＳＢは何本もあり、探すのを億劫にしていた。

そんなことを思い出していると、川向こうの木に小鳥の群れが飛んで来た。双眼鏡で覗くと、木の芽を啄（ついば）んでいるようである。どうやら四十雀（シジュウカラ）らしい。更に他の小群れも飛んで来ては、それぞれもっと近い木にも飛んで来た。小雀（コガラ）と柄長（エナガ）である。奥の木の方に少し大きめの黒っぽい野鳥が飛んできてはすぐ椹かヒバらしき陰に隠れてしまう。ただ、こっちの身近な木々にも小鳥たちが飛んで来てくれた。四十雀は背の黄緑と青灰色および翼の何本もの黒

と青灰色の縦模様が美しい。小雀は黒いベレー帽をかぶった可愛い顔、逆に白い額が目立つ柄長は長い尾羽の容姿が素敵だ。みんな動きが敏捷で生き生きとしている。考えられない程に速く首をカクカク動かしてはひょいひょい木伝(こづた)う。

この川は急に蛇行していて、そこの外側である対岸は浸食されて急峻な崖を成している。その崖の方から囀りが聞こえて来た。よく見ると、青い鳥が急斜面で餌を探している。滑り落ちることなく、よくも左右上下敏捷に歩行移動しているものだと感心しながら双眼鏡で覗くと、瑠璃鶲(ルリビタキ)だ。ルリビタキのオスだ。県内ではごく少数生息する夏鳥で、普段は亜高山帯の灌木林にいるという。囀りはちょっとした灌木の方から聞こえる。恐らくメスがいるのだろう。オスを夢中で撮影した。オスとかなり離れているが、三百ミリ望遠でも、ピントさえ合えばあとはパソコンで充分に拡大できる。オートフォーカスでデフォルトのまま、露出の測定は中央重点測光で、しかも測距点はスポットにしている。あとはカメラをしっかり顔に近づけてファインダーを正しく覗くことだけである。もう充分かと思うほど撮った。双眼鏡で覗く余裕もあった。頭から背、尾にかけて上側は見事な瑠璃色である。そして、腹は白だが側面のオレンジ色が鮮やかだ。動きは敏捷である。メスだろう頻りに鳴く甲高(かんだか)い声が頭上の方から聞こえるようになった。見上げると、確かにいる。今度はカメラをそっちの方に向ける。オスに比べると地味な色だが、眼に白い縁取りがありとても優しい印象を与えてくれる。数枚撮っては逃げられた。オスの方もいなくなった。

ルリビタキを初めて撮れ、満ち足りた気持ちで車に戻った。このカーブの沢に大分時間を費やしていた。もう少し先の一カ所も訪れる予定だったが、もう引き返すことにした。更に先の二箇所には花と蝶、蜻蛉のポイントがあるのだが。

帰りは左右をあまり振り向くことなく速度も少し上げていた。後ろから軽トラックがやって来たので、ちょうど沼の所で追い越されることにした。山菜取りか伐採関係者か、男二人の軽トラだった。沼の所に材木を積んだクレーン付きトラックはいない。あの材木はどこまで運ばれたのだろう。

植樹祭の行われた明けた山に出る直前、路上から野鳥が二羽飛び去り、一羽は茂みの枝に止まった。青っぽい。停車し、少しずつ近づいていく。ルリビタキのオスだ。反対側にすぐ隠れてしまったのはメスかもしれない。先ほど見たオスだろうか。ヒタキの仲間らしく背筋を伸ばしちょこんと立つような端正な姿勢である。眼が大きく可愛い姿勢である。まもなく路肩の次の茂みの中に逃げた。それでも容姿は明確に撮れる。かえって大分接近できた。間近に見ると、尚更に美しい鳥である。この林道訪問で、最後に大きなお土産をもらった思いだった。先のヒメギフチョウの最後と同様だった。

植樹祭の行われた箇所で何か花も撮りたくなった。少年の頃に好きだった花札ゲームの影響がいまだに続いているのだろう。花よりも昆虫採集だったが、五光よりも「猪鹿蝶」である。五点札の短冊「松に鶴」と「梅に鶯」、十

点札の種では「藤に不如帰」「芒に雁」「柳に燕」を好んでいた。今では鳥あるいは蝶と言えば花である。これといった花はなかったが、菫細辛（スミレサイシン）が容姿ともに美しい。何度撮っても飽きない花である。

その箇所を過ぎると通行禁止のロープが掛けられていた。ドキッとしたが、車高の低い車だけに通れた。まもなく家内から電話が来ていたことに気づく。

沢曲がり崖につがうやルリビタキ

さ帰らむ野の旅終えて汝（な）が家に
土産なけれど目の宝持て

三の章　ヒメホテイラン（姫布袋蘭）

青森市に標高一四三メートルの眺望山がある。青森市内から北西約二十キロの場所にある山で、青森市と五所川原市金木町にまたがっている。山は森林管理署管内の国有林であり、散策コースが整備されて自然休養林となっている。秋田スギ・木曽ヒノキと並ぶ日本三大美林の一つである青森ヒバが森をなし、特有の花も生息する。ヒバは県木になっており、山頂まで急な坂道がなく「県民の森」に指定されている。山頂に展望台があり、そこからむつ湾や八甲田連山の山々が眺められる。それゆえの名称である。

眺望山に二人で初めて訪れたのは一九八五年の春のことだった。その年に一眼レフとマクロレンズを購入しており、山頂付近で折よく姫布袋蘭（ヒメホテイラン）を接写できたのだった。つまり、ちょうどその前に白岩森林公園でヒメギフチョウを撮っていたのである。ヒメホテイランに出会ったのは二年前に津軽半島の大倉岳に登る途中のヒバ林の中で、そのピンク色の華麗さと般若の面をも連想させる摩訶不思議な形態に驚きいたものだった。そして小さすぎて標準レンズでは撮り切れないのが悔しかった。野生ランと接写に俄然興味を持っていくきっかけとなった花である。

その後、なかなか会えないでいた。眺望山で再会した時はどんなに嬉しかっただろう。

その後も二人で、家族で、倅たちと、何回か一人でこの眺望山を訪れたものの一度も再会できなかった。森林管理署のホームページでも棲息場所不定となっている。昨年も倅と探しに来たのである。西口から登り錦衣（ニシキゴロモ）を撮り終わった時に、秋田から来訪し諦めて下山する人と出会った。一度だけでも見たくて昨年初めて来たが今年も見られなかったと言い、何とはなしに一緒になり、頂上付近から東口へ下り途中まであちこち三人で探したものである。

今年こそはと一人出かけるつもりだった。

1

ルリビタキを見た六日後のことである。自宅から出るのが遅かったが、一時間十数分でもう西口登山口がある管理棟の駐車場である。車の流れが良かった。先客の車から軽装の若い男が二人もう登り出した。こちらもレンズバックをぶら下げただけの超軽装である。東西の登山口とも頂上まで約二キロに過ぎない。ちょうど十一時に歩き出す。普通、四十分ほどで頂上になる。

蛇行して近づく川辺の山桜が美しい。すぐ綺麗なピンク色の傍食（カタバミ）の群れに出会う。目的の一つである、氷ノ山傍喰（ヒョウノセンカタバミ）である。小深山傍喰（コミヤマカタバミ）の変種ともいわれる。ヒメホテイランに出会えなくとも、これだけでもと慰めになる。少しか咲いていなかったが大葉黄菫（オオバキスミレ）も鮮やかだ。路傍に白花を含む延齢草（エンレイソウ）が並び、片栗がまだ咲いている所もある。二合目まではバリアフリーの遊歩道である。登り出してまもなく、真っ白な菊咲一輪草（キクザキイチリンソウ）が別種かなと思うほど立派である。燕万年青（ツバメオモト）はまだ苔のままだが、葉が食べたくなるほど初々しい。菫細辛（スミレサイシン）以外に気になる菫も咲いていた。

何合目かの標識の傍らに「シダ群落」の案内板がある。大型のシダ群落があり、その中のサカゲイノデ、ジュウモンジシダ、ミゾシダ、イヌガンソクという未知なシダ類が含まれている。いつも、いつかと思いながら忘れていた。ただ、遊歩道を外れることは禁止されているから、あちこち探すのも気が引ける。どこか踏み跡らしき箇所もあるのかもしれないが、まずは事前学習が必要である。いつか見た場所に錦衣（ニシキゴロモ）は見つけられなかった。七合目辺りから亀足になり径の左右首振りとなる。枯葉に隠れがちに咲いているかもしれない。群れない、しかも小さな花で枯葉に隠れがちであるが、ピンク色に気づくはずである。ゆっくりと進みながらも、あっという間に母沢コースとの合流点に至る。頂上まであと十分弱と思うと歩みはもっと遅くなる。しかし、何も見いだせず東屋となり、ほぼ頂上である。東屋の周囲には白花のカタバミがたくさん咲いていて慰めになる。これもヒョノセンカタバミなのだろう。

頂上では四人ほどのグループと、年配の男女一組がお昼をとっていた。来るまでに下山者一人とすれ違ったに過ぎないが、結構来訪者が多い。新型コロナウイルスで不急不要の外出は自粛の時勢にもかかわらず、アウトドア好きたちには避けるべき三密の密閉空間は勿論、密集場所も密接場面も無関係に違いない。一人、二人なら尚更にそうであろう。

山頂付近の遊歩道の左右を隈なく探したつもりである。また、旧道や踏み跡らしき箇所も入っていき、中央コースも少し下りてみては何度も山頂に戻って来た。先客たちは相変わらずのんびりしていた。

「さっきカメラぶら下げていた人、あの人は知ってるんでしょうね」

二人組の男女が会話しているのが聞こえてきた。こちらのことなら、恥ずかしい限りである。ちょうどその折、出発の際に先に登った若い男二人が頂上に来た。ヒメホテイランに出会えたか尋ねてみた。

「さっきも何度か同じことを尋ねられたが、何のことですか？」

「そんな花あるんですか。俺たち、東口コースを下りて中央コースからまた登って来たところ」

運動不足解消も兼ね山を訪れている様子だった。

諦めて東口コースを下ることにした。しばらく径の左右へ首を振り振りするのは変わりない。カーブを幾つか曲がり下り、その景色に昨年倅と秋田の男の三人でヒメホテイランを探したことを思い出した。あの時、杖を突きゆっくり登ってくる老人と出会ったのだ。老人の方から挨拶を受けたのでこちらの事情も伝えたら、ちょっと逡巡しては次のよう答えてくれた。

「われはこの山に年中来てるが、この時期は特に毎日来てるんじゃ。その花を見守りたくってな。上の方の裏っ側にゃ、まだ咲いてるだろう。この辺から下はもう遅い」

そうかと頷き返したところ、下方にもまだ咲き残っているだろう箇所の貴重なヒントを与えてくれた。感謝感激でヒントを参考にそれらしい数か所を探したのである。しかし、残念だった。

そんなことを思い出し歩みを速めた。老人が言ったことで一番相応しい場所を目指し。心は弾んでいた。その場所に着くと、足元に気を配り下り十歩足らずで気づいた。見事だ。ヒメホテイラン、一輪。意外に大きく思えた。ヒメホテイとの三十何年ぶりの再会。まずはと急き立てられたように数枚撮る。あとは余裕で花を眺め周囲を眺める。そしてゆっくりと絞り優先でアップから全身を幾つかの方向から撮る。曇天になっていてシャッター速度が遅めである。絞りを幾段か少しずつ明るめにしていく。足元を可能な限り移動せず、上半身を左右上下動かしての多少無理な姿勢で撮る。それでなくともマクロである。ただただ筋肉と呼吸が疲れるが、それに満足感を覚えてもいるのだ。

全体的に淡紅色の華麗な花である。いずれも線状披針形である三つの萼片と二つの側花弁が五つの後光のように上へと跳ね上がっている。見事な容姿である。唇弁は淡紅白色で太く袋状に膨らんで垂れ下がり、内面に濃紫色の斑紋がある。艶やかな配色である。それが別名の釣舟蘭のごとく花茎の上にぶら下がっては、時に風かと疑うほどに揺れる。いや揺れている方が多い。ぽつんと首が切れて落ちはしないかとハラハラもする。まさに、清閑としたヒバ林に咲く宙に浮く妖精といえよう。

これで充分と花に感謝し、老人に感謝した。そして、先にフェイスブックで紹介していたF先生にも。

2

喜々として下山し、途中、蔓蟻通しや蔓椢の赤い実を撮る。原生林に近いヒバ林であり、林冠が閉じて陽光が入りにくく耐陰性の強い植物たちであるが、径だけに開けていて尚更に棲息できるのだろうか。東口登山口を出ると車道であり、管理棟まで山桜や水芭蕉、小鳥の撮影などをしながら三十分近

く要した。車に戻ったのはちょうど午後二時である。

早速家内に電話してみたが、圏外だった。パンを食う。復習を込め花の案内板へ行く。男二人がいて案内板を覗いていた。

一人の男がこちらを振り向き尋ねた。

「見たかね？」

こちらの喜々とした様子で勘付いたのだろう。

「はい。三十何年ぶりに」

「どこで？」

一瞬躊躇したが答えた。

「東口コースのまん中辺で」

「そりゃ良かった。丸葉冬苺（マルバフユイチゴ）って見たことないなぁ～」

同じくと頷き、秋田との県境の矢立峠でフユイチゴを初めて撮ったことがあるが、もしかしたらそれもマルバなのかもしれない、よく分からないが、と補足した。

もう一人の男が手に持っていた枝を差し出した。

「これ拾ってきた。ヒノキだ」

ヒバよりキリリとした感触である。うっかり、葉の裏があの小鳥が翼を広げたような紋のあるヒバの方が大好き！と放言してしまった。浮かれていたのだ。

先の男がそれも拾ってきたと差し出した。

「あっ、ヒバだ。恰好いいよね」

葉裏を見てまたまた言い放ってしまった。ますます浮かれていたのである。ヒバさまさまだったのだ。

「ヒバはどこにでもある。ヒノキの方が貴重なんだよ」

そういえば、この辺ではそうなのかもしれない。付近には杉の他に百年生以上のヒノキやカラマツの人工林も保護観察林もあるが、拾ってきたのは天然なのかもしれない。勉強になった。

別れてもう離れてしまっていたが、

「どっから来たのかい」

と、声を掛けられた。コロナウイルスをも気にしていたのだろうか。もしかしたら営林署の方かもしれないとドキっとしたが、だとしたら拾うこともないだろうとすぐに安堵した。

家に帰って早速パソコンに向かった。

何枚も撮ったはずのヒメホテイランだけが映ってない。その前に撮った白いカタバミも、その後に撮ったツルアリドウシもちゃんと映っているのに、何ということだ。その前に転んだ記憶もない。何もシャッターを切ってないということか。いや、確かに、シャッター速度が遅いと思ったり、露出を明るくしたりしたのだ。どこか操作を間違っていたのか。あるいは出かける前にメモリーカードの容量を空けるために幾つかのフォルダーを削除したが、

ちょうどその削除の位置が上手くいかなかったのか。数枚映らないことは以前にも何回かあった。こうなると、どこかヒメホテイランの近くに写真撮影を無効にする仕掛けが設定されているのでは、部外者には森の神が許さないのかとか、猜疑心が途方もない妄想になっていく。

もう何も考えず、あっさりと明日早々に再訪すると告げる。

次の日の朝、曇天で午後は雨の予報だが、車を借りるために倅を街の北にある工場まで送って、そのまま青森市まで走った。眺望山の今度は東口駐車場に置く。九時半に登り出した。

先客が一人いて、径の先を年配の方がゆっくり進んでいる。早く目的に行きたいのだが、その人を越して撮影に時間をかけている最中に追いつかれヒメホテイの棲息場所がバレてしまう。道路脇に近い場所なのである。バレていいのかもしれないが、何か山菜でも探しているふりをして、男に近づいては径の脇を探し探しし、ようやく目的地手前まで来て、ちょっとした雑木林の中で時間をつぶした。

相変わらず曇天のままで、風が少し強い。「お早う」と声をかけるも、ヒメホテイは揺れっ放しである。今度は風が邪魔するかと、流れる雲を樹間に見上げながら風を怒りたくなったが、まずは露出標準で標準レンズを向けたまま一瞬静止するのを待つしかない。どうにか一枚撮る。今度は映っているか確認する。花との距離・方向を変えながら時間をかけ幾枚か撮ると、さてと、とマクロレンズに交換する。姿勢を疲れるぐらいに固定してはどうにか幾枚か撮る。その都度写っているか確認している。もう大丈夫だ。あとは絞り優先にボタンを固定し、プラス補正から段々にシャッター速度が遅くなるマイナス補正へとダイヤルを回しながら変えていく。それこそ静止するのを何度もじっと待つ。シャッターを押すたびに確認しているが、どれほど時間をかけ何枚写しただろう。ほとんど風と手振れで画像はぶれている。それにしても風は止む気配がない。幾枚かものになるのが撮れたから、もう良いだろうと観念する。

目的を果たしたから、ついでだからあとはのんびり頂上まで行って、中央コースを下ろうと思った。径を幾曲がりか緩やかな登りを過ぎると、風が弱まって陽も差してきた。雨の予報で見上げると確かに灰色を少し濃くした雲が流れてくる。少し逡巡しながらも踵を返し、走るようにヒメホテイへ戻った。着く前に雲の影に覆われ風も再び起こってきた。先程よりはましだろうと再度撮影に挑戦したのである。幾らかよりましなものが撮れたようだ。そして今更に気づいた。唇弁の先が広がって白い舷部を成すはずが、それが縮こまったままである。あのエプロンかスカートを思わせるものがなく、裸のまま距の両脚が丸見えなのだ。腿を隠そうと恥ずかしそうに両手で抑えたようなあの白いスカートがないのである。般若の面の白い鬚が、若奥さんのエプロンがないのである。今だから言えるが、純白のマスクをかけていないのだ。我ながら唖然としたが、すぐこれもまたいいと思うようになった。素顔

のまま、裸のままなのヒメホテイラン。

頂上を経て中央コースを下る。通ったことがあるのか記憶がなく、初めてのような気もする。ヒバ林はすぐ消え雑木林となっては杉林になる。倅と下りたことのある径であるのが蘇る。やがて松林に辿り着いては急降下し橋を渡る。あっという間である。

東口の駐車場から西口の管理棟に向かった。

駐車場は内真部川(ちまっぺがわ)沿いにあり、その対岸にもちょっとした遊歩道がある。橋を渡ってそこを散策し、ヒバ林へ登ってみては沢の奥のヒバ林まで行ってみた。運が良ければ、この辺でも簡単にヒメホテイランに出会えるのかもしれない。そして水芭蕉のちょっとした小群落。そこに、まだ莟だったが曙繻子蘭(アケボノシュスラン)に相違ない楽しみが増えた。

清閑なヒバの原生郁々と
翁去るわき布袋蘭咲く

結言

今年は四月下旬の十日(とおか)ちょっとの間に、幸運にも三十余年ぶりにヒメギフチョウとヒメホテイランに再会し、初めてルリビタキに出会えた。三十何年ぶりの今が、初めて目の前にパッと開いたような、それは閉ざされていた小さな黄色い希望と淡い紅色の愛が、いま瑠璃色を顕現してはそのなかで輝くような、そんな思いをもたらしてくれた。

ヒメギフチョウはギフチョウ同様にアゲハチョウの祖先種の特徴をもつ小型のチョウで、生きている化石と言われる。三千万年前の第三紀にすでに地球上に棲息していたとされ、二百万年前の第四紀頃に日本に渡ってきたといわれている。約一万年前に最後の氷期が終わるまで、幾度かの氷期を棲息地や形態を変化させながら生き延びてきたのだ。

両種は食卓の違いによって棲み分けており、姫の方は東日本に棲息し、岐阜蝶の方は上信越から西日本に棲息し日本固有種となっている。子孫をつなぐ面でも、オスは交尾のあと液を出し薄い膜のようなものをメスの交尾口につけ、この交尾板によりメスは二度と交尾ができなくなる生態にも何か考えさせられる。

また、「春の女神」とも言われている。芽吹きの季節の女神であるペルセポネーや誰もが好きであろうボッティチェッリの『プリマヴェーラ』を念頭に浮かべてしまうが、佐保姫も朧に現れてくる。東の山に、白く柔らかな春霞の薄衣をまとう若々しい女神である。西の山の、紅葉と黄金を織りなす秋の女神である妙齢な竜田姫より恋しくはないだろうか。光源氏の六条院における春の御殿の紫の上、その若紫もまた。

再生、誕生。ああ、春の妖精たち（スプリング・エフェメラル）と太古から季節が輪廻する。春の女神のお出ましだ。

ホテイランは属名でもあるが、学名での属名はカリュプソである。ヒメホテイランの方が基本種でホテイランは変種である。カリュプソはギリシャ神話のアトラスの娘で海の女神であり、覆い隠す意味があり、つまり棲息地が秘されていることを示すという。カリュプソは島に漂着したオデュッセウスを留めて何年も深く愛した。ついにオデュッセウスの望郷の念に押されては帰還を認め別れる。カリュプソはオデュッセウスを愛するあまり自殺したとも伝えられる。

メーテルリンクの「青い鳥」は鳩でもいい。文学上は幾らでも象徴的に思考し味わうことができる。瑠璃鳥といえばオオルリだが、ルリビタキは瑠璃三鳥の一つで「瑠璃色の宝石」ともいわれる。より身近な、幸せを呼ぶ鳥といえようか。

瑠璃色の鳥が告げ飛ぶ。隠れている命たちよ、みんな出ておいで！　春も盛りだ！

書物のほこり

黒石の観光りんご園からの一望は、絶景である。

りんご畑の中、バスも通れるやや急な舗装された農道を上り、振り向くと、津軽平野の南半分が広大に広がる。その平坦な景色に、均整のとれた麗しい岩木山が屹立し、裾野をなだらかに広げている。

そんな景観の間近に、黒石の街並みが見下ろせる。

その黒石に長内（おさない）は住んでいた。雨が零れそうだが、長内は傘を持参しなかった。駅まで時間があるので、少し中町こみせ通りに寄道する。何軒かの店前の上側にひさしが突き出て、それが連なったアーケードのような歩行通路。真夏の陽射しや強雨を遮り、冬は吹雪をも防いでくれ、藩政時代からの風情を今に伝えている。その通路での、少年の頃の遊びを追憶する。道路向かいには、詩人・劇作家であった秋田雨雀の記念館があり、昔は近くに良書の多い古書店もあった。かつて、津軽藩の分家として黒石藩をなし、近代には弘らにもう「誰（た）そ彼（かれ）」である。とにもかくにも、日が沈み日暮れである。

長内の自宅から黒石駅まで、寄道なしで徒歩十分で着く。黒石駅は私鉄の弘南電鉄黒石線の終着駅である。彼にとっては始発駅であり、昔はそこから国鉄の黒石線も走り、黒石温泉郷や温川（ぬるかわ）温泉、十和田湖へと何本もの弘南バスが発着し、少年時の彼にとっては人海の駅だった。しかし今やバスも本数が減っては、作家の吉川英治ゆかりの山荘がある温川温泉も数年前についに前に比肩するほどの文人を輩出した文化的な街であった。

そこから回遊通路で横町の隠れ広場に出る。その小さな広場の脇に、洒落た造りの細いせせらぎがあり、流れる音は野山を思わせる。横町の通りに出ると、学生時代に行きつけの喫茶店があった。曜日ごとに高価なスピーカーでジャズとクラシックを交互に流していた。中町にせよ横町にせよ、今は観光用に小綺麗に整備された区画であり、日曜日にはちらほら観光客が見受けられる。しかし、肝心の住民の姿は随分と少なくなった、そう長内には思われた。

長内は駅の時間を気にした。夕方を、気象庁は午後三時から六時の間とし、放送局では日没の一時間前後、天文学的定義では日没の三十五分前後の間とするが、長内は何となく日没の一時間前から三十分後あたりが夕方に相応しいと思っていた。彼は分厚い眼鏡をかけていて、なおさ

閉館となった。私鉄の黒石線も今は車両連結が二両より多いことはなく、長内が乗った六時近く発の車両は、黒石市内にある高校二校の生徒たち十数人と老人四、五人ぐらいで閑散とした席である。

まだ黒石市内である最初の駅を通過すると、すぐ浅瀬石川（あせいしがわ）を渡る。この川は、長内が少年の頃に水浴びや川釣りをして遊んだ一番の思い出の場所である。橋の上流に白鳥飛来地の標識と観察場が設けられているが、今の長内はむしろ下流側の小グループの白鳥を見るのが好きだった。カルガモの他にマ

ガモの群れもいて、津軽平野の河川あちこちで見られる主な水鳥をそこで観察できた。浅瀬石川の架橋を走る音にそんな情景を一瞬脳裏に浮かべては、手に持っていたメモ書きに返す返す目を配り、何やら暗記、或いはお浚いをしているようだった。

黒石駅から三十分で終着の弘前駅となる。途中十一の駅を通過するが、そのうち長内の学生時代以後に設置された新駅は、田舎館村に「田んぼアート」、旧尾上町に「尾上高校前」、旧平賀町に「柏農高校前」、弘前市に「運動公園前」の四駅である。この黒石線も、後三者の新駅設置の頃は乗客もまだ多く多少活気もみられたが、徐々に人口が減少するに従い乗客は益々減ってきた。営業が欠損となる年度が、屡々紙面などで報じられている。そんな黒石線の途中駅で、乗降客数が最も多いのは平賀駅である。そこは平川市の市役所所在地であるが、その平賀駅から一つ駅を過ぎると、第一級河川である平川の鉄橋を渡る。平川は平川市と弘前市の境界線を成していた。

鉄橋を渡る音に長内は眼を覚ます。最近読んだ幾冊かの本の作者名とタイトル、それらの概要を頭のなかで復唱しているうちに、車両の揺れとレールの継ぎ目によるリズミカルな音にいつしか居眠りをしていた。それでいて、左手に握っていた小さなメモ書きは落ちず、半ば緩んでいた掌に残っていた。メモには、ここ一年間に読んだ本のタイトルと著者名がジャンルごと年代ごとにびっしり小さく記されていた。それはパソコンで打ったものを縮小コピーしたものだった。人が見たら、高校の定期試験で世界史でも暗記するためのメモ書きのようなものと思うだろう。

鉄橋の南側は、平川が川幅を広げて幾らか淀み気味になっている。そこによくアオサギ一羽とカワアイサの番がいる。数年前から、ひと冬何回か、長内は写真撮影のためにそこを訪れていた。時にダイサギの番や白鳥の小さな群れもいる。アオサギはここでは留鳥だが、他の冬鳥たちと少し離れ、ぽつんといつもじっとしている。その孤独感に、彼はどこか自分の写像のようなものを覚えていた。そして、アオサギが離着する姿を土手の上から眺めるのが好きだった。飛翔時の白と黒のコントラストの翼に、まだ見たことのない鶴を想像していた。ただ、そんなアオサギの飛ぶ姿を一度も上方から上手く撮れたことがなく、そのためにもここをいまだ訪れていた。

長内は黒石の市役所職員である。企画財政部に配属した期間が長く、その部内でも税務課と収納課が長かった。市県民税や市税の賦課の業務が主で、そんな中、些少楽しさを覚えたのは固定資産税の調査とその賦課だった。街の人たちの生活ぶりが知れ、さまざまな家族構成と家庭環境を知ることができ、家庭生活の急変や突然の破局などを目の当たりにした。そこに何か長編小説でも読んでいるようなものを感じていた。

もう三十数年も前になるが、長内は弘前にある大学で国文学コースに在籍し、卒業論文は小林秀雄だった。学生時代に大学の図書館にある小林秀雄全集をほぼ読破し、小林が研究していた志賀直哉や本居宣長は勿論、ドストエフスキーやヴァレリー、ベルグソンにも夢中であった。加えてロシア・シン

ボリズムの詩人たちや中国の漢詩人、万葉歌人から日本の現代詩人まで渉猟（しょうりょう）した。ランボーらフランス象徴主義などは高校時代の対象であり、早くも中学時代に中原中也や立原道造を愛読していた。

大学卒業後十年ほどは書籍の購入に夢中になり、読了よりも積読の方が床にかさばっていた。子育てから解放された後も、心情的にはまだ学生時代の文学的余韻が続き、どうにか読書は継続し、特に連歌や俳諧連歌に魅惑されては、学生時代から周囲では自他ともに認める芭蕉ファンだっただけに、ついに正岡子規以後の俳人たちの句集にも手を出し、俳句の世界にしばらく夢中になった。

長内はいま仕事の方は広報情報システム課に移っており、パソコン操作はほどほどながらそれなりに業務をこなし、知的業務に携わっている感を深め、仕事ぶりも年季が入った自信のあるものだった。要領よくかつ時間配分を上手くこなして、退勤時刻より少し残っては颯爽と退庁していた。そして、夕食後、読書に夢中になっていた。今は文学上の最後の仕上げかのように、世界文学の名作中未読な長編に挑戦していた。若い時に中断したままの『ドン・キホーテ』を改めて読み直し、部分読みでしかなかったルネサンスのボッカチオの『デカメロン』とチョーサーの『カンタベリー物語』を読んでは、ラブレーの『ガルガンチュワとパンタグリュエル』を読書中である。

今宵、文学仲間との飲み会でその話ができることで、一人車中で悦に入っている。思わず乗客がいるのも忘れ嫣然（えんぜん）まがいに一笑した。乗客に気づき、すかさず目尻を上げ顔のほころびを直そうとするが、かえって破顔になり、続けざまにクックックと声が漏れるのだった。ふと、だれかの作品で同じ場面の描写を読んだような気がすると、興ざめし自然と姿勢を正した。その時、終点の車内放送が流れた。

古川（こがわ）の自宅から大鰐駅まで徒歩十分ほどだった。大鰐駅は弘南電鉄大鰐線の最終駅である。古川にとっては始発駅であり、三十分乗車で弘前市街にある中央弘前駅が終着となる。大鰐駅はＪＲ奥羽本線の大鰐駅と同じ駅舎であり、彼は賑わった往時を偲ぶ。いまはどちらの駅にも常駐の駅員はおらず、自動改札機どころか改札係もいない。私鉄の方は最終駅にもかかわらず、である。運転手が車掌の業務も兼ねるワンマン電車なのだ。大鰐町はかつて温泉町として全国に名を馳せた町であり、いまだスキー競技の全国大会が開催される点ではまだ名の知れた町かもしれない。また、ＪＲ線上り方面の駅二、三先に碇ヶ関温泉郷が秋田県境まで幾つか散在し、多くは大鰐駅前始発の弘南バスを利用していた。しかし、その区域の温泉郷は、新しいレジャーランド温泉ができては消え、歴史のある秘境の温泉も消えていき、昨今ついに湯の川温泉が、人気の高かった最後の旅館が廃業し閉鎖となった。さらに、町にあった高校も、弘前の高校の分校となってはついに廃校となってしまった。バス停看板も赤さびたままである。古川はむしろその看板に昔の駅の人混みをより懐かしんだ。

大鰐線は黒石線と同様どうにか二両で走行しているが、こちらは上りの電車に学生服の姿は余り見られない。老人たちがちらほら座席に見られるだけである。午後の下り線に学生服が幾らか見られるのは、生徒たちが登校する時、自家用車を利用しているからである。家族の誰かが弘前へ出勤するのに便乗しているのだ。古川はそんな車内に寂しさを覚えながらも、この夜の飲み会を楽しみにしていた。異性愛というものに無関心になりつつある年齢の彼にとって、それはまるで逢引に出かけるような興奮を呼び起こすものだった。電車が走り出すと、すぐ平川の鉄橋を渡る。そのゴトンガタンという大きな走行音は、尚更に興奮を増させた。それは子供の頃の、弘前公園の観桜会に行く時の歓喜をも想起させるものだった。

古川が通学していた後に、大鰐線は「石川プール前」「東奥義塾高校前」「聖愛中高前」の三つの新駅を設置した。黒石線より利用者は少なく、再三存廃問題が起こり、近年ついに廃止の話が出たが、沿線の弘前市や大鰐町、経済団体などが協力して何とか存続することになった。昨年の春から秋にかけては、誘客の目的で人気アニメのラッピング車両として走行した。車両に貼り付けられたのは『ふらいんぐうぃっち』というアニメ漫画で、弘前が舞台であり、テレビアニメ化もされたという。その主人公たちが大きく車体に表され話題になった。作者の石塚千尋さんは弘前市の出身で弘前に在住という。

大鰐駅から三駅を通過しながら、河川の平川に少し離れては近づきほぼ沿って走っている。その平川を旧石川町で鉄橋を渡り、石川駅となる。

古川はその鉄橋を渡る時、少年時代にこの鉄橋を走り渡る競争をしたことを思い出した。近所の学童四、五人で自転車をこいで鉄橋近くまでやって来ては、電車の走らない時間帯に鉄橋の上を歩いて対岸まで行く。対岸にある大仏公園で遊ぶのだ。鉄橋は大仏公園までの近道でもある。そして最後の遊びが、帰り道でもある鉄橋を走り渡るのだ。故意に、遠く電車が走って来るのを確認してから、足の速い者の順で一斉に橋の向こう岸まで走るのである。枕木の下には砂利がなく、枕木と枕木の間に広めの隙間があって足下に流れる川が見える。二本のレールの中央を並行に走っている細長い板を走るのだ。電車が橋に至る前に渡り切らなければならない。ある日、足の遅いどん尻が、遊び疲れもあってかあわやというほどにどうにか渡り切り、すぐ列車が警笛を鳴らしながら通過した時には皆が冷や汗をかいた。そしてすぐ、どん尻も含め皆がそこから蜘蛛の子を散らすように逃げたものだった。その後、子供らに代々伝わってきたこの危険な遊びは誰もしなくなった。

石川駅からまもなくＪＲ線を直下に跨線橋を上り走り、高台にある東奥義塾高校前駅となる。この跨線橋は十年前に老朽化の改修工事を行っているが、その時も沿線自治体などが助成金を出しているという。東奥義塾高校前駅から少し道路を下るとＪＲ石川駅がある。子どもの頃は、石川近辺の人たちがタクシーや車の行先を述べる時、電車の駅までとか、汽車の駅までとか区別していたのを面白がった。高校生になって弘前でも同様に区別しているの

を知り、黒石線はともかく、むしろ偏狭な大鰐の辺鄙さを恥じたことも思い出す。

古川は大鰐町に住む病院の事務員で、大学時代に長内の一級後輩である。高校時代から文学に親しみ、大学では独文学コースを選び、卒業論文はハイネだった。卒業後はドイツ文学を中心に西欧文学全般まで広げた。そのなかには当然ながら古代文学やオーストラリア文学も含んでいる。同時に芥川賞作家と人口に膾炙する現行の人気作家もよく読んできた。例えば、村上春樹はすべて読んでいるファンでありながらも、文学的にはアンチ・ハルキストだった。一方、今回の飲み会メンバーを主にした飲み会などで、時折の長内との文学談義に感化されてか、日本の近代文学やさらには古典文学にも読書領域を広げ、次第にその占める割合が増えてきた。例えば『源氏物語』は原典を参照しながら三種類の現代語訳を読み、その中の和歌への関心から和歌そのものにも興味を持ち、代表的な万葉歌人から現今の著名な短歌歌人まで手を伸ばすようになった。次第に短歌のみに焦点を絞り、中央紙の歌壇欄に投稿するようになった。そして、一度選ばれたときの選者に誘われ、その選者の結社の会員の一人が主宰する某結社の会員となる。大鰐には県内屈指の女性歌人がおり、地元のその結社や弘前の名のある幾つかの結社から入会を誘われながらも、ずっと加入を遠慮してきた。なお、古川はドイツ文学が専門であっただけに、ドイツ哲学を中心に哲学書も多く読んでいる。殊にフッサールやハイデッガーの現象学を好んでいた。そして、クラシック音楽が大好きで、ドイツ音楽を中心に中欧、北欧、次いでイギリス音楽も好きで、ＬＰとＣＤ合わせて四、五千枚所持していた。それにはシュトックハウゼンやブーレーズ、メシアン、ネオ・ロマン、フランスのスペクトル楽派やドイツの音響楽派、二十世紀最後の楽派と言われるドイツのヴァンデルヴァイザー楽派らの現代音楽も多く含まれていた。オーディオにもそれなりに金を掛け、弘前で開催のコンサートにはよく足を運んでいた。音楽を、音楽としてまずは純粋に楽しみながらも、音楽鑑賞は文学の一環であると捉えていた。特にドイツ歌曲を愛していたのは言うまでもない。

電車に二十分も乗っていると、聖愛中高前駅となる。この辺りから彼の気持ちが若返る。次は、彼が大学時代に降りた弘前学院大前駅、その次が高校時代に降りた弘高下駅と続く。弘前学院大前駅から学生らしき男女幾グループが乗車し、弘高下駅からも小グループが乗車する。学生たちは繁華街に飲みに行くのだろう、そう思うと、古川も学生時代を思い出し気分が高揚するのだった。

対島（つしま）の自宅は街並みから離れた集落にあるが、そこから徒歩二十分でＪＲ五能線の板柳駅に着く。二つ先の川部駅で五能線は終わるものの、同じ車両のまま青森からの奥羽本線となり、板柳駅から終点の弘前まで三十分ほどで行ける。ただその川部で、電車の進行方向が逆になるため、対島は少年の頃まで決まって川部で異様な空間感覚を覚えていた。しかも、その頃まだ川部

駅から黒石まで国鉄も走っていて、少年の彼にとって川部駅のホームと列車の並びは壮観なものがあった。

対島の乗った電車はその川部駅で方向を変える。ここで今でも時々、秋田の大館からＪＲ花輪線に乗り、十和田南駅で同じく電車の進行方向が逆になることを連想する。幼少の時から川部駅で何度も体験済みながら、初めての十和田南で進行が逆になったあの時、なおさらに異様な空間感覚が生じ、不安にさえなったものだった。

対島は高校の英語教師である。板柳町に在住し西北津軽の幾つかの高校が主な勤務校だった。その地域の英語検定試験の実行委員でもあった。弘前の大学で長内の一級先輩で、英文学コースに在籍し卒業論文はヘミングウェイだった。

高校時代に文芸部に属し、家では父のステレオでクラシックの名曲に親しんでいたが、大学時代はジャズを聴くのに耽溺し、授業を終えた後あるいは授業をさぼってひねもすジャズ喫茶に通っていた。夜はジャズ仲間とそのまま飲むことも多かった。当時の前衛ジャズであったオーネット・コールマンやセシル・テイラーから、コルトレーンの晩年やアート・アンサンブル・オブ・シカゴなどの集団即興演奏も好んで聴き、バド・パウエルやエヴァンスが特に好きで、中学生の時までピアノを習っていたがために後者の嗜好を強めていた。そんなこともあって、黒人詩人やシカゴ・ルネサンス、ジャズ・エイジの作家たちに興味を深め、仲間と会う度に卒論に取り上げたい作家をころころ決め直していた。結局は「失われた世代」の誰かとフォークナーのどちらかにしようと、かなり神経質になり苛立っていたが、テーマ提出日にあっさりと希望指導教官名と「ヘミングウェイとジャズの比較」と書いた。そのくせ、テーマを決めてから専ら読んでいたのは当時流行していたニューヨーカー派の作家たちだった。そして、授業以外で読んでいたのは訳本でばかりだった。

教師になってしばらくは業務に専念し、主に日本の今日の著名詩人たちの高価とも言える詩集を購入しては読んでいた。同時に芥川賞作品や芥川賞作家、および角川春樹、や五木寛之、そして渡辺淳一、いまや村上春樹である。常に話題作は読まなければと、文学愛好家として、いや文学専門家として強迫観念のようなものを抱いており、関連する言語学から心理学、宗教学までの人間諸科学や芸術論を含むその読書量には周囲が敬服していた。ただ、対島は青森市や十和田市の高校にも赴任歴があり、転居するたびに古い書物やＬＰ、ＣＤを処分・整理し、本棚は始終四、五本で、ジャズのＣＤもこれぞというものだけ五百枚ほど残している。赴任校では執拗に図書委員を希望し、図書室の本を読むことも多かった。

対島は教師になってからジャズは勿論、クラシックのＬＰやＣＤもそれなりに購入するようになっていた。長内と同じくバッハ、モーツァルト、ショパンが中心で、ジャズ・ファンだけにロマン派よりもバロック音楽を好んでいる。そして、ストラビンスキーやバルトークら原始主義とヴァレーズら打

楽器主義、ネオ・バロックともいうべきマルティヌー、ポリ・リズムのシュニトケなど現代音楽も少し聴いている。偶然性のジョン・ケージは学生時代からのファンで、アメリカの前衛作曲家以外にバーンスタインらジャズっぽいものからロック風とも言えようミニマル・ミュージックまで及んでいる。古川と同様、対島にとってジャズは文学の延長であり、アメリカ現代音楽も文学の一環であった。ジャズに関しては居住付近で開催するライブの他、毎年南郷ジャズフェスティバルや秋田での著名人ライブ、仙台の定禅寺ストリートジャズフェスティバルにも出かけている。

対島の乗った電車は川部駅からすぐ鉄橋を渡る。最初の川は黒石から流れてくる浅瀬石川である。この夜会える長内のことを思い出す。同時に日本文学、殊に短詩形文学を思い出す。すぐ次の鉄橋は大鰐町の方から流れてくる平川の架橋である。電車のスピードも増しており、ゴトンガタンというよりゴーという大きな音がする。自ずから予想していたかのように古川を思い出す。同時に西欧文学とクラシック音楽を思い出す。そして、見えないが、鉄橋のすぐ下流側で両河川が合流する。いや、浅瀬石川が平川に合流する。対島はその川合の内側に行ったことがなく、いつかと思っているうちに大分歳になった。その平川も、すぐ国道七号線の架橋の下を流れては藤崎町の白鳥飛来地を経て、まもなく岩木川の支流となる。その岩木川は板柳町の街並みの傍らを下り、その辺りが彼の少年時の遊び場であった。少年の時一度、幼馴染たちと平川と岩木川の川合から板柳の街並みから架かる幡龍橋（ばんりゅうはし）まで、でっかいタイヤを浮き輪に川下りしたことを思い出した。彼は四、五年前、俳句結社に入会し、毎月の定例句会に出席していたが、宿題句はほとんど家でひねっているものの、時に写生句もひねりたく、そんな時は幡龍橋付近の川原を訪れていた。

対島が俳句に興味を深めたのは、長内の感化による。大学卒業後のまだ若い頃から、長内の国文学コースの仲間に対島の英文学コースの仲間が加わり五人でどこかの温泉一泊で句会を行うようになった。さらに長内が捌（さば）き手と言おうか宗匠となって連句も楽しむようになった。俳諧は座の文学であることを長内は頻りに強調していたが、連句は手紙でもやるようになった。一応式目という伝統的な規則を尊重しながらも、長内の指示で月と花の定座を守るだけで自由連句に近いものだった。芭蕉が愛した句数で今日まで主流とされる三十六句の歌仙を、長内の評釈付きで何巻か巻いたのである。そんな遊びが終わってもう十年にもなる。長内に会う度に対島は句会や連句の再開を誘いかけるのだが、彼は一向に乗じない。

対島が入会した結社は、弘前では名のある結社の一つだった。板柳と弘前の間の藤崎町には、中央から夫婦で移住してきた全国でも著名な女性俳人がおり、その俳誌も全国的に知られているが、その某会員から誘いを受けたものの、恐れ戦くばかりだった。加入した弘前の結社でも三十人もの会員がおり、いまだ新米同様である。

対島はこの夜の飲み会で何よりも俳句について語りたかった。結社同人以

外の文学好きに、特に長内に作句上の近況や昨今興味を抱いた俳人について語りたかった。長内には結社の機関誌の他、月報も随時送ってはいたものの、昨今の知見を披露し直に会話を交わすことを何よりも楽しみにしていたのである。

和子（かずこ）は弘前に住んでいる。街の大学で長内と同期で哲学を専攻したが、勉学に身が入らなかった。卒論にプラトンを取り上げようとしたものの、まずはギリシャ語の勉強が不十分だった。当時、医学部のインターン生と交際し、その医学生が卒業し盛岡の県立病院へ勤務になると、和子は学業をあっさりと放棄し彼の後を追った。五年ほどして彼に捨てられ、その後仙台に住み、十五年近く飲食店で働きながら糊口を凌いでいた。そしてついに、弘前に戻ってきた。と言っても、生まれは弘前ではなく函館であり、生家は医者の家系だった。弘前で小さなスナックを経営し、店には父の知り合いの医師たちを始め、街の物書きや音楽家たちも訪れ、店はそんな知的な社交の場となった。しかし、地方都市の人口減少と活気の衰えに来客も減少しつつあり、そろそろ店仕舞いも考えていた。

店に二つしかないテーブルの一つを対島が日曜日を指定し予約してきたが、敢えて定休日である次の日の月曜日にした。対島たちのためだけに店を用意したのだ。その月曜は幸いに祭日で、対島たちは出勤がない。そして自分も一緒に飲むつもりだった。久々に対島の仲間三人が来るのを思うと、経営は厳しいものの料理をサービスしたくなる。和子はスーパーでの買い物を普段より早めにし、飲み会前の賄に多く時間を割いた。対島たちが来ることを思うと、ふっと自分のこれまでの人生をも回顧するのだった。包丁で魚をさばいていると、ぽつんと涙が落ちた。盛岡では最後に辛い目に陥ったものの、幸せを深く味わった。仙台では多くの人たちと交流ができ楽しかった。殊に行きつけの喫茶店で現代思想のしゃべりをするのが楽しかった。流行の月刊雑誌『現代思想』で特集されるポスト構造主義やニュー・フィロソフィー、ニュー・サイエンスや科学の最前線などの思潮やその代表的な思想家たちを部分読みし、カントもヘーゲルも分からない癖にはやり言葉を交わし合う、そんな都会風なお洒落に浸っていた。時にそんなカタカナ用語を散りばめた詩も書いていた。でも、振り返ってみても、特にこれとして何かした訳でもない人生だった、あっけないものだった、そう思った。弘前でも店で多くの人たちを知ったが、それは商売上での話であり澆薄（ぎょうはく）なものに過ぎないとも思っていた。今夜は違う、自分も遠慮なく飲もう、そう決心した。酔いつぶれれば店に寝たままでいい。

和子は在学時代に古代ギリシャの延長として中世のスコラ、そしてデカルトまではどうにか代表作を読んだが、ライプニッツから少し難しく感じてしまった。人気のスピノザの『エティカ』は読んでもよく分からなかった。ロックは少し読めたがヒュームでつまずき、カントでお手上げだった。哲学は向いてないことを悟った。後は当時流行の実存主義関連の読み易い思想書は

かり読んでいた。和子は高校の時、カミュやカフカに興味を持ち少し読んでいた。そんな読書歴で大学も三年の中頃に、学内で長内と遭遇したのである。同じ文学科なのに気づくのが遅かった。最初に彼のベルグソン論を聞き、その後何度か会う度に彼の好きな文学ジャンルや詩の世界を知り、知らず知らずに詩作を始めていた。長内の傍らに決まって対島や古川などの仲間がいて、彼らとも知遇を得ることとなった。そして一緒に飲むことも屡々だった。

対島が初めて店に来た時、和子は信じられないと言わんばかりに驚愕した。店を開いて十年も経ていた。対島が高校教師になったことは仄聞していた。その対島が、店に何度か来た同僚に誘われ五人ぐらいで来たのである。学生時代の面影そのままであることにも驚いた。彼の方も驚いたようで、言葉に詰まっていた。その時、対島は同僚たちと予約していたテーブルに着き、恐らく上役が同席でもあったのか、対島は口数が少ないように思った。が、もしかしたら彼はずっと隙を窺い自分と話したかったのかもしれない、そうとも思った。彼女自身が対島と話したくて、心仕事にあらずでそわそわしている自分を感じていた。その日はカウンターが埋まっていた。誰かがトイレに立ち少しの間席が空くと、和子が期待したように対島は数回カウンターの椅子に半腰になり、お互いの卒業後の経緯について簡単に交わし合った。そして、対島から長内と古川の音沙汰も少し知らされた。対島が同僚とともに店を出るとき、和子が期待していた科白を放って手を振ってくれた。

「そのうち長内と古川を誘って飲みに来るから」

彼女は内心どんなに喜んだことだろう。他のお得意様の手前、変に儀礼を返したものだった。

「どうもありがとうございました。またのお越しをお待ちしております。」

和子は、学生時代に医学部のインターン生と交際する前に、対島の交際相手だった。対島は対島で和子と別れると同時に、近くの女子大に通う女学生と交際し出した。対島は鼻が高く口元が低く、目が大きく外人風な顔立ちで、当時から中折れ帽子をかぶっていて、文学科の仲間や後輩たちから「横顔がヘミングウェイに似ている」とよく言われ、周りの女性にモテていた。

その日の一か月後に、対島が長内と古川を連れて飲みに来た時には、和子はどんなに喜んだことだろう。カウンターに先客二人いたが、和子はドアの外に「ＣＬＯＳＥＤ」の札を下げ、内鍵を掛けてしまった。三人とも和子の来歴に一番耳を傾けてくれた。そして、学生時代の想い出話に耽った。

対島が店に来てからもう七年も経つが、三人は忘年会と称して毎年やって来る他、年に数回はやって来る。さらに対島は俳句仲間を連れ、長内と古川は街で同僚などの飲み会があった時に同僚数人を連れひょいと寄ってくれる。街の物書きや芸術に関わっている古くからのお客様は、老いを重ね足が遠くなっては姿を見せなくなる方も多い。客も年々減りどこか淋しいだけに、対島たちがやって来るのがどれほど嬉しいだろう。その対島も数年後に還暦を迎え、退職となる。すぐ長内、古川と続く。和子は還暦を迎えたら数年

で店を閉め、料理屋の賄婦でもし、老後は細々と暮らそうと思った。そして、たまに対島たちや馴染み客たちと何処かで少し会えれば、それでいい、そう自分に言いきかせた。対島たちは店を閉めるまで何回来てくれるだろう。今日一日も、大切な大切な日、そう思い、料理に腕を振るうのだった。

長内の電車は六時二十分頃弘前駅に着く。そして対島の電車が六時二十数分に着く。待ち合わせであった待合室の入口でタイミングよく出会う。弘前駅は随分と都会風に立て替えているが、駅舎も駅ビルも小ぢんまりし、人混みの時間帯ながら人が少ない。二人は声を交わすだけで駅からタクシーでネオン街にある和子の店へ向かった。彼女の店があるビル前で二人がタクシーを降りると、六時半頃に中央弘前駅に着いた古川がタイミングよく歩いてくる。

和子は店の内鍵を閉め、皆を歓待した。料理とお酒をテーブルに乗せ終わると、自分も一席に腰掛けた。

「今日は、ここが私のおうちよ。皆さん、遠慮なく飲み合いましょう。乾杯！」

いつものように各々の近況報告をする。毎々対島、長内、古川の順である。対島は最近聴いた県内外のジャズの生演奏や見た映画や演劇、東京で見たダリ展などの展覧会、旅行や登った山、時に将棋の大会などを挿入し、多趣味なだけに話が長い。その話に長内は民謡の合いの手を入れるかのように茶化した科白を放ち、対島自身も含め皆で笑う。次の長内もまた長い。凝っている盆栽や華道などで、テーマは少ないのだが、文学的な講釈付きだから長くなる。その講釈に対して時に今度は対島が疑問符を投げかける。そうかな、それは言い過ぎだな、それは間違ってないか、とか投げかけ、古川と和子がそれに同調する。長内は時々「素人の傍聴席は黙って」と言い放っては構わず続ける。古川は最近夢中になって聴いた作曲家や演奏家、読んだ画集の画家たちについてが主で、しかも要所だけかいつまんで話をすぐ終える。真面目な話し方である。

長内は結論めいて言った。

「美術というものは絵画ぐらいなもんだ。で、絵画はゴッホで頂点を築き、その後は凋落の一途を辿る、だ。コンセプチュアル・アートで終わった。」

またまた小林秀雄の『ゴッホ論』と『書簡集』を弁ずる。皆は耳にたこができている。しかも、陳腐な弁をまた付け加えた。

「まっ、美術で辛うじて残ってるのは、陶芸。私（わたくし）の茶碗、君たちは見たことあるだろう。」

そして付け加えた。これもまた耳にたこの言い分である。

「音楽なんて、モーツァルトに始まりモーツァルトで終わった。強いて挙げて前後にバッハとショパンだけ。」

小林と音楽評論家の吉田秀和に固執しているのだ。

和子はこの日珍しく多くを語った。いずれも入場料が無料か安価な店のお客さんたちの種々の展示会やミニ・コンサートを訪れたこと、それらの作品や演奏について感想を漏らした。それらには伝統音楽や特殊な楽器のコンサートも含まれている。平生は内容よりも人物の経歴や噂話について語ることが多いのだが、この日は違っていた。対島たちが知らない多くの人たちを和子は知っている。それだけに、内容的な感想に皆が真面目に耳を傾けていた。彼女の話題の中に、四人の学生時代に共通の知人の話が付け加えられた。国史学コース卒で高校の歴史の先生になり、郷土史の本を数冊上梓していることは皆が知っていたが、その彼が街では代表的なグループの書道展で、自作の短詩を自ら書いて披露していたのだ。和子はその雅号を以前から知っていたが、この前の展示で雅号の下に括弧付けで本名が銘記されていて気づいたという。その日は本人に会えなくて残念だったが、今度の展示会では是非とも本人と会いたい、と強く述べた。そこから学生時代の知人たちの回想と音信の話になり、ついには各人の恩師の話にまで発展した。

長内の恩師は早々と中央の大学に転任してしまった。対島の恩師は弘前に在住しているが、ずっと会ったことはない。古川の恩師も弘前に在住し、まだまだ街を代表する著名な詩人として活躍していて、古川はいまだ時々交流を保っている。和子は中退だったが、一応恩師がいる。しかし、その教授は既に亡くなっている。会葬することなく、線香の一本もあげていないのを深く悔やんでいた。和子の恩師の授業の一つが、必修に近い哲学であったため、対島も古川も、そして自主的に長内も受講していた。和子の話に皆、自分たちがかなり馬齢のみ重ねたことを悟り合った。

前座の次が本論である。和子を除いて三人がそれぞれの最近の読書を披露し合った。順番が戻って対島から話す。まず俳句についてのつもりが、最近読んだ量子力学の本を紹介し出した。前回の飲み会の時は宇宙論で、その前が地球史と生命論の本だった。いずれも分厚い本である。対島が言い終わらないうちに、長内が口を挟んだ。

長内は先輩の対島に対し「雅哉（まさや）」と名前で呼び捨てにする。対島が学生時代に先輩たちからそう言われていたのを、後輩たちもそのまま受け継いでいた。後輩たちにとっては、その呼称は敬意と信頼を表わすものであった。対島たちの大学の大先輩である本名が「津島（つしま）」の作家・太宰治じゃないが、津軽の人たちには「つしま」と発音し辛いことも素因だった。

「そんな難しい本が雅哉に読めるはずがない。読んだうちに入らない。」

確かにそうとも言える、と小声で言いながら対島は照れ臭そうに中断した。そして、負け惜しみを言うように付け加えた。

「でもなあ～。おまえたちも少しは自然科学の本を読んだ方がいいよ。最新の科学知識を身に纏うのは文士の嗜みだ。」

対島は他に最近読んだ小説幾冊かの後、幾冊かの句集を披露した。句集に関しては特に、いちいち長内がその点に関してはと講釈を挟む。対島が予想していたことである。対島は時々長内の発言に疑問を持ち、スマホで即座に

調べ、内容を皆に伝える。しかし、そうではない、と長内は反論というか、独断的な断定を下す。対島はだからこの場に来て俳句は後回しにしたのだが、案の定、いつの間にか長内の読書披露に移っていて、俳人や俳句に関する著名な評論家幾人かの著書を紹介し、それらを読むことを勧める。対島は苦笑いするしか仕様がない。それら評論家による作家論に広げては、長内が車中で復唱してきた書名と著者を並べ立てた。そして、どういう経路で繋がったのか、殊にボッカチオ、チョーサー、ラブレーらルネサンスの長編物語について弁じ、得意満々である。どうだ、と言わんばかりで、皆は感心しながらも、これが小林秀雄流だ、そうとも思った。今に始まったことではない。往々にして長内の独壇場になりがちなのだ。それだけに、長内が大変な読書家であることに皆が敬意を抱いて黙従してもいた。

今度は古川の番だと対島に促されて、古川は最近読んだ本を挙げた。ドイツの現代作家ケールマンの『世界の測量 ガウスとフンボルトの物語』というのだった。誰もケールマンを知らなかった。ウィーン大学で哲学を学びカントで博士号を得た作家で、天才数学者ガウスと大地理学者フンボルトを主人公にした小説である。抽象的演繹的な思考とアマゾンを探検する冒険的な帰納法的な思考。その対称性と面白い内容を簡単に伝えた。静かな語りだが、ときどき興奮し詰まっているのが皆に知れた。出版された翌年早くも『ダ・ヴィンチ・コード』や『ハリー・ポッター』を抑えて世界のベストセラー第二位にランクされたという。文学上の最新情報を敏感に追ってきた対島は少しショックを受けた。知らなかったのである。長内も知らなかった。皆が面白そうだねと相槌を打つや、長内が古川の方を故意に向き、付け加えるように言った。

「私（わたくし）、今読み出したばかりで名前をちゃんと言えないが、ロシアの現代作家で、何とかヴィッチ何とかスキーという作家の分厚い小説がある。これが現代ロシア神秘主義の内容で、君、ガウスとフンボルトの三人で鬼に金棒だな。」

長内は古川に対し普段「君」と呼び掛けている。古川が応えた。

「ロシア神秘主義ですか。先輩、それ面白そうですね。」

古川は長内のことを常々「先輩」と呼んでいる。雅哉や和子にはそのまま「さん」付けである。

次に古川はドイツの現代詩人ヨハネス・キューンの訳詩集を挙げた。現代の牧歌と言われ、この詩集によって一夜にして著名になったという。

長内のまた反論めいた言い草である。

「君、今時牧歌なんて。あれはテオクリトスやウェルギリウスに始まってロマン主義で終わったのだ。安直過ぎる。サンボリズムが抹消した。」

珍しく古川が言葉を返した。

「でも先輩、少なくともドイツでは戦後もレルケ、レーマン、そしてクローローやフーヘルといったドイツ詩壇を代表するような詩人たちが抒情自然派として主流をなしてるんですよ。ぼくは今でも、詩は抒情が命と思ってま

す。」

古川は普段「自分」と称するのだが、詩について述べる場合に「ぼく」と表現することが多い。

「ドイツはいまだ田舎だからだ。まっ、レルケの詩はいいが。」

長内の応えにすかさず対島が口を挟んだ。

「若い頃は夜の都会的なサンボリズムやシュール、そしてビート詩人や黒人詩人に憧れたもんだが、山を歩くようになって、もっと素直に自然を歌っている詩がだんだん好きになってきた。イギリスはいまだ田園詩や自然詩の伝統が根強いし、アメリカでもホイットマンやフロストの系譜が連綿と続いている。」

長内が総括し判定を下すかのように語気を強めた。

「現代詩はまだまだボンヌフォアやジューブを読みこなせなきゃいかん。カリブ海出身のグリッサンもいいよ～。」

そして長内は、話題が詩に移ってきたのに気づいて、ついでにと和子にも話を促した。

「私、何にも読んでない。日本の今の女性詩人の詩集を図書館から借りて読んでるぐらい。」

その図書館というのには、市立図書館だけでなく大学附属図書館も含まれていた。職業柄、平日の午後、大学に行けた。和子は両図書館から女性詩人どころか、かなりの詩人の詩集や訳詩集を借りては読んでいた。その範疇は古代ギリシア・ローマから、分厚く高価なペトラルカの『カンツォニエーレ』、その後の欧米の訳詩集、アジア・アフリカの詩集まで対象を広げていた。彼女が一番落ち着きながらも内心興奮していたのは大学の書庫の中だった。そして書庫の匂いを感じながら揺籃の底に夢見るような思いでいた。ただ、彼女は原書が読めない。8単位取ったドイツ語どころか英語も、日本の古典も読めない。そんな劣等感を強く抱きながらも、どこか書物の匂いに救われてはいた。

対島が応じた。

「吉増剛造の新刊詩集を読んだが、これまた傍線註が多く、相変わらず難しい。」

そして、あっと言わんばかりに付け加えた。

「村上春樹がどうやらギンズバーグを訳し出したらしい。」

古川が応えた。

「雅哉さん、村上春樹はまた長編小説を出すらしいよ。すごいもんですね。」

長内が割り込むように言い放った。

「村上春樹って何者だ。そんな作家がいたか。文学は大江健三郎で終わったのだ。」

皆がそれぞれ何か言おうとしたが、それを遮るように長内は続けた。

「君たちは焦点を絞らなきゃいかん。俳句なら俳句、短歌なら短歌、詩もそ

うだろう、その道に精進しなくちゃいかん。今のそんな、本当は古臭いままの作法の詩や小説を読むよりも、古典にこそ新しさがある。しかも…」

長内は少し間を置き、誇張して背筋を伸ばす。そして、右手をチョキにして伸ばした二本の指をしっかりくっつけ、テーブルの端の平面をバシッと叩きながら、

「短歌と和歌は違う。日本には和歌しか存在しない。」

と、語気を強めてしたり顔で言う。

また少し間を置き、同じ動作でテーブルを叩く。

「俳諧と俳句は違う。正岡子規がだめにしてしまった。」

一瞬の沈黙の後、和子が質問した。

「じゃ、詩はどうなの？　まさか漢詩と近代詩は違うと言い出すんじゃないよね。」

再々同じ動作で長内が応えた。

「その通り。そして近代詩と現代詩は違う。現代詩は最初っから無かった。鮎川信夫がネックなんだ。」

そして、皆が呆れて言葉が出ない間に彼は続けた。

「文学は古典を読まなきゃ分からん。読めば読むほど分からなくなる。それが文学というものなんだ。君たちに何が分かる。書いてる暇なんかないんだ。それが文学なんだ。」

対島が言った。

「へえ、それは屁理屈にもならん。書かないと文学にならないんじゃないか。何を言ってるかよく分からん。」

和子が肯首するや、長内は和子を睥睨し反論した。

「ただ書けばいいというもんじゃない。」

和子は当てこすりされた思いだった。街の詩誌で書店販売されているのが四誌、詩を含む文芸誌が三誌あるが、彼女はそのどの結社にも所属していない。職場の文芸愛好会にも劣るような薄い小冊子の私家版でしかない詩誌の同人だった。単にお店の客に誘われて同人になったに過ぎない。なにせ、詩を書き出したのは長内の影響もあることに感謝と共に引け目も感じていた。

長内と和子の視線がぶつかった。長内は二本指で強くテーブルを叩き語気を強めて言った。

「詩とは何か。」

和子が憤怒した。

「下手な詩で悪かったね。だったら、あんたが手本を書いて見せてよ。自分で言ってることを実証してみせてよ。」

「詩は書くもんじゃない。表現するものだ。心を、心の歌を表現するものだ。いや、表現されるものだ。それは言葉によってではない。なおさら書き言葉によってではない。」

対島が反論した。

「詩も俳句も言葉が命なんじゃないか。言葉に苦慮していかに内容を表現す

るかだよ。だからまず、言葉というのが重要じゃないかな。言葉はそれ自身の意味内容を表出し、同時に句なり詩行なりの内容をも包んでその言葉で伝えるんじゃないか。」

古川が対島に加勢した。

「抒情が表出されるのは言葉によってであり、言葉に頼るしかないと思う。あくまでも内容あっての言葉の自然な追従と言おうか。小説も文章があって成り立つのであって、その文章の綾が内容を深め心情を高める。先輩、そう思ってますが、そこに文学特有の醍醐味があるんじゃないですか。社会小説などは言うまでもなく存在価値がありますが。」

長内は堪え切れず怒鳴った。

「怒った。君たちに文学の何が分かる。おれ、帰る。」

私ではなく「おれ」を使った。本音である。

長内がすっくと立ちあがった。対島が見上げて言う。

「長内、落ち着いて座れ。」

和子は立ち上がった長内にすがるようにした。

「長内さん、私が悪かった。生意気なことを言って。ごめんなさい。日本文学は勿論、何でもあんたが一番なのはみんなが黙認してることよ。」

長内は黙って和子をどけた。

「ねえ、お願いだからもう一度座って。一緒にいつまでも飲もう。」

彼はドアをばたんと強く閉め帰ってしまった。

「あいつも仕様がないやつだな。酒が勿体ないから三人でも飲もう。そのうち戻ってくるかもしれん。」

古川がしんみりと言った。

「自分は時々、地方の大学で文学をやったことが何の意義があるのだろうと考えることがある。時勢に流れて母校に文学科が無くなったのは分かるが。文学って、中央で操作されたまがいものでしかないと思うこともある。ジョイスやプルースト、ヌーヴォー・ロマンなんて、いったい何だったのだろう。和歌は貴族や学者のもの。インテリのものとも言える短歌も似たようなものでしょ。で、たかだか、短歌に過ぎない…　第二芸術…　文学とは言い難い。自分なんかにとってはですよ。」

「おれだって、そうだ。英語教師になったから役立ったとは言えない。英語教育と文学は違う。面白くてやり出した俳句も、時に何とつまらない世界だと思うことがある。俳句の前の俳諧も、その前の連歌も、貴族や富豪商人のもの。遊び。所詮、第二芸術に過ぎない。文学とは言えんな。それでいて、おれたち誰も、そんな句集、歌集さえ出していない。おれも長内と同じ…」

そう対島が言い切らないうちに、藪から棒のように和子が大声で遮った。

「文学って何だろう。そんなものに興味を持った、こんな人生って何だろう。ちっぽけな命。私、神にすがりたい。信じるんじゃなくて、仏にすがるように神にすがりたい。」

「和子らしくない。落ち着いて、さあ、飲もう。」

対島が彼女のコップに酒を注いだ。

古川が慰めるように言った。

「空海や親鸞、道元はまだしも。仏教は一般にいやらしいような汚らしいような。和子さんには相応しくないよ。」

対島が付け加えるように言った。

「キリスト教だっていやらしいよ。仮面をかぶっていい子ぶって。苦しんでいる人をちっとも救ってくれない。政略的なイスラム教なんて論外だろうしな。」

キリスト教を信じていないが、敬服のようなものは感じ、ドイツ神秘主義やユダヤ思想など、その思想の深さを自分なりに理解しているつもりの古川は少し顰蹙する。

和子は、今度は聞こえるかどうか構わず、か細くつぶやいた。

「キリストとか、仏様とかじゃなくって。そんな限定される前の、もっと広いのか狭いのか分からないけど、それらの底にあるような原初の神さまに。そんな神さまにすがりたくなった。」

そう言う途中から次第に言葉が震え、彼女は涙をこぼした。しばらく三人とも沈黙したままだった。

「私も、帰る。」

和子は何かを決心したようにそう言い放って、パタンとドアを開け外に出た。「ＣＬＯＳＥＤ」の札が振り子のように揺れて、何度かドアにぶつかる音がした。

長内はネオン街を歩いた。祭日だが、月曜なだけに人は疎らである。客待ちのタクシーだけが無暗に多い。街の真ん中を流れる土淵川の畔に出て、川面にネオンが揺れるのが、泣いているように思えた。川沿いを進み、デパート前の蓬莱橋の下の狭い道を潜る。駅まで歩きたかった。九時半の最終電車には間に合わないだろう。でも、昔は走っていた十時半の最終が、今日は走っているように思えた。

長内は自宅新築の際に書籍の半分を処分し、昨今残りのさらに半分ほど古本屋に二束三文で処分していた。これだけはと残した残りも全部近いうちに処分しよう、もう文学は捨てるのだ、そう決心した。文学は所詮意識という狭い内界の虚妄に過ぎない、ネオン街もちっぽけな妄想、明日は観光りんご園に行って絶景でも眺めようか、そう自分に言い聞かせた。

夜更けも、長内にはもう夜半のように感じられた。住宅街の近道はひっそりしている。野良猫が現れ、径の真ん中で立ち止まる。彼に向かってぎらりと目を光らせ、ゆっくり歩き出し消えていった。彼はその猫とその行動に即物的なものを感じ、深い諦観を覚えた。雨が落ちてきた。

部屋と大通り

Mは二階の出窓付きの部屋で、引き出し付きのアンティークな座卓に原稿用紙を広げていた。まだ数行しか書けていない。窓障子は両側に開かれていて部屋の中は明るい。窓ガラスは中に空気が入っていて戦前に作られたものであり、横から眺めると歪んで見える。

座卓の天板の傷は誰がつけたのだろう、左右の把手(はしゅ)付きの引き出しには何が入っていたか。それにしても艶のない天板であると呟(つぶや)きながら、同人誌の締め切りまでに二週間しかなく焦燥していた。視線を縁側にある勉強机の方へ移す。縁側は一畳の空間に過ぎないが、椅子があり洋風な雰囲気が漂い、机上に英語かドイツ語の原書を置きたくなる。座卓の傍の出窓に誰か、女性の方でも腰かけていてくれたら。和服、それともロングスカートで、などと思ってばかりで果(はか)が行かない。

その一畳の縁側の、半間側にも障子付きの出窓があり、一間側は床からの大きなガラス戸になっている。かつてのこの部屋の下宿人は、出窓の障子を開けると飾り棚を置いてあり、棚には江戸趣味っぽい小物を並べていたという。そして、反対側の半間の壁には浮世絵の役者絵を幾枚か貼っていた。一間側の中央部だけが透明になっているガラス戸を花に埋もれたレースカーテンで塞ぎ、役者絵の壁の方も半ば寄席を思わせるカーテンで覆っていた。

そんな縁側の空間で一年近く義太夫を練習していたのだ。机の上に蓄音機を置き、生家から義太夫のレコードを持ってきていて、三味線を弾きながら唄の練習をしていたのだ。三百メートルほど離れたところに「竹本」の姓を名乗る義太夫の女師匠がいて、真面目に通っていたという。より近くに格がもっと上の男性師匠がいたというのに。女師匠は芸者上がりで、過去に悲恋物語を持っていた方だという。義太夫は浄瑠璃の語りの一流派であるが、その浄瑠璃の起源が牛若丸と宿の遊女の悲恋物語というから納得もいく。その義太夫から常磐津(ときわず)や清元などが派生してくるが、その下宿人はどうも殊に花街で発展した新内節に興味を持ったらしい。悲恋と女性の人生を歌いあげる哀調あふれる音階の語りである。そこには、列車で一時間半もかけて逢引にいく芸者への想いも込められていたのだろう。

その昔の下宿人、いやMにとっては住人であったが、今日までも人々に大きな影響を及ぼしているかつての住人を思いながら、しばらく窓の外の楓を眺めていた。枝葉の豊かな十メートルもあろう立派な紅葉(もみじ)である。紅葉か楓か。語源は「カエデ」の方が分かりやすく、古代の日本人が使っていた蛙手がカエデに転訛したといわれる。「モミジ」の方の語源はといえば、紅葉するという意味の古語動詞が名詞に変化したものといい、彼にはいまだよく分からなかった。花の時は、雄しべが放射状に広がっている雄花と、突き出した雌しべと短い雄しべを持つ両性花が区別できるほど窓に近い。もう五月も中旬である。楓のあの鮮やかな花は終わっていて、干からびている。だが、葉

はまだ若葉風な色である。彼は手のひら状に七裂した葉の先を「い、ろ、は、に……」と順に無意味に数え、何度も繰り返す。時折風が吹き、枝葉が大きく揺れ、さらにぶら下がった花の塊が大きく揺れている。彼はそんな楓に見入っていた。両性花の方は小さな実になっており、やがて風に飛ぶための二つに見えるプロペラが伸びる。風がなくとも、くるくると自ら風をなして飛ぶのだ。Mもこの身をくるくると飛ばしたくなった。原稿はまだ一枚目の半分にも至っていない。

私は、彼のこの下宿部屋に遊びに来た。彼は、何か好きな本でも手に取って読んでいてくれたまえ、と言い放ち、お酒を買ってくると出かけて行った。読書家の彼の本など手にする気はなかった。知的好奇心満々だったが、影響を受けるのを恐れたのかもしれない。しかし、本棚というものはなく、座卓にくっつけた和茶箪笥の中に本が並べられているだけだ。しかも、箪笥は小さな方であろう。しかしどこか洒落ている。下は引き出しが左右二個で、その上は大まかに左右に分かれ、左側は棚一枚で上部に引き違い戸があり、右側は小引き出しの上に棚が一枚。そんなどの棚にも本が窮屈に並べられている。表題や著者をちらっと覗いても、芥川龍之介と、教科書程度にしか知らない井伏鱒二しか名を知らなかった。

そういえば、街では進学校として知られた彼と同じ高校に合格した時、彼から某社の文学全集の一巻「芥川龍之介」をプレゼントにされ、入学前の国語の課題の読書感想文にその本を利用したのを思い出した。「羅生門」や「蜘蛛の糸」など芥川を初めて読み、異様な感覚を覚えながら感想文をどうにか書けたのだった。芥川の本を貰う直前に、兄から同じ全集の夏目漱石の巻をプレゼントされていたが、それは二年次へ進級の時に国語の課題に利用したといっても、文庫本の『それから』を買って読み、プレゼントの方は巻末の解説を利用したに過ぎない。凡そ文学には無縁であり、とにかく国語は苦手で参考書も持っていなく、「文学」という名称さえ知らないと言っていいほどだった。

箪笥の上にチェスの盤があった。

ところで彼は誰だったろう。私は石上玄一郎だったろうか。彼は太宰か。いや、石上は盛岡中学から創作を始めており、早熟なのは太宰と同様だ。彼は誰だったろう。私は確かに私でしかない。

こくりとし、Mは目が覚めた。原稿用紙は何も進んでいない。

思い出した。

床の上にステレオが置かれていた。ベッドのある八畳ほどの洋間である。義太夫ではない。モンク、セシル・テーラー、アイラー、アーチー・シェップの名を覚えた。そしてサルトル、カフカ、ジョイス、ヘンリー・ミラーという名を覚えた。ランボーもそうだ。その他に聞いたこともない多くの名前が列挙されたが、そんな中、記憶に残ったのはいずれも覚えやすい名前であ

る。特にローリング・ストーンズが好きで、すべての中で一番好きなのはボブ・ディランだと言い針を下ろした。文学とジャズ、ロック、フォークの世界である。その中にジョン・ケージの四分三十三秒があった。音楽とは信じられなかった。壁には白黒のそんなポスターが貼られ、ジャズのカレンダーが掛けられていた。壁に貼られた絵を剥がして見せてくれた。モネの「印象・日の出」である。

時に煙草の煙が舞う。モネの絵もそんな音楽も、Mには故意に下手にしていて何か突飛でしかないように感じられたが、狂気じみた熱情のようなものは感じた。ディープ・キスとはどんなものか。チェスではない。セブンブリッジを明け方まで。以上は一夜の出来事ではない。十回近い訪問での話である。

この部屋のずっと昔の下宿人は次のようであったろう。

学友たちが訪ねて来ても、お気に入りの一畳縁側は、舞台の幕を真似て作っており、それで塞いで誰にも見せない。文学を、殊にその頃夢中になって読んでいた江戸戯作文学を語って度肝を抜かしてやる。そして、生家から持ってきている世界の画匠の画集を広げ動転させるのだ。あとは部屋の隅に置いた蓄音機で義太夫を聴かせ、得意げにレコードと口ずさみ、チェスを指して文学のことは忘れさせる。時に落語の口調で江戸っ子気取りで笑いを誘い。義太夫とチェス以外は、大事な彼だけの世界なのだ。

数日後、Mは街の物書きたちの総会に出かけた。会場は商業施設でもあるホテルの中だった。ホテルは繁華街の一画である土手町十文字の西北側の角にある。

総会の前に街の図書館長の講演があった。館長は歌人としても著名な方である。総会後の懇親会は欠席した。欠席理由は金がないからだった。自分が事務局をしている総会や懇親会、所属する幾つかの年会費、朗読会、同人誌の発行等で五月は何かと金が消えていく。事務局長と副会長が、空いている席があるから遠慮なく座っていいよ、と言ってくれたものの遠慮した。ビールよりも珈琲が飲みたくなった。

会場はホテルの四階だった。階段を下りて三階からエスカレーターを利用する。飲食店街である二階にジャズを流している気に入りの茶店があるが、Mはそのまま一階まで下りる。一階は紀伊国屋書店だった。三週間ほど前、惜しくも閉店となった。街の新聞社から貰った図書券で、いつもは、いや図書券を貰うことは滅多にないが、訳詩集を買うのだが、今回は久々に哲学書を買おうと思っていた。書棚に、適宜な価格でジャック・デリダの未読の訳書があったのだ。紀伊国屋書店で最後に、思い出としてもデリダを買うつもりだった。哲学書や自然科学の入門書は、一般市民ながら大学の生協の他に、ほとんどここで買っていたのだ。だが、羞恥と悔恨を覚えながら二割損失で図書券を煙草銭に変えたのである。無職になって、何度チケット屋に通った

だろう。切手を持って、コインを持って、そして図書券である。リサイクルショップへの本とCDについては思い出したくもなかった。流石に鉱物は変える所がなかったがと、Mは一人苦笑した。この書店で外国文学や安価な種々の画集、パソコンと天体やカメラの本、動植物の図鑑をどれだけ買っただろう。山登りのための二万五千分の一の地形図も随分買ったものだ。いずれも宝ものであり、それらは手放していない。本屋でどれだけ知人と出くわし、また集合場所にしたことだろう。そう思うだけに、Mは増々悔しくなり、そして喫煙したくなっては、すべては煙と消える煙草かと苦笑を重ねた。

外に出た。土手町通りである。左に小さなパフェがあり、右側に小さな小間物屋がある。Mは右の方に足を向けた。東西に伸びる土手町通りは、ここの十文字から西側のお城のある公園へ向かって蓬莱(ほうらい)橋までが中土手町である。距離が長いがあまり用事で訪れることがない上土手町と、短いが頻繁に訪れるより繁華な下土手町との中間を占めている。中土手街と下土手町は公園へ向かう二車線の一方通行である。Mはそのまま通りの右側の歩道を進むことにした。小間物屋を越すと駐車場になる。ここにもかつて「花邑(はなむら)」という本屋があった。学生時代、文庫本にも古本屋にもないサルトルの著作集を幾冊か日を挟みながら購入した。大学の図書館も利用し、哲学書を除きサルトルの文学的作品を全部読んだのは、書簡集と日記を除いて全部読んだドストエフスキーのあとで、それは二年次の時だった。「花邑」はその後衣料店になり、数回ぐらいしか入ったことがない。その衣料店も消えた。

右手から大通りにぶつかってくるすぐの小路の両側にどんな店があっただろう。ちょっと往復してみる。家族で入った中国料理店だけは記憶があるが、その店は今はない。この辺りは、今ではほとんど店舗がないように見える。やがて左右に歯科医院があり、左側には刻字家・書家である高校の同級生がいま道場にしている家屋がある。Mは道場に何度も入ったことがある。紙面にその会の展覧会紹介を二度も書かせてくれた。

同級生のその刻字家は毎日書道展でグランプリを受賞しており、Mの詩をよく刻んで全国的な展覧会にも出品していた。彼ともう一人の同級生である音楽家のAとの三人で一度だけコラボをしたことがある。大学や街の交響楽団の指揮者でもあるAは音楽活動で街の文化賞を受賞しており、昨年は県の文化賞を受賞した。五年に一度の同窓会で、Mが自作詩を朗読し、Aがサクソフォンで即興し、書家が大筆を持ち床に広げた紙上でその詩を書いたのである。Mのクラスは芸術家クラスと言われていた。それを思う度にMは二人に申し訳ないと思った。街でさえ無名な、何の業績もないMである。ただ、文学に関して救われるのは、同じクラスに、県都で長らく出版社を経営し地元の著名人の重要な書籍を次々と出版してきたNがいた。Nは毎月タウン誌を発行し長らく県都のペンクラブの事務局長をしながら、いまだ無名ながらペンネームで短編も書いてきた。確かに、クラスは芸術家クラスに違いない、そう思った。

三年次のこのクラスの担任は太宰治研究の第一人者ともいわれたS先生だった。Mは国語という授業を初めて知ったような思いで、この頃、密かに文学を生涯の趣味にする決意をしたのだった。

道場の道路向かいにはかつて何があっただろう。知人の女性ピアニストのフランス料理店ができたばかりだ。彼女はドイツ音楽、特にシューマンが好きで、街の大学ホールでの二度のコンサート歴を持つ。その隣が按摩・マッサージ屋で、次にレンタルギャラリーのスペース・デネガとなる。Mはデネガには何度足を運んだことだろう。絵画展などの展示室と演劇や朗読の行われるスペースがある個人施設で、かつて芸術論をぶちたくなるような粋な茶店もあった。パブはまだあるのだろうか。いつだったか二度、若手では街で一番の洋画家だと思っているSと飲んだことがある。マスターは黒人だった。その画家Sが参加する展覧会にはMは今でも出かけていた。そうだと、彼に手紙を出さないといけないことを思い出した。

大通りに戻り、前の続きとして西に進む。眼科の次は何の店なのだろう。そして昨今空地になった空間を実に殺風景に思った。ここの建物の二階に高級感を与える素敵な茶店があった。スピーカーも良かった。そんな思いで更地を過ぎると、少なくとも高校時代からあった万年筆屋である。高校の英語の先生の生家だとかいわれたが定かでない。若い時に幾度か文房具を買い、社会人になってコンサートのチケットも買ったことがある。この万年筆屋の前後の建物が記憶にない。

もう大通りを切断するかのようにバイパスが横断する。バイパスのところにどんな店があっただろう。子どもらと入った玩具屋はどこだったろう。そこでも、あの楕円形の穴銭である天保通宝を買ったはずだ。他に買ったのは将棋かトランプか、いや花札だったろうか。少なくとも学生時代に、麻雀だ。牌の表を生家の回転ヤスリで削り、各牌にカタカナで五十音の一字を、彫るのは傷つける程度で何色かの油性ボールペンで書き、哲学者や文学者、芸術家の人名作りの新しいゲームを作ろうとしたのだ。音符は省略した。色と音符は追加点のしくみであったが、組み合わせや空想計算が面倒でもあった。ほぼできたが、配牌とか点数は麻雀に似せ、国士無双、大三元、四喜和、字一色、緑一色、清老頭、九蓮宝燈に倣って役満はプラトン、デカルト、カント、ヘーゲル、ニーチェ、サルトル、もう一人は誰だったろう。パスカル、スピノザ、それともベルグソン？　まだ現象学や構造主義も、分析哲学はラッセル以外に知らなかった。「ト」や「カ」を持ったらしばらく手放さない。炬燵で二人でも楽しめる。しかし、利用しないで終わってしまった。のちに確かに彼女とちょっと遊んだのではなかったか。何とも羨ましいほどの贅沢な閑暇である、Mはそう思い一人はにかむ。

そして、将棋駒作りのTを思い出した。Tは高校の同級生で、倫理社会のテストではいつも東大へ進学した同級生とトップを争っていた。Mは哲学に関しいつも両者に引け目を覚えていた。一方は大学の教授だが、Tは街の大

学を卒業後に神奈川の高校教師となり、退職するやいなや帰省し駅前に新居を構えている。彼の作った駒は、日本将棋連盟の本部がある将棋会館に、著名な作家と共に陳列されているという。四、五年前、街の藤田庭園で開かれたプロのタイトル戦である「王将戦」で、二度も彼の駒が使われた。そして昨年は、羽生善治氏２冠の国民栄誉賞表彰式で、首相への返礼の品として彼の駒が用いられたことで話題になった。Ｔは遊戯史学会の会員で論文も書いていた。ゲームはバカにできない、むしろ頭脳的な世界だ。Ｔが学生時代に英訳で読んでいたヴィトゲンシュタインを語る時に、何度かゲーム論とゲーム理論は異なることを強調していたが、Ｍにはその意味がいまだに分からない。

そんなことを思いながら、玩具屋は歩いて来たもっと後ろの方だったような気がしてきた。

信号待ち後、街中では幅広いバイパスを横切ると、高校時代から時に世話になった眼鏡屋がある。Ｍが初めて訪れたのは中学生のことで、父親が世話になっていた店であり連れられて来て、その時は患者のように思った。眼鏡をつけて試し歩きをした時、眩暈がして倒れそうになり不安になったものだ。そして、周りが鮮明に立体的に見えるのに驚いたものだった。

続いて青果店、中央食品市場、つい最近店じまいし惜しまれている時計店がある。二階建ての屋根の上は洋風の時計台となっている。明治時代に陸軍の御用職人が広告塔として建てたものである。中央駅を利用するＭにとって、駅舎を出て土手町通りへ早く入るに、この時計台を正面にして進む道路しかなく、時計台は大通りへの象徴でもあった。

思い出した。時計台への道に平行に、車が通れないアーケード風な通路があった。少なくともラーメン屋に食堂、そして何度か通ったスナックがあった。街の大学の農学部を中退した恰幅のいいマスターだった。ジャズよりクラシックの話題が多かった。イギリスの作曲家たちについての立派な本が置かれていた。懐かしい思い出が蘇り、思わずほくそ笑む。やがてマスターは中央駅から二つ目の駅前にＪＢＲのスピーカーを構えた「カルチェラタン」という名のスナックを構えた。名はラテン語地区の意味で、パリ大学を始めとする教育機関の多い学生街のことを指し、有名なパンテオンや広場、庭園もある地区といわれる。街の大学周辺では確かに唯一そこがそう言えるだろう。マスターとは相変わらずクラシックの話題が多く、マスターの要望でＭのレコードに幾枚かカートリッジの針を下ろした。そのうち何度もかけたのはスティーヴ・ライヒの「18人の音楽家のための音楽」である。ウィスキーに尚更に心地よくなるミニマル・ミュージックである。だが、「カルチェラタン」も姿を消した。やがてその近くに週末ごとにライブを行うジャズ喫茶ができた。

時計店の次は和菓子の最中（もなか）の老舗である開雲堂である。そこで働く男と出会ったのも、街のカルチェラタンの一画にある茶店であった。彼は俳優志望で上京したがやがて帰省し、街では今や著名な演劇鑑賞人であり俳人となっ

ている。

開雲堂の隣はマンションの一階に若者向けの衣料店、続いて美容室、ファッション店と続く。店名に苗字の付く棟方とか一戸とかに、いにしえの街の画家や詩人を思い出すのだった。そして、脇道へ右折する。

Mは何歳になっても貧乏性から抜け出すことができない。空き店舗を見ると、自分のことのように思う。そんな思いの時はいつも、訳書だが宝のように著作集を所持しているヘルダーリンとボードレールに慰められた。それはいまだ消えない若き日からの気分あるいは雰囲気である。気分、雰囲気、ともに実存主義を象徴する用語であろう。カフカの主人公たちに続き、若き日に職を転々とした際の無職の時の『嘔吐』のロカンタンである。この時も決してふてくされていないのだが、いや、むしろMは閑暇を楽しむかのように街路をぶらぶらしたくなったのだ。そして歩いている間に、学生時代によく通った名曲喫茶でアイスコーヒーを飲みたくなった。学生時代の特に、大学の図書館から借りた厚めのトラークル詩集をその店で夢中になって読み出したことを思い出す。卒業後も何か孤独感に襲われた時とか、近くにいた時はこの茶店によく憩った。しかし、ここ近年はあまり訪れていなかった。

店に入ると、ママさんが入口に近いテーブルに座っていた。

「あれ、たまに来てるの」

店はもう息子さんに任せていた。息子さんとは話したことはない。

「こんちは。たまに」

二階へ上る。昨今まで二階は喫煙可能だったが、禁煙になったのはいつ頃からだろう。昔は二階にヘッドホーン付きの座席が幾つかあった。リクエストができ、学生時代にはベートーヴェンのピアノソナタや弦楽四重奏曲の全曲を聴くことができた。ラフマニノフの前奏曲集が堪らなく好きになり、ペーター＝ルーカス・グラーフにより当時最も関心を寄せていた現代音楽以外にも無伴奏フルートの曲が聴けるようになった。社会人になってもよく訪れ、定期購読していたものの音楽月刊誌を、珈琲をすすりながら読むのが好きだった。ゆとりを覚え、つかの間、それは精神的には学生時代、高校時代からの思い出が積み重なる長い記憶の場でもあったが、まずは若き日の情熱やら純粋な世界に戻ることが出来た。そこに何よりも慰撫や再生の気持ちが含まれていた。

学生時代からこの店でいろいろな人と会話した。たくさんの会話の思い出が蘇ってくる。

ここで珈琲を飲みながら、音楽科の女学生が、これがいいよと石桁真礼生著の『楽典』を貸してくれた。

彼女を知ったのは、Mが三年次で一般教養の「音楽」の授業でであった。同じく授業を受けていた後輩の文学仲間が、顔もいいけど、あの鳩胸もたまならいね、と言って指し示してくれたからである。思い切って話しかけたの

だ。大学に近いからと、一緒に彼女の友だちの家に行った。彼女たちが合唱の一員として出演する街のオペラ研究会の発表会にも行った。市民会館での『カルメン』だったが、生まれて初めてオペラなるものを観た。彼女は歌うのも得意だけど、ピアノの方はもっと上手いのよ、と彼女の友だちは誉めそやしていた。

本を返す時にこの店で再会できた。彼女には所属する大学合唱部、当時全国的な賞を受賞している団体だが、そこに彼氏がいた。ちょっとの間の再会だった。ヴィヴァルディの「四季」が流れていた。

「「四季」の中で、「冬」が一番好き。ペチカのそばで。静かにいつまでも雪が降ってくる感じが」

ふくよかな白い手と、綺麗な唇。ほとんど眼を覗けなかった。つかの間でも何と幸せだったろう。心の中で、シューベルトの「冬の旅」が響き始めた。

夜によく二階のヘッドホーン席でリクエストをしていた。ウェートレスに頼んでいた。やがてウェートレスは同じ大学の、しかも高校の後輩であることを知った。鼻の高い横顔が素敵だった。

「ねえ、お店が閉まるまで待っていて」

彼女がしばしば飲みに行っている大学近くの小さな屋台へ向かった。歩いて二十五分ほどであろう。雨の日は愛傘風な時もあった。飲みながら文学や音楽、絵画の話をした。彼女はクラシックよりもジャズが好きだった。屋台はほぼカウンターだけで椅子も十個に満たない。屋台の老婆は寡黙で、時に大学の先生も座るが、閉店近くの時間帯だけに客も少なく、二人だけの方が多かった。

やがて彼女のアパートにも誘われたが、同じ屋根に彼女の高校時代からの親友も住んでいた。親友に会わせるためだったかもしれない。その時知ったが、彼女には他大学の医学部に許嫁がいたのである。高校の先輩だと言った。名曲喫茶にいた時から彼女の指輪を気にはしていた。いつだったか、ジャズ喫茶にも飲みに行った。

「しばらくちょっと淋しくなっちゃって」

煙草を吸う彼女の指輪がいつも輝いていた。

「彼が研修医になったら、わたし、大学を中退してでも彼の元へ行くの」

泣き出しそうだった。実に羨ましく思った。

この名曲喫茶ではミニコンサートや講話、詩の朗読などもあった。珈琲の味は、ここの店の味がずっと基準になっている。

いつでもどこでも女たちは美しい。そう思うや、抽象的ながら、見苦しいのは事の発端となる男たちの虚勢と忖度のない自慢たらしい放言だと怒りが込み上がり、アイスコーヒーもなくなっていて喫煙したくなった。もう店を出ることにした。ママさんがいる時はレジでちょっとした会話となる。

「学生時代の時とちっとも変わらないね」

「ママさんの方こそ、昔とちっとも変わらないで」

学生時代、店に置いてあったクラシック音楽の月刊誌を古くなったからと半年分を何度か貰った。

「わたしももう歳で、右の耳が聞こえなくなってきた」

「あらっ、そんなこと言って。私の方が十歳も上よ」

「ＣＤを四千枚持っていても、ステレオがステレオに聞こえない」

「うちのスピーカー、朝のうち調子が悪くって、壊れちゃったと思うくらい。わたしと同じ(おんな)でポンコツになっちゃった」

笑いながら話すママさんが若返って見えた。今でも絵を描いているのだろうか。

店を出た途端、特に周囲の店が気になった。街では有名な右隣の和風の料理店は閉店したのだったか。左隣は何の店だったろう。しょっちゅう店が変わっていた。もうすっかり様が変わってしまった。街のあちこちがそうだが、建物がなくなっては小さな駐車場となり、街はすかすかになってしまった。地方のどこの街もこんなものだろう。そう思うと、少し沈みがちになり茶店に戻って温かい珈琲をすすりたくなる。Ｍはどこでも時間をかけて一杯の珈琲を飲んでいる。しかし今ポケットにはお金が少ない。彼はサラリーマン時代もほとんど財布を持ったことがない。名刺もそうである。

かつて、名曲喫茶の道路向かいは洒落た婚礼用の衣料店があった。その路地側の隣の建物では、らせん階段を上ると茶店があって、そこはロックの店だったが、時にクラシックも流していた。彼女と初めて入った時に、運よくピアノ協奏曲が流れていて、グリーグだといったら、ラフマニノフでないのと言われ、恥をかいたのを思い出す。

そんなことを思い出しながら、十メートルほどの道を進む。昔からある製本・印刷屋、次は美容院だろうか。どこかに街の美術作家連盟の大きな看板があったはずだ。そして本格的なフランス・ケーキ屋。店の前がテラス風で、丸テーブルに二人の若い女が腰かけてだべっていた。いや、どこか瀟洒な感じがある。若い女の子たちはどんな音楽について語っているのだろう。既にショパンとかモーツァルトとかではないであろう。Ｍは何か今日風な音楽を思い出そうとしたが、何も浮かんでこなかった。そうだ、静かな方が似合う、そう思うのだった。角のレディース専門のセレクトショップが雰囲気を助長している。この建物がマンションであることを初めて知った。

ほんとにすぐ大通りにぶつかる、大通りと言っても狭い二車線の一方通行の道路で、舗装状態がいかにも田舎染みたものだ。

思い出した。左折の角に銀行があって、戻る方向の数件先にも茶店があった。名曲喫茶でも置いているタウン誌の他に街の同人誌もあり、Ｍはそれが目的だった。こちらの店にも文人らしき客が一人でいる光景をよく目にした。映画音楽が主だったろうか、そこでも時にクラシック、いやジャズの方が多かっただろうか。古の街並みさえ忘れてしまった。

左折は戻ることになる。左折はしない。

大通りの向かいは商業施設である。その中を通ると、帰りの電車に乗るには俄然近道となる。

ここに初めて商業施設ができたのはもう四十年も前のことだ。ルネス街という名の洒落た施設だった。地下一階から地上三階建てで、若者向けのファッションテナントや各種飲食店などが連なっていた。高さが半分の階や変なカーブもあり通路が迷路に思われ、ちょっとした都会の雰囲気を味わえる場所だった。Mは通るだけで若々しい気分になれたが、高雅な感じを与えるレストランと、あまり入ったことはないものの「チェンバロ」という名の茶店が好きだった。「チェンバロ」の方は場所を変えて今でもある。

かつて、書店やレコード店を中心に大通りをぶらぶらして名曲喫茶に入り、最後にこのルネス街の中を通り、都会を歩くような思いで反対側の道路に抜け出ると、道路向かいに電鉄の始発駅である中央駅がある。大方はそこから電車に乗って帰るのだ。逆にいうと、市内に住んでいても、電車に乗って来てこの最終駅が、いわゆる街への門のようなものであった。昔は駅が高校生や通勤者、買物客で混雑していた。

このルネス街は、やがてルネスアベニューと名称が変更し、いまルネスアリーとなりまだ半年も経ず、駅側が拡張工事のためまだ通り抜けできないに違いない、そう早合点し蓬莱橋まで歩くことにした。いや、始めから橋まで歩くつもりだった。

Mは右折した。セレクトショップに続いて刃物店、小さなミシン屋、暮らしの衣料店二軒、写真屋だろうかスタジオ、照明器具屋、粋なフランス語の婦人靴店、花屋、またもフランス語のエステサロン。ここにもかつて茶店があった。

昔に比べ珈琲店が増えたのか減ったのかMには分からないが、この街は「珈琲の街」と銘打っている。ここの藩士たちが幕府の命で北方警備のため蝦夷地に赴き、その時に浮腫病の予防薬として珈琲が配給されたのを嚆矢とする。庶民としては日本で初めて飲んだとも言われている。単にいまだ茶店が多いだけではなく、その製法でいまでもあちこちの茶店で飲めるからであろう。

中土手街を歩きながら、もう一つ思い出した。ＪＲの駅で待ち合わせ、弘前公園まで歩くことになったS先生のことである。まだ准教授の若さだが、退職間近にこの街をもう少し見ておきたいと、県都から訪れたのだった。

「フランス料理」の街だからとの先生の要望に応えて、代官町のフランス料理店で昼食をとった。その後、中土手街に出たら、ちょうど何かの記念のパレードと一緒に歩むこととなった。先頭に何がいるのか分からなかったが、よさこい踊りや一輪車クラブ、自衛隊の円舞、そして人通りが多いためほぼ同時に進むことになった少年少女を含む剣士たちの円舞。殊に剣士たちに、城下町らしいと感嘆していた。

S先生は環境教育研究科の専任教員であり、事務員のMは教務課で、一般的な教務の他に文科省の科学研究費補助金や大学院事務を担当していた。Mは数年前に早期依願退職をしていた。事務員ながら野外実習によく同行し、S先生の思い出を多く持っている。殊に、ヘルメットを脇に抱えて立ちはだかったツリークライミングの装備姿、半ば捨てられた大学付属の森の中のヒュッテへの径を肩掛け草刈り機で切り開いた姿と夜の焚火を囲んで「とってもきれい」と星空を眺めた横顔。まさに「風の谷のナウシカ」だと思った。顔もそうだった。

パレードとともに進んでいたら、雨が零れだした。口実が出来た。フランス料理店で珈琲も済んでいたが、Mは街の名所の一つとして名曲喫茶を案内したかった。これ幸いに店に駆け込んだ。S先生は今でもこんな茶店があることを喜んでくれた。この店に、同じ大学でS先生も少し親しくしているドイツ文学の先生と自然科学の先生と、別々にだがMは時々訪れる事を告げた。前者は専門以外でも哲学などを含め大変な読書家であり教わるばかりの先生であり、後者は一緒に野山を探索する自慢の高校の先輩たちだった。

店を出た時には雨が上がっており、蓬莱橋を通って公園の追手門まで歩いた。帰りは駅までバスを利用し、駅前で謝意と別れを込め握手を交わした。もう会えることはないのかと思ったあの気持ちが、次々と去りゆき縮んでいくM自身の人生への惜別のような思いと重なるのだった。

もう、中土手町の終点となる蓬莱橋である。土淵川（つちぶち）の架橋である。自らの人生の終点のようにも思えた。もう、蓬莱とは。橋を渡らず道路を横切ってみると、上流側の欄干の親柱に「昭和廿六年十二月竣工」とある。Mの生まれた年だ。傍に「土淵川の自然」という解説標識が建てられている。久渡寺山から流れて平川の支流となるまでの全三十一の架橋が橋名とともに描かれていた。そして主な地区として、源流から二番目の笹森橋付近と、蓬莱橋も含むだろうそこから四つ上流にある桔梗野橋付近、蓬莱橋から下流七番目の野田橋付近、最も下流となる大久保橋付近四箇所の動植物の写真と種名が紹介されている。Mは特に、外来種の花の写真の枠を青色で囲んでいるのが勉強になると思った。いや、Mは既に知っていた。自生種の方の花も皆マクロレンズでも写真を撮っている。でも、有難い標識だと思った。そしてアブラハヤ、カマツカという川魚に驚いた。その二つは名前さえ知らなかった。ミズカマキリは、水生昆虫好きな男が掬ったのを撮らせてくれたことがあるだけだった。Mは改めて上流から橋名を辿った。津軽橋、清水橋、黄昏橋、月見橋など、行ってみたくなる橋もある。しょっちゅう車で通過している橋ではある。長安橋とは何だろう。

Mはハッとした。すべてを忘れようとした。街ではその世界で名を成すある詩人・著述家が詩とエッセイ集『土淵川の橋―ぶらり散歩』を上梓していたのだ。すべての橋について記載しているのだ。紙面で知った時にショックを受けたのを思い出す。他の詩集は所持しているが、この詩集は影響を恐れて購入していない。

橋の上を数歩進むと、遠く、いや意外に近く五重塔が見える。その向こう久渡寺山も迫る。突然、里山と河川俳徊への衝動に駆られたが、振り捨てた。鮎川信夫の「橋上の人」になりたかったのだろうか。橋上の人になるも、二つの世界を結ぶ橋でも境界でもなかった。Mにとって一つの世界の端であり、橋上から眺めたいのは、橋の根拠となる川の流れだ。それにしても、土淵川は綺麗になった。だが、上流しか見えない。下流も同じであろう。鮎川よりも、視界風景そのものと化す竜樹やヴィトゲンシュタインになるのだ。ヘルダーリンも川の詩人だった。内的イメージやまやかしの深層心理なぞ捨て、川そのものになるのだ。維摩詰もヴィトゲンシュタインも真理のために何も語らない。視界が、知覚があるだけだ。存在すらない。

川の解説標識のある所から、中央駅へと、蓬莱橋の上流にある境橋へ曲がりくねって下るバリアフリーが見下ろせる。最近できたものだ。少なくとも中土手町が土手であったことが分かる。スロープが少し急に見えるが、登りはどんなものだろう。用事を足す場所によっては、確かに近道でもある。少しだけ下りてみる。川に近づきたくなった。振り返って蓬莱橋を眺めると、下から欄干の半ばまで蔦が絡まっている。橋の下の左岸側には狭い通路が見える。さらにもっと下にも通路らしきが見える。初めて気がついた。河川の草刈りや清掃時に役立つのだろうか。カルガモがいる。流れの幅は極めて狭い。どこか深淵の様を呈している。橋を再び見上げると、橋の向こうデパートのアイスクリームコーンのような逆円錐形の建物が空に聳え立つ。五重塔や先日燃焼したパリのノートルダム大聖堂とは逆である。地上の粋を吸い上げて天空に放出するような、同時に人間を仙人に変容して飛翔させるような。蓬莱橋は地中と天空との橋だった。

蓬莱境とは何だったろう。

古代中国で東の海上にある仙人が住むといわれていた仙境。道教の神仙思想なのだが、日本ではより理想郷の意味で用いられているようである。もともと仙人が住む五神山の一つで、蓬莱の他に方丈や瀛州（えいしゅう）がある。瀛州はやがて日本を指すようになるが、方丈に関しMは鴨長明の『方丈記』を連想してしまう。その方丈は四畳半の広さの意味で草庵を指しているのは言うまでもない。だが、そこに道教の神仙思想の元となった老荘思想が措定されていることもまた言うまでもないであろう。中国が主に老荘思想で広く仏教を取り入れた時に、既に老荘思想に維摩経が影響を与えていたといわれる。維摩経は、生と滅、我と無我など相反する二つのものが別々に存在するものではなくひとつのものであるとする不二法門を説いたものだが、二元論を超越した思想であろう。それとは逆に建設的な構造主義の二項対立を思い出しながら、よく分からないが何となくM自身は現象学的に維摩経に与（くみ）するように思われた。生まれながらの、というより生育環境の影響で、東洋の、強いてはインドの系譜にあるのだろうと自らを説得した。

『維摩経』に書かれている、維摩詰の方丈を訪れた文殊菩薩とその一行が、

その狭い草庵に全員入ることができたという逸話を思い出した。その方丈に全宇宙が内在しているという思想である。こちらの思想はウパニシャッド同様、西洋でも伝統的な思想であろう。常々Mが共感している思想だった。蓬はヨモギであり莱はアカザ科の一年草である。いずれも群れ乱れ荒地を指す。またもや荒地だ。橋の蔦がそれを象徴していよう。草庵へ、そこから神仙境へ。そこには哲学用語上の標識から表象へ、そして沈黙へ。

Mは街の景観を確認しながら同時にしばらく心象風景に浸っていた。われに返り橋に戻った。対岸の橋下の通路を通って駅に戻ることにした。橋の下流側は欄干がなく、すぐ広場が設置されている。蓬莱広場という。歩行者天国とかよさこい祭り、ねぷた祭りなどの時は混雑するが、普段は人影が少ないがらんとした広場である。街路樹が囲う一画に、背を向け合い円状にぐるりベンチが並べられており、その真ん中に明るい黄茶の斑をもった白い猫が横たわっていた。誰もいない中、身動きなく目を開いたまま。黒猫ではない。軽そうであり、突然ひょっと一瞬にして空へ飛び跳ねそうだった。だが、その落ち着き、安泰さ。何ごともないように横たわっている。Mはその猫に、存在の真理や生命あるものの真理を感じた。

もう帰ろう。広場の端の東屋ふうなベンチの並びを下流の景色を眼に入れながら通り、半円状にらせん階段を下りる。土淵川の左岸の通路に出て、橋の下をくぐる。ロカンタンなのだ。橋桁が迫るやや暗い狭い通路で、昔に比べれば道も奇麗になったが、それでも何か生活の、人生の荒(すさ)びを深めては慰めを、いや諦観を強めさせてくれる通路なのだ。通過儀式をくぐるようなものである。メランコリーなどではない。Mは殊更に靴音を出したくなる。左岸はもう下土手町である。

もうあとは川岸に沿って、すぐ境橋に至り駅である。この日はこれで終わりかと思うや、ふいに脇道を少し往復したくなる。いまでもある茶店のただ外見を眺めるためだけだ。茶店はシャッターが下りていた。下方赤レンガの壁に蔦が這い上がり、横板を連ねた両開きの木製扉が閉じた縦長の二つの窓、店前の花壇が奇麗だ。扉の先に吊り下げられた花のバスケットがじっとしている。

昔、近くの書店で遭遇した哲学教室の同級生と帰りにこの茶店に寄ったのだ。そして二人で駅に向かった。駅で彼の恋人とばったり会い、日本文学科の彼女は同期生友達三人での映画「誰がために鐘は鳴る」の帰りだった。その中に英米文学科のおまえがいた。

この茶店の通りをまっすぐ進み、二つ目の十字路を右折すれば、そこは車両通行止めの狭い路地で、飲食店が並ぶ昔から人気のある小路である。そこに今も、学生時代の一時期に頻繁に通ったジャズ喫茶がある。無性にそこで飲みたくなるも、高ぶりを抑えた。その辺は思い出が数々ある下土手町の中心でもある。今度にしよう、Mは何か目論見でも浮かべたように若気(にやけ)た。

Mはこの茶店の前で引き返し、川淵に沿いながら書き出した短編の構想を思案した。いまの出だしで何を書こうとしていたのか。書こうとすると書きたかった幾つものテーマと構想が出てくるのだが、それをなぜ書こうとするのか分からなくなっていた。文学とはなにか。娯楽としての小説には興味がない。大それた発言とは自覚しながら、仮想でしかない制度としての社会に生きることを、日常生活の中に隠れた本当の現実を、自分の中にも棲みつく虐げられた人々の心を描くのだ。いや、テーマは時代を超えてひとつしかないのだろう。それがいまだ薄っすらとして、まだ把握できないのだ。今回は同人誌に未提出だ、Mはそう決断するのだった。

もう駅だ。

おまえと初めて出会った場所。その時、おまえはおれをよく見ていなかった。おれもそうだった。よく話すおまえの友だちの方ばかりを見ていた。おまえもそうだった。よく話すおれの同級生の方ばかり。しかも時にしか。むしろ、誰をも見ていなかったのだ。改札のベルが鳴り改札口に駅員が立った時、何気なくおまえを見た。口元が安堵したように緩み、微笑み、改札口の方に向かった時の、あの喜びそのものの横顔。信じられなかった。ある外国映画で感激した、そんな横顔だった。

街が変わったように、われわれも変わったのだろう。街は廃れていきながらもどこか洗練された場所もあるように、二人にもそんなところがあって欲しい。すべてが変わりつつあっても追憶がいつまでも同じように、こころのどこかは変わっていないのかもしれない。いや、多くの追憶さえ消えつつ、残っていても変容されては影を薄めていく。少なくとも、おまえと会ってやがて訳付きに頼りながらエリオットの『荒地』を、ラッセルの『西洋の知恵』を、そして『般若心経』を読んだ時の、あの精神だけは忘れたくない。いや、まだ残っているのだ。消えゆく残滓であろうとそれを引き金に。

彼は早くも右耳の聴力を失いかけていた。ステレオをステレオとして聴けないのだ。左目に十日前ほどから視界の中心に黒い汚れが現れ、本が読みづらくなっている。とうに街のコンサートや展覧会さえ足が遠のいている。暇と金がないのだ。本はどうにか時に購入してはいた。いや、喫煙がいけないのだ。無駄遣いで、そして不健康な何物でもない。喫煙というといつも、十二音主義の作曲家ウェーベルンを思い出す。一九四五年、喫煙のためベランダに出てタバコに火をつけた途端、占領軍の米兵によって誤って射殺されたのだ。

家に帰ると彼はポストが気になるだろう。家では趣味の世界の種々の事務作業や記録、メールや手紙、通帳に入金しては引き出して買物と。書くことと言えばニュース記事的なことばかり。ボランティアの取材的撮影と自分のものではない奉仕のフェイスブックやブログ、ホームページの更新。フェイスブック以外、彼は自らのそれらをちっとも更新できないでいた。小説に興

味を持ったことは無いが、若い時から文学を書きたいのだ。詩や短詩、詩人論めいたものを始めエッセイは盛んに書いている。だが、文学が書けない。書きたくも時間がとれない。かといって、趣味費あるいはその活動費の捻出のためにパート勤務は欠かせない。すべてを放棄し野山逍遥と隠遁的読み書きに徹する予定の年齢に達したというのに、日々追われるように内臓に少しストレスを感じていた。それ故か、布団に横になることも多くなり、どこか怠惰に陥っている良心の呵責も感じていた。

弁解染みた独り言をつぶやいては、Mは心の中で一つの決意を固めた。

そうだ、ボランティアで管理人として週一度のあの部屋に座ったら、何かまた書けそうな気がする。少しずつ少しずつでいい。三日後にまたあの部屋に座ることができる。来館者があればその部屋の先の下宿人について喜んで解説しているが、ほとんどしんとした部屋である。隠遁的空間。方丈に違いない。ヴィトゲンシュタイン、テスト氏、またしても主人公はK氏か。若い時どれだけK氏の未完の短編を書いたことだろう。K氏、何か書けそうだ。しかしもう歳だ。K氏は市井の人間ながら環境が不条理で異様だ。だからこその実存だろうが、Mでいこう。凡庸を意味するMediocreのMだ。ありふれたあたりまえの環境でもあり、うってつけだ。どうにか書けそうだ。出窓に誰か腰かけていてくれそうだ。たかが同人が読むに過ぎないが、おまえのため、あるいは自分自身のため、それとも……

一

イタチごっこ

今にも零れそうな灰白の空。五月中旬の朝七時だというのに、朝の爽やかさは微塵もない。テラス窓は、外側のレースカーテンは閉じられていたものの、内側のカーテンは開いたままだ。昨夜、十一時頃だったろうか。鈴木は疲れて少し休憩のつもりで隣の和室の布団に横になったのに、そのまま寝入ってしまったのだ。

レースカーテン越しに、林檎畑であった目の前の荒地を乗用草刈機がぐるぐる回っているのを眺めた。音はあまり聞こえない。聴力が弱ったせいもあろうか、そう思った。何気なく視線が下がり、テラス窓の下の方がレースカーテンの網目とともに汚れているのに気づく。ここ数年窓を拭いたことがない。外への出入りが自由なためのテラス窓として幾度か活かしただけで、本来の掃除の際にほこりを掃き出すためのいわゆる「掃き出し窓」として利用したことはなかった。床上に書物やCDが積み重なり、それ以上に手紙類や資料がほぼ床一面に積み重なっていて、いつも半分壊れた揺り椅子に向かうのに足の踏み場に困っていた。積み重なったものが足に触れて、崩れ落ちる音を何度耳にしたことだろう。揺り椅子に就くのはCDを聴くためにか読書のためである。スピーカーはカーテンに触れんばかりに近い。カーテンは幾分か防音の役目を果たしているのだろうか、そんな素朴な疑問に答えられないでいる。いや普通のカーテンであり、遮熱と遮光に少し役立っているだけであろうと。レースカーテンにしても、開けることはあってもサッシ窓は閉めっきりであり、適度に風を通しゴミを防ぐという優雅な利用は新築当初だけであって、ここ何十年も閉めっきりといってよい。確かに、外の野鳥を撮るためにカーテンも閉めっきりでサッシ窓を少し開けレンズだけ隙間から出すことはしばしばあるが。

外に出てみると、草刈機が草の匂いを立ち込めている。刈り払われる前は、群落していた蒲公英（タンポポ）の綿毛の玉が光に満ちていた。刈り払われた轍（わだち）の跡に椋鳥（ムクドリ）が四羽。餌探しに忙（せわ）しく、見つけては嘴に挟んだまま何度も地面に叩きつけている。少なくとも一羽は、近くの家の車庫に巣作りをしているムクドリであろうと思った。刈り払いが終わると猫がやってきて、荒地の真ん中に座り込んだ。茶トラというのか茶と白のブチ猫というのか、彼は猫について無知だった。

鈴木は前期高齢者で、同様の女房と二人で年金のみの収入で生活している。彼の家のすぐ裏のこの荒地は、雪の原のあと、春は外来種ではあるが一面の姫踊子草や蒲公英の花、縁をかなり黄水仙が飾っては、処々に自生種の黄花の甘菜（キバナノアマナ）が楽しませてくれる。種漬花（タネツケバナ）の方はあちこち年中咲いているようで、彼には雑草にしか思えない。タネツケバナ属は区別するに面倒であり、もしかしたら外来種の道種漬花（ミチタネツケバナ）かもしれないと思った。山の沢付近でよく見かける同じ属で似ていてより大きな花を咲かせる崑崙草（コンロンソウ）の方には多少は清楚さを感じるが、しかしアブラナ科の中でどうもこの属を彼はあまり好きになれない。敷地内では真っ先に草取りの対象である。野鳥といえば、この荒地にも春早々に雉、鵯（ヒヨドリ）や百舌鳥（モズ）がよくやって来る。鵯はなんか可哀そうな

漢字だから、別な当て字である白頭鳥（ヒヨドリ）の方が好きだった。スタイルが良く、背は光の具合によっては青みがかり実に美しい、常々そう思っている。かつてはここに毎年大葦切（オオヨシキリ）もやって来ていたことを思い出す。

この荒地はやがて白詰草（シロツメクサ）に覆われ、周りは鰭玻璃草（ヒレハリソウ）に囲まれるだろう。そして大虎杖（オオイタドリ）に。外来種のヒレハリソウは、紫色の花が釣鐘の形をして垂れ蛍袋（ホタルブクロ）に似ているが、初めの頃はハッとするものの、あちこち雑草のように跋扈（ばっこ）してくるとダサい草に見えてくる。ヨーロッパから日本に観賞用あるいは家畜の餌として導入されたもので野生化してしまった。一方、オオイタドリの方は自生種で誰しもが知っている典型的な雑草であろう。どこにでも跋扈して群生をなし、除草から逃れて道端などに背丈は一メートル半から二メートルにもなる。そんな茎を虎の縞模様がある杖に見立てての命名である。別の当て字の痛取（イタドリ）は若菜が傷薬になるという好ましいものがあり、役目は現役のようでもある。日本からヨーロッパに家畜の餌や観賞用として導入され、いまや世界の侵略的外来種ワースト百種の一つになっている。駆除するために政府が蝉に似た小さな天敵昆虫の輸入を決めた国もあるという。

そんなことを思いながら、侵略的外来種と日本がもたらした欧米にとってのそれが幾種もあるのを知りながら、彼は具体的に一種もあげられずにいる自分に歯がゆさを覚えた。そして、もし郷土に一度も外来種が蔓延（はびこ）らなかったとして、この荒地を空想してみるのだが、さて何が生えたことであろうと。

春の七草のうち、芹（せり）やぺんぺん草、はこべらなどは今でもそこに咲いているのかもしれない。母子草（ハハコグサ）は敷地内でも咲き、雑草として抜いている。類似の外来種の方に思えてしまい、同定に不勉強なのである。仏の座（ホトケノザ）（実は小鬼田平子（コオニタビラコ））も抜く。たぶん敷地内のは本義の小鬼田平子（オニタビラコ）の方であろう。これも種別は面倒である。なお、現在でいう仏の座は別種で、唇形状の赤紫色の花が仏像の蓮華座のような対生の葉が段々につき三階草（サンガイグサ）とも呼ばれ、彼の好きな花である。今やなかなか出会えない花となっている。残りのすずなとすずしろは、蕪（カブ）と大根ではなく、野蒜（ノビル）と嫁菜（ヨメナ）とする説を好んでいる。ただ両者を撮ったことがなかった。ヨメナは本州中部以西に自生するから仕方がないとして、ノビルに今まで無頓着であったことに気づき、それを悔やんだ。花は淡い紅紫色にもなることを。

秋の七草としては女郎花（オミナエシ）や尾花（オバナ）、撫子（ナデシコ）が咲く。荒地の縁には藤袴や葛、萩も咲いているのかもしれない。問題は桔梗である。彼は何十年とその花との出会いを期待して野山を散策しているが、桔梗と出遇ったのは遠い昔に一度だけである。林道が切れたその奥の山中であったが、それも、もしかしたら外れの集落から種子が飛んで来てのものかもしれない。

あと、夏の七草も考えられよう。昭和初期の短歌に一例があり、その中に沢瀉（オモダカ）、未草（ヒツジグサ）、蓮、河骨（コウホネ）、そして何と鷺草（サギソウ）が含まれている。これはいけるだろうと思った。そして、彼なりに夏の七草を、いやもっと夏の七花として、春も秋もそれぞれ独自に七花としてピックアップしたくなった。さらに野、里

山、深山、高山のそれぞれを。加えて川辺と池畔の、海辺のそれらを考えようと。急に顔がにやけるのだった。これでますます老後を生きることができると。しかし、空想の原点、もし帰化植物がなかったら、この空地に何が咲くかと考え直し、穂状のイネ科だけ、あるいは一面イタドリの林だろうかと想うとゾクッとするのだった。

そんな空想から目が覚めると、人生のほとんどは空想に生きて来たのではと思い知らされ唖然とした。詩や短編の創作においてリアリズムを基調にして常に実存を目指してきた鈴木だけに尚更なのだろう。虚構はあくまでも短編創作の際の、登場人物名を始め枠としての虚構である。描かれるのはあくまでも事実であり現実である。そう思うのは彼だけであり、現実そのものが虚構であることも彼なりに理解していた。いうまでもなく言葉を用いる以上、所詮主観と偏見から逃れることはできない。記述は追憶ゆえに可能であり、その追憶は多分に知らずあるいは無意識的に勝手に想像が入り込み、最悪な場合は曲解されることもある。いや、最初からほとんど思い込みよって書かれるにすぎない。いずれにせよ、結局はフィクションの要素が入り混じってしまう。それは仕方がないことであり、逃れることはできない。可能な限り嘘はつかない。嘘を言ってしまえば、少なくとも文学ではなくなる。それが彼の信念であった。なぜ事実を書こうとするのか。歴史学や社会学が扱わない人生史や世の見えにくい部分を、より普遍性を持たせて言葉あるいは文章の力によって顕現させるのが文学の役割ではないか。そんな大義名分を心中に唱えては、すぐ恥じてあっさりと捨てるのだった。たかが凡夫にすぎないと。思念を捨てようと。

いつのまにか荒地に子猫が二匹増えていた。三匹の親子がしゃがんでいる。微笑ましい光景に思えた。

猫といえば彼はまずはエドガー・アラン・ポーを思い出す。大の猫好きで代表作に周知の『黒猫』がある。そしてボードレールをつなげる。そのポーの翻訳者でポーをヨーロッパに広めた「猫の詩人」である。猫を女性の官能性に象徴させたモダン詩の父である。抒情詩人でもあったポーとともに重要な詩論をもつ。ボードレールの影響から猫が好きになった一人に谷崎潤一郎がいる。多様な題材で多様な表現を駆使した谷崎の、最も特徴的なのは耽美的な女性美であろうか。猫と彼らの美に通じるものを覚えた。

二

鈴木は、北隣りの家に近いそして道路にも近い自分の敷地で、しゃがみっ放しで草取りをしていた。

「お宅もやられていないか」

と、横から大声をかけられ吃驚した。振り向くと滝川である。

ここは袋小路になっていて、滝川宅はその端にあった。

滝川は後期高齢者になったばかりで、同様の妻と二人での年金暮らしであったが、鈴木と異なり近くに幾つかの畑を持ち野菜や果物に関しては自給自足の状態にあり、時々鈴木もお裾分けに与っていた。

この南北に走る数百メートルの袋小路は、主要道路、といっても元来は街中と山手を結ぶ南北に走る農道であって、北の山手に林檎加工場ができる際に、そこへの直進道路として幅を広めて整備舗装されたものであり、そんな主要道路から西側へコの字に別れる道路から、さらのその道路の西側へコの字に分かれる未舗装の道路だった。いまだ未舗装なのは道路の所有者が行方不明で市も手が出せないということだが、冬は市が除雪を行っている。

この袋小路のコの字の最後の直線道路に沿う家屋は、最初の半分ほどは三世代世帯もあり子供がいる賑やかな世帯が多いのに対し、後半は老夫婦二人世帯が多くいかにも袋小路という雰囲気を漂わせていた。道の前半は子供たちが路上をバドミントンやかくれんぼの遊び場にし、時に駈けっこで奥まで走ってくる時には、奥の道路がどれほど明るくなることだろう。

この袋小路のある一帯は、かつて半湿地で沼もあったという。その後、埋め立てられ林檎加工場の倉庫が置かれていたという。地形学的にはどうも旧河川の痕跡が認められる場所である。すぐ近くに黒森という市街を見下ろせる小高い丘があり、山頂は林檎加工場建設の際に削られ、その土砂が林檎加工場の敷地に利用されたらしい。そんな黒森の西側は次第になだらかな斜面になっている。かつて津軽藩の藩主が狐などの鷹狩りに来ていた原野であった。この袋小路が最も標高の低い場所になっていた。集中豪雨の時など、この袋小路では浅い用水溝から路面にあふれた出た水が南へと浅瀬かのように流れ出す。つまり、ほとんどの家屋は新築前に土地に土砂を盛り上げ敷地を高くしていた。そのために尚更に道路は川と化す。滝川宅はそんな袋小路の東側の一番奥にある。

鈴木が滝川の言ったことを飲み込めないでいると、

「お宅も猫にやられてないか」

滝川宅はそれほどでもない広さの敷地に、観賞用の庭木を何種類も植えており、下を野草も含むいろいろな花で埋めている。手入れが行き届いた見事なお庭だ。鈴木はその庭が猫に踏み荒らされているのだろうと思った。

「家は何もやられてません」

滝川は返事も返さずすぐ立ち去った。滝川はもともと道路に喫煙のため出て来て、鈴木が草取りをしているのに気づいて挨拶を交わす程度の意味だろうと鈴木は捉えていた。

その一週間後のことである。鈴木は先と同様の場面に出くわした。

「やられてるかもしれんよ。その辺よく見てみい」

そう言われて指差した方に移動して、もしや猫のフンのことかと草間の少し地面が露出した個所を何カ所か探ってみると、こんもりした場所があり、草取り鎌で掘り起こしてみたら固まった猫のフンが出てきた。猫は前足で少し掘りフンをしては同じく前足で砂をかけ隠す習性がある。確かにやられていた、そう告げようとしたが滝川は既に立ち去っていた。

家の裏の壁ぎわの礫地に、時々猫にフンをされているのは昔からだった。礫を少しどければ地面が露出する。郊外の飛び地住宅街でもあるし、それは普通のことと思っていた。草取りで気づけば拾う程度のことだった。今回は家の前の方にもフンとは思ったものの、鈴木はそれほど気にすることではないと思った。

その数日後である。鈴木は週に二度ほど二時間ほど草取りをするに過ぎない。彼の女房の方は、家事の合間に鈴木より頻繁に行っている。鈴木の草取り範囲は家の広い北側の草地と南側の狭い礫地、それに家前の道路の側溝に沿った部分である。家の前と後は主に女房の範囲である。鈴木が南側の草取りをいつかの続きで裏の角まで辿り着いた時、家屋の角隅にこんもりした個所に気づいた。案の定、猫のフンが隠されていた。すると、家の裏の礫地が気になってきた。礫はずっと平らに見える。でも、ちょっと高みを草取り鎌でかき回してみると、固くなったフンがポロンポロンと出てきた。だいぶ前のものだろうと思った。さらに別な高みを探ってみると、これまたポロンと。もうだいぶ前からここは猫のトイレになっていたのである。

鈴木は女房の指示により、空のペットボトルに水を入れてフンのあった場所を中心に並べた。

ある日、鈴木が玄関を出て喫煙しながら道路間際に進んだ時に、袋小路の奥に猫が五、六匹寛いでいるのが見えた。いつもは二、三匹であり、そのうちの一匹は袋小路の西側の奥の前田宅の飼い猫と思ってきた。あとはその子猫かこの地区のどこかの飼い猫であろうと。それが五、六匹もいるのに驚いた。こいつらがフンの犯人たちだと。そして、家の裏を調べると、案の定フンが二カ所もあった。しかもペットボトルにくっ付くほどの距離である。ペットボトルには慣れて効果がない。家に戻り女房に猫が増えたこととペットボトルに効き目がないことを話すと、女房の返事は、それはとうに知っているとのことだった。また、既にネットでいろいろと調べており、水に反射するキラキラした光を猫が嫌うためペットボトルがいいといわれ始めたのは一九八〇年代のことであり、最初のうちは効果があったようだが猫がすぐに慣れてしまい、今ではペットボトルに光が当たる日照時間が少な過ぎることが分かっていて効果はなしと結論されているという。そして次のことを付け加えた。

ネットによると、フンを隠す理由として以下の三つの説があるという。

1. 外敵（獲物）に自分の居場所がばれやすくなるので、本能的に隠したがるという説

2．ボス猫は排泄物に砂をかけない。下位の猫がボスに対して隠すという説。

3．フン尿に含まれる病原菌やウイルスが蔓延しないよう隠しているとする説

いずれにせよ、猫も自分のフンを臭いと思い、臭いものにはふたをする。そしてトイレは棲み処と離れた場所を選び、まずは近い隣の家の敷地とするのが一般的らしいと。

また、子猫がこれからまだ増えるだろうことも付け加えた。

発情期は日照時間が長くなっていく春と夏がピークという。それは、暖かくてエサの多い時期に子どもを産むための野生の戦略といわれる。そして、妊娠期間は約二ヶ月と短い。生後半年で発情期を迎える。発情するのはメス猫で、それにオスは発情が誘発されるという。俳句の「猫の恋」は春であり、鈴木は発情するのは春ばかりと勘違いしていた。

そろそろ鈴木がまた一人で野山の花などを求めて林道へ行き始める時期だから、山へ行ったら道路に転がってる石を幾つも拾ってきてと女房に言われる。地肌が現れている個所や礫が薄い箇所に石を置くというのである。フンできないように邪魔物を置くのである。

鈴木は野山を散策し花や昆虫を撮影するのが好きであり、蝶を含むスプリング・エフェメラルすなわち「春の妖精たち」はすでに終わっていて、ちょっと間を置いて、今度は林道奥のそれらを求めに行く予定だった。間を置いている間は池沼や河川を訪れて移動中の野鳥を求めていたが、高価な超望遠のない鈴木は野鳥撮影を苦手にしていた。そして、河川の石は大きめであるため、山道で尖りがちな程よい石を拾ってくるのである。

最初のうちは山へ出かけても石を拾ってくるのを忘れていた。今度は忘れないぞと、出かける前に後部座席のドアを開け、床に石を置く真似をしながら「ここに石を乗せてくるのだ」と言い聞かせるのだった。

石を拾ってきて、ペットボトルはそのまま活かし、適当に石をばら撒いた。それを何度か行い、もう石を拾ってくる必要がないと判断した。しかし、どっこい。猫は家の前の北側の草地の空けた個所をトイレに選んできた。猫は朝方と夕方に袋小路の奥に十匹は集まっている。子猫が多い。朝は親たちがじっと日向ぼっこしている近くで子猫たちがはしゃいでいる。可愛いものである。猫好きの気持ちが分かる。夕は夕餉を終えて一段落、いや夜の行動のために集まっているようにも見える。確かに、日中、日向ぼっこかと思うや、猫が何匹も荒地にいて集団で獲物を捕獲しようとしているようにも見える。猫が鼠を咥えているのを何度も見ていた。野生の猫、そう思うと鈴木はまた猫嫌いになる。家の前の方の草原に置く石も拾ってくることになる。

鈴木の北隣りの家の老主人も時々の蛍族の喫煙者であり、三世代家族の長だった。ある日、鈴木と喫煙時間が同じくなり塀越しに会話を交わす。猫の

フン害に関する内容だった。

前田の道路向かいの家の主人滝川は、フン害に堪りかねて前田に文句を言った。

「おれ、飼っているわけじゃない」

昔、前田も滝川もそれぞれ猫を一匹飼っていた。滝川は犬も飼っていたが猫もちゃんと躾をして屋内で飼っていた。前田はここよりずっと北の山際の最後の集落の農家育ちで、猫を自由に行動させていた。そして確かに前田宅の周辺に猫が数匹屯していることが多かった。でも、特に問題は生じなかった。前田はかつて地区の合同清掃やイヴェントなどで中心的な役割を果たし皆に称賛されていた。やがて子供たちも独立し、高齢になって離婚し独り身になってから大分経つ。もう滝川と同様に後期高齢者になっていた。だから猫を愛でる気持ちは皆理解していたが、まさかこんなに増えるとは予想だにしなかった。朝、前田の車庫から何匹もぞろぞろ這い出てきて、夕方もぞろぞろ這い出てきては優雅に道路の奥を陣取っているのである。誰がみても前田が飼っているとしか思えない。餌を与えているのも目撃されている。

「とにかく猫、なんとかしてくれないか」

「フンされたくないのなら、見張ってればいいだろう」

滝川はこの一言に憤怒した。以後、前田とは口を利(き)かなくなった。滝川は玄関への通路以外に猫が侵入できないように網を張った。

実は、最初に大きな被害を受けたのは前田宅の隣家である老主人の家だった。この辺は皆、隣家との境として高さ四段のブロック塀を設けている。ジャンプ力のある猫である。それを超えて隣家の敷地にフンをするのである。臭いものに蓋をする猫であり、確かに自分の領分にフンをするのは避けているのだ。やはり一番近い他人の場所をトイレに選ぶのである。なかなか利口な動物である。真っ先に敷地に妨害用の網を張ったのは隣家であった。

鈴木はことの真相を知った思いであった。そういえば、鈴木の道路向かいの家も、鈴木よりは若い老夫婦の家だが、猫が侵入できないよう網を張っていることに今更に気づく。鈴木の筋向かいの家もそうであり、塀の上にもペットボトルを並べている。鈴木の道路側の敷地は車の出入りする個所以外はだ小さな側溝が占めていて、支えとなる何の設備もなく網を張るわけにはいかない。もっと石を拾ってこなくては。次に無防備の我が家が狙われる、いや、もうやられている、そう自覚した。

三

やられそうな個所に石を置いても、石のすぐ傍にされるようになる。石を増やしても意味がない。女房は花を付け出した蕺草(ドクダミ)を掬(も)いで、葉を揉(も)みしだきあちこちに置く。猫はドクダミの臭いを嫌うという。何年も前から雑草扱

いされるドクダミをアクセサリーとして除草せず残してきたのだ。

それでなくとも、鈴木の敷地は狭いものの草取りが大変なのだ。可能な限り根から引き抜くことにしているものの取ってもすぐ伸び、これは以前からのイタチごっこである。

礫地で抜く主なものは片喰（カタバミ）、常磐爆（トキワハゼ）、母子草（ハハコグサ）、父子草（チチコグサ）であり、蔓延（はびこ）りやすく花も冴えないチチコグサはできるだけすぐ取るようにしているものの、これが厄介者だった。あとは取り逃しても咲いた花を愛でていた。徹底して取った外来種の小錦草（コニシキソウ）はもう何年も前から生えず、滑莧（スベリヒユ）は稀に現れるだけである。そうそう、結構面積を占有する万年草（マンネングサ）もあった。これに彼は苦笑した。

一方、草地では杉菜（スギナ）、蓬（ヨモギ）、蕗（フキ）、蒲公英（タンポポ）、繁縷（ハコベ）、大葉子（オオバコ）、種漬花（タネツケバナ）、白詰草（シロツメクサ）に蛇苺（ヘビイチゴ）、鮮やかなオレンジ色の花が咲く紅輪蒲公英（コウリンタンポポ）、カヤツリグサ類やシバ類、イネ科、そしてタンポポに似た嫌な豚菜（ブタナ）と種類も多い。残すのはラン科の捩花（ネジバナ）である。大犬の陰嚢（オオイヌノフグリ）と立犬の陰嚢（タチイヌノフグリ）、そして小さな黄色い花を咲かせる小茄子（コナスビ）は少し残し、しばらくそっとしておく。

いずれにせよ、ネジバナとドクダミ以外は花が終わると抜く。湿った個所にわずかだか銭苔（ゼニゴケ）は厄介（やっかい）である。とにかく雑草の駆除に加えて猫のフンとのイタチごっこである。

フンを拾うのは鈴木の役割で、スーパーで買った食品のビニール包袋に、ゴミ挟みとして用いているデレキでフンを挟んで入れる。そして袋の中に、臭い消し効果もある手持ちスプレイ式殺菌液をかける。最後にデレキの水洗い。それがいつしかデレキではなくティッシュペーパーでフンを掴み、さらに猫のフンの匂いがしない専用の袋を裏返しにして直接つかむ方法に変わっていった。すべて女房の指示による。ネットでいろいろ対策を講じているのだ。

イタチごっこがますますひどくなる。袋小路の奥にいつしか二十匹ほどの猫がいるのには唖然とした。敷地内の叢の上にも構うことなくフンをしてくる。山に行ったら、今度は枝木を拾ってきて、と女房の指示が出る。枝ぶりのいいのを選んできて、礫地にも叢にも、そして猫の通路化しているブロック塀にも通れないように立て掛ける。堪りかねて女房もフンを拾い出し、さらには網を買ってきたが、やはり要領よく張るところがない。結局は何の防御にもならず、一日にフンを拾うのが、ひどいときには四、五個である。

どうも鈴木宅までではないらしい。鈴木宅の南隣りの家も、ここも鈴木より若い老夫婦宅だが、南側の隣家との境界にずっと網を張り、花壇にも網を掛けている。それで家の裏の庭木の場所がやられているという。猫各々にトイレとする領域があるらしい。近所の人で、猫が自分の家に近づいてきたら投石しながら追いかけている光景もしばしば目にする。

鈴木はそんなことを思い、諦念に近いものを覚えた。どのように対策しても数日の効果もあろうか。やがて枝の脇にフンをしてくる。こんな排泄行為は猫の悪戯かもしれないと思うようになった。

ついに鈴木もネットでいろいろ調べた。そしてホームセンターで猫よけグ

ツズを購入した。刺の付いた猫よけシートである。何枚も買うため金属製は高値になるというより、間違って踏んだら猫が可哀そうに思え、安価で軟弱なプラスチック製を選んだ。礫地の家の壁際に並べ、草地のやられそうな個所あちこちに置いた。しばらくは効果があった。しかし、シートにかかるようにフンをしてくる。もうどうでもよくなってきた。こんなことに余生の貴重な時間をとられるなんて、と悔しくもなる。

また隣家の老主人と喫煙が一緒になった時である。

「この前、もう我慢しきれなくなって保健所に電話した」

「そしたら、保健所は管轄外なんで、動物愛護センターに電話してくれと」

愛護センターなら猫の肩を持つだろうと逡巡したが、数日後に思い切って電話をしたという。そして、愛護センターの職員が前田宅の様子を調べに来て、二度目に来た時には前田に直接忠告したという。前田は飼っていないの一点張りだったという。確かにそう言えるのかもしれない。実際、そうなのかもしれない。

やがて町内の回覧板に、猫の放し飼いの注意事項を乗せたページを一番上に挟んできた。かなり現実的な記述であり、これだと前田も自覚し折れるだろう内容である。だが、前田にしても仕様がないのかもしれない。

もう夏も終わりになっていた。鈴木の家の前の方で、いずれも自然に根付いたものだが、秋桜（コスモス）と松葉牡丹（マツバボタン）がまだ咲いていて、芝桜（シバザクラ）も遅咲きが美しい。家の南側は、園芸用の杜鵑草（ホトトギス）、白い花の苺、黒い斑入りの白い菫、鉄仙（テッセン）、日々草（ニチニチソウ）などが自然に咲く場所で、木は楓が一本に椹が二本。雪が積もる前に、これ以上高くならないように幹を切らなくてはと思う。因みに、敷地内に植えたものは躑躅（ツツジ）、白い花の西洋躑躅（セイヨウツツジ）、七竈（ナナカマド）二カ所に名の知らぬ低木、それに黄水仙（キスイセン）だけである。

袋小路の猫はいつしか七、八匹に減っている。子猫が多かったがあれほどの猫はどこに消えたのだろう。確かに愛護センターの大きな車が一台やって来ていたという。しかし減ったのは車がやって来る前だったと語る人もいる。

「前田はかつて狩猟が好きで、まだ猟銃は持っているらしい」と。前田が自分の軽トラックの荷台に四角い大きな箱らしきをシートで覆い出て行くのを数回見たと語る人もいる。

秋には袋小路の奥に猫は数匹だけになった。猫のフン騒動も一段落した。隣家の飼い犬が愛おしくなる。吠えず、大分歳になるのだろう。散歩に連れ出された時のあのしっぽの振りと前に引っ張る元気よさ。そしてウンチを入れる手提げマナー袋を持ち、躾のご褒美やストレスを軽減するためのフードポーチ。マーキングのおしっこをするのを見るのは鈴木も嫌ではない。鈴木が少年の頃は生家で犬も猫も飼っていたが、駈けっこができる犬の方が好きだった。林檎畑も少し持つ稲作農家であったために、豚、兎、鶏、一時山羊も飼っていた。いや、馬と牛もいたのである。そんななかで、やはり犬が一

番好きだった。今回の猫フン騒動で、家畜やペットについて歴史を含みいろいろ調べてみた。

古くはオオカミの家畜化、すなわち犬が三万年から一万五千年前から行われ、農耕の始まりとともに害獣となるネズミなどを駆除してくれるネコが珍重されるようになったという。ペットの歴史は家畜に先行すると考えられており、明確に愛玩動物として飼育された最初の例として史料が残っているのは、五千年前の古代エジプトのピューマであるという。ペットとしての犬の場合は石器時代におけるイヌの墳墓、猫の場合は古代エジプトで今日のペットに近い神格化された存在であったとされる。

現代の日本の二人以上の世帯では五割が何かしらのペットを飼っていて、複数回答で六割が犬、三割が猫、二割が魚類、鳥類は六%という調査結果があるという。ペットに無関心な鈴木はペットを飼っている割合が多いのに驚いた。可愛いだろうが、世話もかかるだろうと合点がいかない。近年はどうも猫が犬の数を超えているらしい。

ついでに犬の好きな作家をネットで検索してみた。普段、犬といえば太宰治の『犬畜談』と『女生徒』を脳裏に浮かべるが、川端康成がいた。海外からも輸入し当時としては相当進取的な愛犬家だったようである。子犬を坂口安吾や宇野千代へ贈っているという。評論家では江藤淳が真っ先に上げられている。江藤氏がアメリカの研究所勤務になった際に犬も一緒に渡米し、現地では英語でしつけをされたという話が面白いと思った。世界文学では、犬の視点から書かれたジャック・ロンドンの『野性の呼び声』や、犬好きだったといわれるチェーホフの『犬を連れた奥さん』を思い出す。逆に犬嫌いな作家といえばストリンドベリや芥川。芥川を崇拝していた太宰も犬嫌いに入るのだろうか。猫が嫌いな作家を調べたら、意外なことに夏目漱石がいた。

鈴木自らは猫も犬も好きなわけではない。しかも嫌いなわけでもない、無関心なのだろう、だから凡庸なのだと決め込む。野山へ出向いて、ただ単に花や昆虫、野鳥と出会うのが好きなのである。小動物と遇うことは滅多にない。熊は車で走行中だが、あとは近辺で出会えるものには大方出くわしている。ほとんど一瞬出くわすだけであるが。出会いたくてまだ出会ってないのはムササビとモモンガだろうか。一瞬出遇うだけでいい。ペットは必要ない。第一に世話が億劫である、そう考えていた。

そんなことと今回の猫を考え直すと、猫も不憫に思えてくる。

猫と、というより、猫の動物としての習性と人間のわがままで過剰な欲望とのイタチごっこ。人間同士も似たものであろう。国際政治に無知な鈴木は、パレスチナにせよ世界のあちこちに残存する宗教も絡んだ埒のあかない民族紛争をいつも嘆いていた。なぜ民族それぞれの宗教や文化の多様性を素直に享受し楽しまないのかと。いくら辛い憎むべき過去があろうと、子供たちのために未来のためにも。動物たちはペットも含めまだ幸せな方だろうと。

そんななか、確かに猫は、山猫と違って天敵や餌の心配がなく特に人間に可愛がられている。犬のように鎖に繋がれることもない。どこか自由なとこ

ろがある。問題は捨て猫であり野良猫であろう。人の都合によって突然山猫にされる。そして皆に嫌われ追い払われ。野良犬も同様であろうか。いや彼自身も、もしかしたら家庭から社会からはみ出た野良人かもしれない、ふっとそう思うのだった。

突然、猫のけたたましい叫び声。向かいの家並みの裏からだ。虐待されたような車にひかれたような、あのいまいましい声…なまめかしく…

熊と花

序幕

1

昨年の六月のことである。

タエ子は四月から三週間ほどずつ盛岡と弘前に交互に住んでいた。コロナ禍で高速バスを避けるタエ子を、それこそ宿六といった方が相応しい夫が盛岡へ迎えに行っては、帰りに気晴らしか観光がてらか何処かに寄るのが常だった。盛岡へ送る時もそうである。最も寄ることの多いのは、迂回になるが八幡平である。八幡平では御在所園地、黒谷地、八幡沼、秋田側の大沼のうちの何処か一、二か所に寄る。

盛岡からの帰路、この時は御在所園地を選んだ。ここで御在所沼と赤沼の二つの沼と湿原を楽しめる。もう標高千メートルであり、季節ごとの高山植物あるいは湿生植物を楽しめる場所であり、この六月が最も見頃な花の時季であろう。

林の中の木道が明るくなると、訪問者を清浄するかのように白い菊にも見える磯躑躅（イソツツジ）が両脇で迎え、湿原になると木道添いに毛氈苔（モウセンゴケ）が異世界へ誘（いざな）って、花冠が四裂して反り返る桃色の蔓苔桃（ツルコケモモ）と壺の形をしたピンク色の姫石楠花（ヒメシャクナゲ）が間近に小さな極楽へと誘う。そして湿原いっぱいに咲く綿菅（ワタスゲ）がまるで天国の白い花々のように見え、柔らかなベッドをなしている。そこに裸になり巨人となって横たわる空想を重ねてしてしまう。

木道が低木の中を通るようになると、峰柳（ミネヤナギ）の綿毛が極楽の雲のようだ。赤実の犬黄楊（アカミノイヌツゲ）は光沢のある革質の葉に隠れるように小さく、だがきりりと明瞭に白い花を並び咲かせている。そして、低木の葉に糸蜻蛉（いとトンボ）たちがふわふわと翔ぶ。殊に青い縞々の蝦夷糸蜻蛉（エゾイトトンボ）が美しい。

「あっ、青いトンボ！　きれいだね！」

瑠璃糸蜻蛉（ルリイトトンボ）が木道をゆっくり渡り翔ぶ。全身が瑠璃色で、その輝きが体を大きく見せる。まるで天国で会うような優しく深い色の輝き。赤沼の愛称・五色沼はもう目の先である。

酸化鉄のため湖面の色が変化することから「五色沼」とも呼ばれ、五行思想の五色やサンスクリットの五大の五色だろうか。底、壁、それらが溶けた水中、さらに樹木と山、空と雲のそれぞれの変化が湖面に重なり、萌葱色　瑠璃色　桃色　黄金色（こがね）　生成色（きなり）もっと愛の虹色だろうか。その七色の根源は不変であり、五色沼は零下三十度になっても凍らない不凍湖。

そんな高揚感が、広大なパノラマゆえに消えることなく八幡平の見返り峠を通過し、広大なパノラマはまだ続きその高揚感も持続したまま、やがて八幡平アスピーテラインを抜け出る。

国道に出て、ゆるく下る幾つかのカーブ過ぎる。突然前で車がのろのろ動いていた。カーブである対向車線の路肩に熊の親子がいる。子熊が何かを漁

っていて母熊が見守っている。宿六は車が親子に最も近くなった時、停車してしまった。撮りたい、いや不謹慎だ、カメラはいま標準ズームを付けている、望遠に換えるか、と迷いながら、運転席側のウィンドウが故障して開かないのに気づく。後の席に移って窓を開けるか。そうこうしているうちに後から車がやって来た。諦めてアクセルを踏む。

2

その一か月後の七月のことである。

岩木山の東麓にある一つの林道を車で上がり、その先は草が伸びて進めない所で、いつものように駐車した。そして登りのない脇道へと入る。灌木の径は適度に陽光を浴び、蝶と蜻蛉の観察ポイントである。しかしこの日は何の出会いもなく、少なくとも小さな橋を渡り行き止まりの堰堤までには何かと出会うだろうと歩む。堰堤からの岩木山山頂を望む紅葉の景色は抜群だった。今はその時期ではないが、深緑も悪くないだろうと。

ここは最初の寄り道であり、短い距離でもあったので鈴を出さなかった。億劫な気も働いて、径が曲がる前ごとに低い声で手を叩き進む。かつて右側の近道があっただろう叢で、何かいないかとちょっと覗いて、再び径に戻り歩むとすぐ、径の前方がゆるく曲がり、そこに左の藪からひょいと熊が径に出て来て、いや既に体を前に少し出していたような、彼が叢で何かを探していたのを見られていたような、そんな気がしたが、体をせり出してきた。数十メートル先だったろうか。見事な熊の横姿である。そして、立ち止まってちょっと彼の方を向いた。そして、顔の向きを戻して両方の前足でぴょんと跳ねた。熊が笑っているように見えた。低い声が熊の声に似ていたのかとも思った。愛嬌を覚えてしまい、思わず「おれ金太郎じゃないよ」と心の内でつぶやいてしまった。ただただ黒いのは見知っていたが、逆光に輝く熊の横姿に、何と美しい黒と思ったことだろう。せせらぎも囀りもなく、葉群の音もなく何と静かな、と思った。沈黙の重みが固まったように思えた。熊は静かに藪のなかに後退りした。

突然背筋が凍り彼も後退り、鈴を取り出し向きを変え急ぎ足となり、振り向き振り向きしながら足を速めた。

幕間

1

その翌年の話である。つまり、今である。もう晩夏である。

夜、蛍族の彼は玄関先で家前の街灯を眺めながら、あるいは句を考えながら燻らせている。街灯にもう十年ほど前から夜蛾も飛んでくることはなく、

むしろ玄関灯に誘われて風除室の入口の透けた戸に虫たちが張り付いている時がある。時にその下で蟷螂（カマキリ）がじっと構えて。今年はどうも星空を眺めるのが少ないと思いながら、もう蟋蟀（こおろぎ）の声を聞く季節になったことに寂寥も覚えた。この月に古希も終えると思うと尚更だった。そして秋は、野山で花や昆虫に出会う機会も少なくなると思うと、生の淋しさも覚えるのだった。

彼はノヤマ・ショウヨウという名だが、名を使うこともあるまい。実生活よりも野山を好む、野山と海辺の風景、そして花、昆虫、野鳥を好み家は最後にと、それこそ宿六であろう。「宿六」は「宿の碌でなし」の意味である。碌を、愚か者の意味の「甚六」のように「六」に擬人化した、家の六でなしである。宿六になった原因は、古本、小画集、輸入盤ＣＤに安価なカメラとパソコンと、その程度の何の碌にもつながらなかった道楽であり、「道の六でなし」の造語になるが「道六」なのである。碌ではなく本来の意味の、大陸が平らかなように性格がまっすぐなさまの「陸（ろく）」が幾分かでも残っていようか、唯一の救いは「ひとでなし」までには陥っていないことであろうか、と自問する。ふと、ありゃ、六道の逆か、自分は畜生道辺りをさ迷うかと自嘲する。そして同義の六趣の言葉に転移し、勝手に真善美と知情意に変換し、それが哲学、文学、絵画、音楽、自然科学、そして家族へと組み直され、そこに輪廻する愛というものを抽象的に夢想している彼である。

翌朝また、玄関に出て燻らせている。夜と違って、いつも家の前と南側の雑草を気にしそれを眺めながら燻らせている。雑草は雪解けの春に芽吹きその成長していく緑色を愛でる彼だが、例年梅雨頃から気になり草取りに時間を費やす。しかし、今年は放っておいたため、あれやこれやで繁茂し少し手が付けられない状態である。家の南側の敷地は、真夏に丈の低い草地に捩花（ネジバナ）が百本ほど咲いて見事だったが、いまは白花の現の証拠（ゲンノショウコ）がたくさん咲いている。それだけ草地の丈も伸びている。今年の正月から、草取りにおいても一番頼りの彼の妻が不在なのだ。

煙草をもみ消すと玄関わきにある草取りの小鎌を取り出して、せめて家の前だけでもと思い、目立った雑草を少し抜くのが癖になっている。特に外来種の小錦草（コニシキソウ）が目に付くと真っ先に抜く。新築後しばらくは在来種の錦草も生えていたのに小錦草に占領されてしまった。小鎌で根元を突っつき浮かせて抜く。あとはまず茎葉が広がってきた雄日芝（オヒシバ）を抜く。こちらは四方に伸びた三茎をまとめてつかみ、小鎌を使うことなく抜く方が多い。ついでに傍にある蚊帳吊草（カヤツリグサ）も手で抜く。上の方で三方に細い茎葉を伸ばし、さあ、伸びてやるぞうという格好が彼には好ましくも、やはり雄日芝（オヒシバ）とともにいかにも荒地を思わせていけない。あと時間に余裕がある時は、伸びてきた杉菜（スギナ）を根元から摘み抜く。主に数の少ない庭の低木の下と芝桜（シバザクラ）のかたまりに伸びた杉菜である。芝桜の真ん中辺りに生え杉菜は、芝桜を踏まないようしゃがんだまま足と腹筋に力を入れ背伸びして抜くから、前身の筋肉を使っている感じがある。そして杉菜の根元を探るから地下茎で繋がっている感触を得る。

杉菜はシダ植物門トクサ綱トクサ目トクサ科トクサ属の一種である。舌を

噛みそうな分類階級だが、トクサ類は古生代の石炭紀に非常に多様化し、次の古生代最後のペルム紀にかけて大森林を形成した主要素の一つである。そのため、トクサ科はヒカゲノカズラ科などと同様に二億年以上も存続している系統といわれる。それを考えるとむやみに除去するのも、と彼はしばしば少し逡巡することもあるが、どうせ深く地下茎で繋がっていて除去が困難な別名・地獄草だからと、芝桜から突き出た杉菜を全部抜いてさっぱりしたくなる。

周知のように、杉菜は地下茎から地上へ出る胞子茎と栄養茎に分かれ、栄養茎だけを杉菜、春に地下茎から出る胞子茎を特に土筆（ツクシ）と呼んでいるが、土筆は子どもたちの楽しみでもあろうか。彼にも、胞子を吹いて遊んだ他に、土筆の節の部分を千切って茎を繋ぎ直して、どこが切れているか「当てっこ遊び」をした記憶はある。むしろ土筆を何本も掴んでどれが一番短いか、何らかの遊びの順番を決めるために幾度かした方の記憶が強い。ただ単に、一本だけ茎を千切って何本かを掴み、どれが当りかと遊んだこともあった。それは女の子と白詰草（シロツメクサ）とかで多かっただろうか。彼は八月に入ってからでも土筆を抜いていた。

他に家の前でこの晩夏に主に抜くのは大葉子（オオバコ）、豚菜（ブタナ）、母子草（ハハコグサ）であった。共に小さな花を咲かせる片喰（カタバミ）と常磐爆（トキワハゼ）は鑑賞しながら種になる前に抜く。厄介なのは藺草（イグサ）のような頑丈なやつである。土のかたまりが付いてこないように小鎌を何度も打ち付けて数本ずつ掴んで引き抜くのである。彼は、藺草（イグサ）は仲夏の季語だが句を作る気にもなれなかった。

喫煙後のちょっとした草取りはすべて素手で行っていた。終えて小鎌を元に戻すと、エンマコオロギがいた。しかしよく見ると翅があるかないかで幼虫なのだろうと思った。お腹の下から伸びる産卵管がなくオスなのだろうと。ちょっとグロテスクなような、それでいてさっぱりしたような、そう感じた。不完全変態で幼虫は何度も脱皮して大きくなるというが、それにしても大きく終齢幼虫かなと思い、すぐ背中が割れて翅の長い成虫へ脱皮しそうに思えた。そしてなぜか、このエンマコオロギに熊を連想してしまった。

2

今年の夏は晴れが少ないと思っていた。少しでも晴れると近くの野山へちょっと行ってみようと、それを彼は楽しみにしていた。そしてその日がきた。

車で一番近い所で家から十分弱で溜池へ行ける。三十分もあれば平川市の馴染みの山二カ所や大鰐町ひいては碇ヶ関の山まで行ける。岩木山の山麓にも。そこらに彼がテリトリーとしている二十本近い林道があるのだ。ただこの時、趣味仲間の係としてやるべき作業中でもあり、できるだけ近く短時間にと、東北自然遊歩道の一部である久渡寺山の山麓の山径を歩くことにした。その山径を十年ぶりくらいに初夏に歩いたのだが、もう少し知りたいと盛夏に再訪もしていた。晩夏の今、三度目となる。

最初の初夏に訪れたのは六月十四日、青森県も平年並みに梅雨入りした日だった。午前中雨が零れだしたものの昼に晴れ間が現れ、それで出かけたのだった。まず近くの鶴ノ子沢提に寄り、そして久渡寺山の山麓にあるほたる池へ。ほたる池そのものには立ち入らなかったが、東北自然歩道に途中から入る辺りで腹広蜻蛉（ハラビロトンボ）の未成熟に出会えた。青森県では希少野生生物Ｃランクであり、環境省の準絶滅危惧類に相当する。また、どこでも見られるが紅色の黒苺（クロイチゴ）が咲いていて、これから先の実の色で区別しなくとも苗代苺（ナワシロイチゴ）と異なる葉の形を確認する。他所では既に紅葉苺（モミジイチゴ）は黄色っぽい実に熊苺（クマイチゴ）は真赤な実になっていた。野薔薇すなわち野茨（ノイバラ）は今や花盛りである。蕾は赤っぽく、開いた花は雄しべも雌しべも黄色く若々しい。やがてしべは黄色から茶黒へと萎れて行くが。

野ばらといえば、誰しもシューベルトを思い出すだろう。彼もいつもそうだった。リズムに乗って「レースライン　レースライン　レースライン　ロート　／レースライン　アオフ　デア　ハイデン」と口ずさむ。ゲーテがストラスブールに留学していた時に、牧師の娘フリーデリーケと束の間の恋に落ちたが、その時に捧げた詩といわれる。内容は、青年が荒れ野で若くてきれいな野ばらに出会い、折るよと。野ばらは、刺すますよ、と抵抗する。永遠に責任をとってくれるよう、それで苦しむことがないように祈る。何とも生き生きと陽気でともに若さの束の間の幸福の謳歌か、いや、やはり悲しい、深刻な内容の詩であろうか。

彼はいつも一回口ずさんではたと止める。俺は単に野に咲く美しい花と出会い、それを愛ずるのだと。その美しさを写真に収め、みんなにも喜んでもらおうと。できれば誰かと一緒に枯れる前に再訪したいがと。

東北自然歩道のここの部分は、ほたる池から山中を歩いて堤群まで約二キロの距離に過ぎない。彼は一番高みの林檎畑へ出る所で引き返すつもりであった。それでも、のんびりゆっくり往復し一時間は要するだろうことは予測していた。これまで若い時に二人で、そして家族で、さらに一人で、倅と一緒にと四度ほど訪れていただろうか。残念ながら何か花と出会った記憶はなかった。

熊注意の看板を脇に歩き出すと、樹木に絡まった蔓紫陽花（ツルアジサイ）が緑一色の林の中で白く輝いて見える。似た岩絡み（イワガラミ）は装飾花が一枚だけであり区別は優しい。ともに葉は対生だが、花がないと有毒でかぶれる蔦漆（ツタウルシ）に気をつけなければならない。いくら葉柄に葉が三枚つくと分かっていても山中不注意になりがちである。蔓紫陽花、岩絡み、蔦漆、この三種の区別は、彼が大学院の事務員で野外実習に屡々同行した時に何度も教授や森林管理署員から聞かされたことだった。

ところで、日本が原産地と言われる紫陽花の命名に関し、白楽天が友人に花の名前を聞かれた時に、陽光に映える紫色の花なので、「紫陽花」としようという内容の七言絶句に因んでいるとされる。白楽天が実際その時に見てい

たのはヨーロッパ原産のライラックだという説もあるようだが。ヨーロッパにせよ日本にせよ、詩人はこの新規な花が仙境から来た花と詩っている。

径はすぐ狭い階段となる。といっても両脇と階段の各々の角に木切れが置かれた程度の、それこそ山径階段である。何か咲いていないか昆虫がうようよしていないか足許、近く左右を確認しながら、時に前方や水平な視線で左右を見渡しゆっくり登る。すぐ高みに辿り着く。そこに熊除けの立派な釣鐘がある。重さのあるしっかりした釣鐘であり、鳴らすと中低音から、狭くなる鐘の底から高音も同時に響いてくるような音の塊と広がりを覚えた。もうこれで安心という気持ちになる。ふっと、五月中旬に岩木山弥生コースで熊に襲われた事件を思い出す。六十代の男性が三時間ほど登った標高千二百メートル付近で熊に襲われ、両腕をかまれたのである。男性は自力で下山して自宅に戻ったというが、その間の痛み、不安、何よりも襲われた瞬間の恐怖を思うとぞっとする。ザックから手持ちの鈴を二個取り出す。ベルトに通さず二個右手に持ち、鈴をぶつけて遠くまで響くように時々鳴らして歩く。

まず斜面を九十度迂回するような径で、杉などの樹木が径の上を這ってから斜め上へと伸びていて、径といえないような細く歩き辛い径である。やがて径は幅を回復して杉の少ない雑木林となり最初の径のような余裕感が出てくる。そして、いかにも何か生えていそうな平坦な林床となる。ちょっと熊がいないかと気になるような場所でもある。一薬草の仲間が生えていた。まだほんの蕾である。葉はよく見る腎葉一薬草（ジンヨウイチヤクソウ）のそれではない。彼はまだ撮ったことのない一葉一薬草（ヒトツバイチヤクソウ）でもないが、なんだろうと期待に胸を膨らませた。

そこからまもなく高みに上がると径が少し開け、木椅子が置かれている。ああ、ここで一緒に腰掛けたいものだと思いながら、疲れていないにもかかわらず腰掛けてみる。煙草は車の中に置いてきている。風もない。

やがて下方の沢によるのだろう径が大きく曲がり、木漏れ日に加えて陽ざしが屯している個所になる。そこにチューリップ思わせるラン科の葉が二枚きりりと。茎が伸びだしたところだが、雲霧草（クモキリソウ）に違いない、また近くに斑入りの葉が付く個所で少し曲がったのは山路の杜鵑草（ヤマジノホトトギス）に違いないと、再訪の期待に胸を膨らませた。

盛夏の七月三日、この東北自然遊歩道の今年二度目の訪問であった。雲霧草と一薬草の開花を撮るためである。六月に訪れたように、階段径を登ってはまず熊除けの釣鐘を鳴らす。例の杉などの樹林の斜面を九十度迂回するような径で、蔓蟻通（ツルアリドウシ）しに出会えた。名は葉や花などが蟻通（アリドオシ）しに似ていることに由来する。蟻通しは関東地方以西に自生する低木で見たことがないが、細長い刺が多く、命名由来の一つの説に、蟻のような小さな虫でないと通り抜けられないというのがある。蔓蟻通しには刺がなく、茎の先端に白い小さな花を二つ咲かせている。花は漏斗状で、先が四裂して十字に開いている。必ず二個咲き、しかもそれぞれの花の基部にある子房は互いに合着している。それは果実になった時に確認できるが、彼はいつも羨ましいものを覚えていた。そして、花の内側にふさふさと綿毛があり、高山の薄雪草（ウスユキソウ）を思わせる。しべ

も白く、横から眺めると、雪ん子ふたりが並んで跳ねているように空想してしまう。

　蔓蟻通しに初めて出会い感激したのは、ちょうど四十年前の秋田八幡平の焼山だったろうか、その頃に登った秋田駒ヶ岳だったろうか、彼は記憶が定かでなくなった。

　径の幅が広がり雑木林になると、訪問の最初の目的である一薬草（イチヤクソウ）が立派に咲いていた。花は白く、花柱が曲がっている。萼辺が長いから、小葉の一薬草（コバノイチヤクソウ）や丸葉の一薬草（マルバノイチヤクソウ）ではないだろう。葉にまばらに低い鋸歯もあり、いわゆる種名の一薬草に違いない。考えてみれば、こんなに意識して一薬草を撮るのは初めてである。予め調べてきたのだ。

　しかし、実際に種名の区別はなかなか難しい。一薬草に違いない、初めて撮るかもしれないと喜びは強かった。

　近くに小さな流れが径をくぐり、離れた低木の葉に白い花らしきが見える。今時何だろうと近寄るとあぶくの塊のような、でも硬さはあるような、一種の虫こぶであろうか、彼は初めて見た。気づくと木に花が咲いているようにあちこちに。

　そこからまもなく細道となり高みへ上がって行くが、途中で径が崩れ、老人が簡易な柵を作っている。細木の木っ端で頼りない柵ではあるが、真新しいレモン色の木の肌が場所に似合わず明るさを放っている。彼は簡単な挨拶を述べて通り過ぎた。こんな場所で一人で作業とは、熊が怖くないのだろうかと思った。それだけになおさらに敬意を覚えるのだった。

　高みの木椅子を通り越し近くの雲霧草の場所へ歩みを早める。もう少しでという所で、小さな黄色い花に目がいく。小茄子（コナスビ）のようだ。庭にも生え気に入っている花だが、こんな山中にもと意外であった。そして花を大きめに感じた。しゃがんでマクロレンズに交換しようとして、カメラに装着している五百ミリレンズを外して気づいた。五百ミリのキャップがポケットに入っていない。どっかで落としてきたのだ。まっ、帰りに探しながらと気楽に考え、それには諦めも含まれていた。もう市販中止のレンズであり、キャップはネットのオークションで手に入れるしかないか、それが無理ならなくてもいいかと。

　そこから十数歩で雲霧草である。見事に咲いていた。これほど立派な雲霧草に出会ったことがないと思った。先端に十個ほど花を総状につけ、花は淡い緑がかった帯白色である。蘭であり、萼片が狭い長楕円形で、側花弁が狭い線形で虫の脚に似ている。一般的に漢字で蜘蛛切草あるいは蜘蛛散草と書く。唇弁は直角に反り返り、確かに蜘蛛に見える。その蜘蛛たちが一斉に散っているようにも見える。でも彼は、雲霧草の当て字を好んでいた。林に霧がかかり、そっと咲いている雲霧草だけが朧にふいと姿を見せる、いつもそんな風情を空想する。想像力をかき立ててくれる花である。

　この自然遊歩道の、といっても山径といった方が相応しいと思うが、一番の高みから脇にちょっと出ると林檎畑である。何か作業の音が聞こえるが、

人影がなく静かだ。畑は緩やかな斜面で椀状になっており、林檎の木々が人影を隠している。

もとの径に戻り下り出すと、緑小灰蝶（ミドリシジミ）の仲間が飛んで行った。見事な青さである。葉上に止まった一瞬をどうにか撮れたが、種名を調べるのが楽しみとなった。

径はまもなく舗装された狭い農道に出る。てくてくと曲がり曲がり堤群へと下りる。最初のため池が近くなると路傍にたくさん一薬草が咲いていた。少しピンク気味にも感じたが、それは花柱の先の色によるもので、一薬草であろう。そして初めて蠅毒草（ハエドクソウ）に出会う。枝先に細長い穂状花序を出し、対生する小さな花をまばらにつけ、花らしくない。花が淡い桃色を帯びているのがわずかな救いだろうか。実はくっつき虫になる。名は、全体に有毒成分があり、煮詰めた汁でハエ取り紙を作るのに使われていたことに由来するという。

道路から、近道になるだろうと林に入る。池畔を野花菖蒲（ノハナショウブ）が飾り蜻蛉たちが飛び交っていた。

帰りは、ぽつんとある高みの林檎畑付近まで戻り着く前に、かなり疲れを覚えた。径の高みを過ぎると幾分楽になったが、今度は無性に腹が減って来た。キャップを落としてきたことに気づいたあの小茄子の場所からは、ゆっくり探しながら歩む。やがて黒光りするものに気づき、それがキャップであること知り、実に安堵した。するとそこは例の木椅子のある場所であり、先の老人が座っている。作業を終えたのだろう。彼が「キャップ、見つかった！」と言ったのは、老人を意識してであった。もしかしたら、老人が何処かで拾ってそこに置いてくれたのかもしれない、そう思ったのだ。老人が何も応えないので傍を通り過ぎる時に「目的の花や蝶が撮れた」と述べた。間を置いて老人が何かを言ったが、彼は聞き取れなかった。聴力の弱い彼の所為（せい）もあろう。気になり少し戻って「写真を撮ってきた」と付け加えた。採ったとか獲ったとか誤解を避けるためである。老人はずっと笑顔だったが。

帰りにも雲霧草と蔓蟻通（ツルアリドウシ）しを少し撮った。陽ざしが異なると写りも異なってくる。車に戻った時には、出発してちょうど三時間経ていた。

さて、晩夏の今回は三度目の訪問である。八月七日、弘前ねぷたの最終日である七日日。

先に径の高みで撮れた緑小灰蝶（ミドリシジミ）の写真をフェイスブックに上げたら、いつものように町に住む知人で日本鱗翅学会会員で津軽昆虫同好会のKさんが、大緑小灰蝶（オオミドリシジミ）であることを教えてくれた。彼には初めての出会いであり、再び会えぬものかとまずは、今度はいつもと逆の堤群の方、径の高みに当たるあの林檎畑の方から歩くことにした。

堤群といえど、今は三か所のみ残っているだけである。あと二カ所は丈の低い草原（くさはら）となっていて、かつてはどんな池だったのだろう。今は紅紫の襞萩（ミソハギ）と鮮やかな黄の草連玉（クサレダマ）の原となっている部分もある。襞萩の花に赤くなり出

した秋茜（アキアカネ）がしがみつき、草連玉の葉に黄糸蜻蛉（キイトトンボ）が休んでいる。一番上にある最も大きな溜池は大開堤というが、その付近で一薬草は枯れ気味になり、もう引っ付き虫になったのか蠅毒草（ハエドクソウ）は見つけられない。

車で狭い農道を上る。上の奥にぽつんとあるあの林檎畑の方へくねくねと。上の行き止まりに畑用の駐車できる場所があるが、そこは完全に個人の敷地である。その前に、山径としての入り口付近に駐車できる場所がある。しかし行ってみると、そこに既に先客がいて、しかも車が道路に突き出て通行を遮断するように置かれている。子ども安全巡視パトロール車だ。車から人が降りてきて、声でよりもジェスチャーを大振りにUターンを促した。何があったのだろう。熊でも出たのだろうか。今日は七日日（なぬかび）であり、しかも日曜日である。何らかのイベントで子どもたちがここまでやって来るのだろうか。それとも、上の林檎畑は早生（わせ）林檎あるいは高価な果樹の収穫時期であり、パトロールはそれこそ盗難防止のための巡視車か。彼は早生林檎の種類をよく分からず、ましてや他の果樹となるともっと無知である。

仕方なく、いつものようにほたる池から歩くことにした。

ほたる池の上は「後山堤」という農業用ため池である。池畔の斜面で作業着の男が四人、野焼き作業をしている。黒苺の実は赤から黒へと熟し始めている。熊除けの鈴を取り出し、いつものように歩き出す。階段を上り熊除けの釣鐘を鳴らし、杉林の斜面を横切る細い径を進む。径に横たわり斜上する樹木の上に糞が数個。その下に一個落ちている。そんなに大きくない。猿、狐、それとも子熊だろうか。例の広めの平坦な林床、木椅子を過ぎて、目的の一つである山路杜鵑草（ヤマジノホトトギス）は、まだ早いだろうとは思ったものの蕾さえ出ていない。一番の高み付近で、目的の大緑小灰蝶（オオミドリシジミ）にも出会えない。馴染みの黒日陰（クロヒカゲ）を撮ったにすぎない。農道に出る直前で引き返した。パトロール車がまだいて、話し声が聞こえた。熊だろうか。

一ケ月ほど前に出会った里山好きたちを思い出した。久渡寺山の裏の林道では、脇林道へ右折しようとしたら、迷彩服の男女がいた。道路の先で車が泥にはまって動けず、そのため通れないよと。山菜取りの夫婦であろう、救援は連絡してあると。野鳥撮影じゃあるまいし、迷彩服は熊除けには却って不利なのではと思った。また、二つ目の観察ポイントである小さな沼付近で、川から一時上がって来た釣り人が、大虎杖（オオイタドリ）の茎を折って虫を取り出すのを見せてくれた。釣り人も川音に包まれ岩魚を求めて、岩にとぐろを巻く蛇を気にしながら沢を上って行くのに、熊との出会いが心配でないのだろうか。次の日、青い穂状の花の九蓋草（クガイソウ）と深山川蜻蛉（ミヤマカワトンボ）を求め、車両通行禁止の相馬林道へ行った。もう三時近くになる帰りの途中、若き釣り男とすれ違った。初心者でと笑顔で、この先の川の様子などについて会話を交わしたが、熊が怖くないのだろうかと。いや、彼の方が昨年熊と出会って以来、精神に臆病風が吹き、そこからいつもつむじ風となって心に出てしまいがちなのだろう。この両日にハートに交尾する深山川蜻蛉（ミヤマカワトンボ）、そして大塩辛蜻蛉（オオシオカラトンボ）と裏金小灰蝶（ウラキンシジミ）をこれまで以上に接近して撮れ喜びが大きかったが、それ以上に山で人との出会

いに安堵するこの頃であった。パトロールの人と対話すべきだったと後悔した。

この三度目の自然遊歩道の訪れでは、これといった出会いもなく、近くの鶴ノ子沢堤に寄ることにした。何かに出会えるだろうと。まだ早いが少なくとも曙繻子蘭（アケボノシュスラン）の花付きを確認しようと。池そのものは先日の長引く大雨で水嵩が増したままである。中の水辺の原は水面に埋もれている。元気に縄張りを争っていたあの蝶蜻蛉（チョウトンボ）たちや箆面高（ヘラオモタカ）はどうなったのだろう。そう案じながら寄り道なく曙繻子蘭（アケボノシュスラン）へ。熊注意と車両通行禁止の看板および通行できないように置かれた鉄製らしきバリケードを無視して、いつものように歩き出す。草も時々生えたこの林道は、ずっと山中であり、かなり歩き上がると行き止まりにぽつんと林檎畑が広がる。半ば捨てられた林檎畑である。その終点まで二度しか行ったことがない。

彼はいつもこの林道を歩きだしてまもなく左折する。かつて右側の奥に熊捕獲の檻が置かれていた。左折の径は短く、杉林から雑木林に変わっては径は自然と消える。その辺が蘭では曙繻子蘭（アケボノシュスラン）や深山鵐草（ミヤマウズラ）、秋の銀竜草（アキノギンリョウソウ）、錫杖草（シャクジョウソウ）などの観察ポイントである。まだ早いとは思いながらも、それなりの兆候を確認するだけも満足を得られるのだ。自然遊歩道では何も出会わなかったゆえになおさらだった。

径は叢同然だが、時々地面が露出する。そして何か黒っぽい甲虫が蠢いた。歩行虫（オサムシ）の仲間のようである。結構大きい。マクロレンズに換え、屈みだす。視点を変え、絞りを変えては時にストロボを用い、腹筋と足腰の疲れそして呼吸の苦しさを覚えながら時間をかける。撮るのももう十分だろうと腰を上げ、十歩も進まないうちに、右の路傍数メートル先の葉の茂る低木から、にゅーっと熊が顔と前足とを、そして半身を出してきた。まともに顔を合わせ、子熊かと思いながらも思わず体をやや横に振ってしまい、ザックが右に振る。そのため彼が大きく見えてか熊は低木に引っ込んだ。逃げてはいけない。じっと熊を見張って後退り（あとずさ）と。子熊？　親熊は？　いやそれなりに大きいから親離れした熊だろう。子熊に野苺を教え、子熊がそれに夢中になっている間に母熊はそっとその場を去る「熊の苺落とし」からは、月日が大分経つだろう。だが、郊外住宅で悪さをする「離れ猿」のように、まだ出産に有利であった郊外近くにいるのだ。熊はすぐ低木の向こうに出て、こっちを振り向き、その時でさえ近眼ながら目と鼻と口がはっきり目に焼き付いたほどだった。熊は丈の低い草の雑木の斜面を駆け登っては、二度停止し彼の方を振り向いた。もう気も落ち着いている彼には可愛いという気持ちも生じた。熊は上の茂みに消えていった。携帯で時間を見た。午後三時十分。もう熊の時間か。彼はよく訪れる径であり、鈴を出していなかった。今更に鈴を取り出し、引き返したのだった。

終幕

1

昨年からの熊との出会いにすっかり憶病になった彼は、それでも岩手県北にある未踏の七時雨山（ななしぐれ）に登りたく、倅と一緒に出向いた。八月十四日、お盆の日である。

まず若い時にタエ子と二人で七時雨山荘まで下見にきたことがあった。その時は田代山からパラグライダーが飛んでいるのを見て羨ましく思った。その後、家族で反対側の高みの登山口からさらに車で上り下見に来た山である。たかがこの程度の一人で軽く登れる山でと嘲笑される幻聴を覚えながら、付き人と来たのである。

登山口にある駐車場に間近な路上で、女性登山者を一人追い越した。駐車場でトイレの用を足しては準備をしている間に、その女性登山者が自分の車に戻って来た。七時雨山と、道路向かいの田代山をぐるり登り歩いて来たという。ちょうどお昼である。そのタフなことに驚くとともに、熊を怖がらない度胸に感激した。その意気込みに鼓舞されていざ七時雨山へ。

日に天候が七回も変わることが山名の由来といわれるが、なぜそんなに変わりやすいのだろう。大方どんな地形に位置し、ここもどんな地形なのだろう。約百万年前に活動した七時雨火山を構成する溶岩ドームであり、この辺の田代平高原は、七時雨山火山の中心部で田代平カルデラであったという。その外輪山が田代山などといわれる。ここ山麓は古くから南部馬の産地となっており、現在でも酪農が盛んであるといわれる。

登山口に柵があり施錠されている。柵を乗り越え裏から見て気づいたが、簡単に施錠を外せるようになっていた。牧場の柵なのだ。しばらくいかにも牧場らしきなだらかに広い草地で、その端に道が続いている。気分爽快となる。だが、林の中に入って行くと、まもなく径は泥にまみれ、いや泥に覆われ、トレッキングシューズでは無理な状態である。近日連日の豪雨に見舞われ、靴の底は泥だらけになるだろうことは覚悟していたが、これほどまでとは。脇の林の中に入って行くと、確かに踏み跡があり、しかし泥と水たまりでこれまた進めない。片方の脇は茂みがらみで入ることさえできない。二人は、紅葉の時期にでも再訪しようと諦めた。

2

夕方に寄る予定だったタエ子の生家、いや義父の家に登山中止のため早めに着くことになった。トレッキングシューズは汚れたままである。家の脇は広い畑であり、今年は豆を植えることがなく草が茫々としていた。春に、家のすぐ近くにカモシカが現れた、初めてこんな近くで見たとタエ子から電話があったのを思い出す。

まずは五十数歳で亡くなった義母に線香を上げる。そして、小さな居間に入るや、普段もの静かに優しく言うタエ子だが、幾分早口で興奮気味にテレ

ビのニュース項目を選んで、

「盛岡はきのうから熊騒動なのよ。きのう開運橋で、駅に近いあの開運橋、分かるわね、橋の下で熊が確認されたのよ。」

河川監視カメラに橋の下を歩く熊が写り、人々は熊に気づかず普通に橋を渡っていたという。その後、街中の北上川沿いの遊歩道を熊が走って行ったのが目撃され、今日も繁華街の大通りや街の南側の明治橋で目撃され街中騒いでいるということだった。そしてニュース項目を全国版に変え、他県だが今日のニュースで、彼女が熊に襲われそうになり男が熊に体当たりして救った事件を知らせた。

「あんた、私が襲われそうになったら、やれる?」、

タエ子のタエは、漢字で妙だったろうか。ミス盛岡がもたらした小柄な妙子。老いてなおしばしば思春期の娘のような妙子。逍遥ばかりの宿六と同棲したばかりに耐え子にもなってしまったのだろう。宿六の無職や安給料に耐え、自分の稼ぎを生活費に子育てに回し、そしていま時間を高齢の老父に捧げ。いや、老父でなくて生家で若い父のまま、純粋な妙子に戻っているのかもしれない。タエ子はいつまでも清楚な花であり、宿六は離れ熊なのかもしれない。目的論の目的がすぐ傍にあるのに、いつも落ち着かず何かを求めてさ迷い。いずれにせよ、多恵子の妙子であって欲しい、宿六は今になってそう願うのだった。

古銭を握り

あなたは彼を御存知でしょうか。

春に退会の届出をした彼のことです。

太陽があまりにも丸く、数日異様なほどギラギラした春まだきでした。太陽面で発生する爆発的なエネルギーの解放であるフレアーが特に活発化し、太陽風の速度が通常の毎秒四百キロメートルを遙かに超え、コロナホールの影響が地磁気活動を大きく乱し磁気嵐が生じた春のことです。その時、電波や通信障害が起こりました。彼の心もその時に紊乱したのかもしれません。

お尋ねしたいのは、その退会した件ではありません。ましてや、彼の職業や履歴などでもありません。ただ、肝心な、彼自身の趣味の度合についてです。なぜ入会し、どれだけのものを蒐集し、どれほどの内容を学んでいたかです。

会員二十名弱の隔月の定例会に、彼はその三分の一も出席していませんでした。例会はほぼいつも同じ顔触れの七、八人の集会であり、彼らは会の何らかの役名を持っている人たちでした。趣味の世界ですから、会社と違って手当の支給の必要がない役職を多くして、単に楽しみ合うのを重んじており ました。役柄があればそれだけ遣り甲斐も感じられましょう。会は展示会とか発表会などのイベントを開催しないのに、係が多いのは不思議に思うほどです。それでも、俳句結社のような出席率は望めません。ましてやこんな田舎では、地方ではどこもそうかもしれませんが、若者の人口が減少していくばかりで、時代遅れの内容も加勢してか、なおさらに新会員は望めません。従来からの会員は高齢化によるリタイアやご逝去で減っていくばかりです。そのように人の入れ替わりの激しい会でもなく出席者が少ないにもかかわらず、彼は皆にあまり知られていませんでした。

あなたは彼のことを少しは御存知かと思います。

例会で何度かお会いしているはずです。

職務や社会的活動等でご多忙な身のあなたも例会へのご出席は芳しくないことは知っております。でも、何度かお会いしておるはずです。彼はあなたと同様、久々に出席しても遅れがちで、空席ばかりの後席に静かに座り、閉会前の中座も数多度（あまたたび）でした。

例会は全員による一人一人の近況報告という場もなく、メインである会長による中央雑誌からピックアップした全国的なトピックの紹介のあと、自由発表として同じ顔触れによる幾人かの実質的な近況報告が続きます。嗜好対象が貨幣ですから、新規の発行は滅多になく、その報告も新規な事柄よりも既知である事項の自らの気づきを告白したようなものに過ぎませんが、聞く側にとって初耳の場合は、新鮮な喜びになります。それを楽しんでいるのです。発表された内容に関し、脇からもっと詳しい自慢たらしい補説があるならば、会場を沸かせます。誰しも集会で最も望んでいるのは、何らかの我褒（われぼ）

めに酔えることです。しかし、大方は皆さん普段あまり勉強をしておりませんから、各人からの陳腐気味な陳述でも、「お～」と頷き、感心し合っています。発表内容は個人的な生活上の、いやむしろ健康上の近況報告、強いては怨言（えんげん）に変わってしまう場合も多いのです。そして、正味一時間足らずで会はお開きとなります。そんな概して静かな雰囲気を彼も後席で一緒に楽しんでおりました。たぶん、あなたにあっても同様に相違ありません。ご多忙なあなたにあっては慰安であったことと思います。

あなたは集会そのものが終わればそそくさと退席されたと思います。彼の方は時に後片付けの手伝い等で最後までおりましたが、解散時に誰かしらからお茶などの誘われもなかったようです。なにせ皆さん各人の次の用事を足すに時間がないかのように慌てるように自分の車に乗り出す始末ですから。そんな訳で、彼は会ではずっと無口に近い状態でした。そんなお二人ですが、後席で配布資料の手渡しなどで一言二言会話を交わしているはずです。

そうです。

彼は三年前の三月で仕事を辞め、ようやく例会に顔を出すようになりました。入会はその十年も前なのに、完全に名ばかりの存在でした。顔を出すといっても、先ほど述べたように年に数回にすぎず、会費を納めるためや年末が主であったでしょう。

先に述べることになりますが、彼について私が述べることができるのは、次のような事柄です。

彼は何度目かの札幌での二泊の出張の時、まだ幼い子供へのお土産を買うために、夕方いつものようにデパートへ出かけました。その途上に骨董屋があり、もしかして昔の玩具でも陳列されていないかと、初めて骨董屋なるものに入ってみました。そうして目にしたのが、天保通宝でした。ちょうど千円でした。子供には高すぎると思いましたが、彼には次第に手ごろな価格に思えてきて、自分の少年の頃の喜びを思い出しつい買ってしまいました。あの小判を思わせる大きな楕円形に古銭らしき四角い穴があいたのを持ち、その手触りと重さを感じながら眺めるのが好きだった少年時代の感触が思い出されたのです。帰ってから、天保通宝を何度も石鹸などで洗浄してから、子どもに与えました。喜んでいたのは確かですが、何に喜んでいたのかは定かでありませんでした。まだお金の価値もよく知らないから、大きさや重さでしょうか。昔のお金だといっても、昔という観念もまだ生じていないだろうから、その形とかであったに過ぎないとしても、彼は嬉しくなりました。

翌年また同じ業務で同じ時季に札幌へ出張した時に、職務から自由になると早速あの骨董屋に出かけました。天保通宝をもう一枚買ったのです。二枚あると、子供もチャリンチャリンとぶつけあって音も楽しめると思ったからです。そしてその傍らにあった一枚百円の永楽通宝と文久通宝も数枚ずつ買いました。自分がそうであったように、穴銭を数枚握ってその感触とチャリチャリとした音を味わい、ぱっとテーブルや床に転がす、その落ちる音や転

がりぶつかる音を楽しむだろうと思ったのです。やがて何度か東京にも出張するようになり、その時も古銭を気にしていました。ただ、大都会で骨董屋に出くわすのは大海捞针（たいかいろうしん）に思え、もしやと思い周辺を少しは知っている唯一の場所である上野駅あたりの古本屋を数件訪れてみると、二件にありました。どちらも山積みの書籍の棚が並ぶ一隅に、結構な種類が置かれていました。どんなに喜んだでしょう。しかも中国の古銭もありました。何王朝のものかも分からず、置かれていた異なる名の穴銭を一枚ずつすべて手にしました。この時から、もう自分のために買い出したのです。その後の上京で、別な古本屋も見つけ、さらに場所によってはデパートのコーナーでも販売しているのを知りました。ただ、デパートの場合は新品あるいはそれに近いものでしょう、綺麗で高値のコインがほとんどで、記念に一番安いものを一、二枚買う程度でした。さて、肝心の子どもの方はというと、弟もできて、子どもたちは、ポケモンから遊戯王というカード集めに興味を持ち、あの小さな「トミカ」というミニカーの車種を集めては、やがてプラレールで車両をつけ足していました。

ある日、彼が住んでいる街の本屋で、偶然『日本貨幣型録』が目に入りました。毎年刊行されているそんな書籍があるのに驚くと同時に、自分の知見の狭さに羞恥を覚えました。早速に未所持の近代コインを調べ、金貨や高めの銀貨は最初から諦めて、載録された広告欄を見比べながら、通信販売でも購入し始めました。また、ネットでも貨幣に関する知識を得ようとサーフィンするようになり、お隣のK市にある古銭愛好会を知ったのです。残念ながらネットではK市の愛好会は全国の貨幣あるいは古銭の研究会・愛好会の一覧表に名称と住所などが出てくるだけで、その内容については分かりませんでしたが、住所を頼りに次の例会日に会場を探し、早速に入会したのでした。より良い貨幣の蒐集方法や実際的な鑑賞、具体的な保管の仕方について知りたかったのです。

しかし、興奮も一時的なもので、通信販売の注文は四、五回で終わり、仕事の多忙さも加わって入会の熱も次第に冷めてきました。ほとんど出席しなかったのはそんな事情によると思っています。ただ自宅で目の前にある古銭やコインを、握っては転がして感触と音を楽しむだけで満足していたようです。その楽しみも、ものの十分で終わってしまう場合が多いようでした。

そして、彼が定年退職する数年前に、これを最後にと、コレクションとは言い難い僅かな収集をもう少し堂に入るものにしておこうと、ネットのオークションにも入札し初めました。近代貨幣の欠落を少しでも埋め、そして中国各王朝の古銭の種類を増やし始めました。そのために、貨幣に関する書物も少しずつ購入し、十数冊になりました。仕事帰りに夜遅くまで開館している街の大学図書館にも寄りました。いくら経済学科があるとはいえ、そんな書物があるのが意外ではありました。そして、大学に配備されるほどだから、古銭もばかにならない、少なくとも研究価値があることに少し誇りも感じました。中国語原書の貨幣の図録のある研究書まで借りました。春秋戦国時代

と秦・前漢から清朝まで、五代十国や遼・西夏・金などの鋳貨まで手を広げました。紙幣には相変わらず無関心なまま、オークションでの入札で少しずつ品目を増やし続け、知らぬ間に海外の古い時代の硬貨や世界各国の現行硬貨まで手を伸ばしていました。

安価なものばかりですが、ドイツやフランスなどの十九世紀十八世紀からやビザンチン帝国や古代ローマ・ギリシア、アケメネス朝ペルシャやゾロアスター教の中心地であった古代バクトリア、古代インドはクシャーナ朝のカニシカ王やマウリヤ朝のアショーカ王などの鋳貨からマガダ国やコーサラ国まで手を出していました。それによって世界の種々の古代王国の歴史を偲び、楽しんでいました。さらに、世界各国の現行コインを、ベラルーシからキルギスまでのソ連からの独立国や太平洋とカリブ海に浮く諸島の国々、イギリス領のガーンジー、ジャージー、マン島まで集めました。それは地理の復習を含む楽しみでもありました。彼は中学生の頃から世界の歴史と地理が好きでした。それが貨幣収集の志向と相関をなしていたようです。

以上の内容は、彼が例会で誰かに問われて応えたものを繋いで述べてみただけです。彼の方からは質問もなかったし、どなたかの意見に補説を述べることもありませんでした。研究家ではなく、少しだけ蒐集の単なる愛好家に甘んじていました。

あなたは彼についてもっと知っておられるでしょうか。そうです。Sさんが彼について何か言っておられたかです。

Sさんも会員であることを彼は数年前に知りました。Sさんは彼と高校の同期生です。Sさんとは同級ではなく、彼をご存じないと思います。Sさんの方は優秀で器量も良く、学年の間で目立った存在でした。彼が例会で最初にSさんを見た時、その綺麗さに驚きました。Sさんは某総合病院の看護部長や県の関連団体の監事をされており、ずっと独身であることは仄聞していました。Sさんはあなたと少し離れて後席にいて、あなたとの途切れ途切れの会話を彼は耳にしていました。Sさんは少し外国紙幣を蒐集し、ヨーロッパの幾つかの国々に旅行していることなどを初めて知りました。そんなSさんと会話しているあなたに随分と羨慕(せんぼ)しました。彼はどれほど会話に加わりたかったことでしょう。

彼はSさんから一度も話し掛けられませんでした。それだけに、一度だけ後席でSさんからの配布資料の手渡しで偶然にSさんの手に触れた時の感触を、彼はずっと忘れませんでした。そして、Sさんにある感情を抱くようになりました。もしかしたら彼に何か気づいていたかもしれません。それを知りたかったのです。彼は退職金もなく、貯金を叩(はた)き尽しそうになりながら古銭収集に精を出している実情を、同期のSさんに看破されるのを怖れていたのです。そして、すこぶる羞恥心も覚えていました。

あなたが大学病院の勤務医であることを、大分経て知りました。会では先生と呼称される方が多く、あなたもそのお一人でしたが、貨幣についての先

輩、あるいはただご年配ゆえの呼称かと思っておりましたが、それだけではないのを少しずつ了知しました。K市の商工会議所の会長でもある当会会長の身分は入会前にネットで調べておりましたが、事務局代表が社会科の元教諭で高校長退職者であり、会員に大学の経済の先生を始め元教員や元行員、会社社長や医師が多く、しかも大方彼が住む街の方々であることを次第に知りました。そんな会員の多い会に喜びを覚えると同時に、次第に一介のサラリーマンでしかなかった自分の居場所が窮屈になり、初歩的な僅かな収集にも恥じるようになり、ますます会への足が重くなるばかりでした。ひとつ山を越えた県都には歴とした本格的な貨幣研究会があり、江戸時代の東北地方の藩貨や民貨に関する研究での全国的な評価を入会前に知っておりましたが、あなたのそちらの研究会への関与についても後に悟りました。

そのような理由で、あなたも、同時にSさんもますます遠き存在に思われてきました。彼はますます名乗り出る時宜を失っていたのです。Sさんは彼について何か気づいていたでしょうか。

私ですか。私は、その彼なんです。

彼の名は私の実名そのもので、私の方の名はネット上のハンドルネームです。あなたの街とは車で一時間半ほどの距離で、あなたに逢着（ほうちゃく）する機会もないでしょうから、お手紙でも最初からそのまま匿名を用いておりました。どうかお許しいただければ幸いです。これまで貨幣に関し三度お手紙を出させていただきましたが、私の意見はすべて書物からの換骨奪胎です。途中からもう、あなたは見抜いておられたと思います。

あなたとお手紙を出し合ったのは、会でお会いするずっと以前でした。会で初めてあなたのお名前を聞き、初めて拝顔した時にはとても驚きました。あなたに名乗り出たかったのですが、場の雰囲気に負けてしまい、ついにこれといって話しかける勇気を持てませんでした。会ではお客様的存在でしかなかった私の負い目と羞恥からです。

先ほど述べましたように、私は蒐集がそれになりになると、各種の書物を参考に貨幣について編年式にまとめ出しました。そして、その箇条書き風な記述を、貨幣のページとして自分のホームページに付け加えアップし、特に中国歴代の銭貨の項目では所持している古銭を撮影し画像までつけ始めました。いつだったか、あなたから質問のメールを初めて頂いた時には、喜びと同時に、質問に答えられるほどの者ではない恐縮さも覚えました。それにも関わらず古銭に関しお手紙を続けてくださったご厚情に感謝いたしております。

あなたの述べられた「お金というものは本来〈あげる〉ものであって、〈もらう〉ものではない。〈もらう〉ことができるのは、それこそ古銭のみです」というご意見に特に感銘し、考えさせられました。また、あなたによって、貨幣は、価値を剝り落した純粋な〈対話〉であるという師表（しひょう）に気づきました。対話を載せた見えない貨幣が、鼎談、そして討議、協議へと展開していくと

いう貨幣観、いや経済観を考えさせられました。殊に貨幣を媒介にした愛の対話の何たるかを教わる思いでした。あなたを思うと、もっとあれとあいつと、そして、あの人とあの方々ともっと話をしなくてはと思うようになりました。でも、気づくのが遅かったかもしれません。せめて真っ先に、あなたと実際に出会ったその日に、思い切って話しかけるべきでした。Sさんにしてもそうです。後悔先に立たず、です。

あなたは今、テーブルを介して対座し、私の目睫におると言っていいのでしょうか。それとも、いまでは私が一方的にただあなたに手紙を認めているだけなのでしょうか。すべては私の独り言なのでしょうか。いずれにせよ、あなたがそうさせるのです。そして、あなたはもうこの世におりません。

あなたはSさんのマンションで亡くなられました。

あなたが亡くなる少し前に、私は気を奮い立たせ初めて同窓会に出席しました。Sさんに会えるかもしれないと思ったからです。彼女も出席していました。三年次のクラスも離れていたので、同窓会でも会話を交わす好機を得ませんでした。ただ、時々離れながら彼女を探し、盗み見をしていました。殊に笑顔に見惚れていました。それでも、とても幸福を感じました。同窓会が終わり、各人それぞれ二次会に散りましたが、私が誘われた四人だけのグループに偶然にも彼女がおりました。二次会での居酒屋の席は、彼女の真向かいでした。四人で各自の高校時代の思い出に花を咲かせ、その時は会とあなたは俎上に上りませんでした。ただただ、彼女との会話に弾んでばかりでした。二次会も解散になってから、ふっと会とあなたについて気になり出し、無性に後悔の念に襲われました。でも、会話中に思い出したとしても、私に切り出す勇気はなかったでしょう。

その後も彼女とは同窓生の絵の展覧会で偶然一緒になり、会場を出た後に近くの茶店で二人でコーヒーを飲んだり、マーケットで出会ったりしましたが、従来通りです。彼女は私が同じ会に所属していることに気づいていないようです。確かに、会で彼女を見かけたのは五度ほどで、彼女はあなたがいるから時々定例会に出席していたように思われます。むしろあなたが、彼女がいるから入会したのだと思います。K市よりも距離的に同じくらいの県都の研究会の方があなたに相応しいはずです。

でも、もう疑念はありません。あなたは彼女のマンションで亡くなりました。このお手紙も、謹んで哀悼の意を表してのものです。また、彼女へのお悔やみをも申し上げたく記しております。いいえ、あなたにあってはご本望でもあったことと思います。また、彼女にしても、そうかもしれません。私はあなたにお別れを告げたかったのです。これまでの惜しみない雅量に深謝申し上げます。ありがとうございました、さようなら、と述べたかったのです。

聞いておりますでしょうか。

私が先ほどから話しかけている〈あなた〉というのは、形式的には、Sさん、あなたの愛人に対してですが、内実はずっと、Sさん、あなたなのです。Sさんの内にある愛人の彼を通して、彼の中にいるSさん〈あなた〉への語りかけなのです。

あとは、私の心境を表わさせていただくために、私は彼に戻ります。

彼は春に古銭愛好会を退会し、晴れ晴れした気持ちで自転車をこぎ求職のためハローワークへ数日ごとに出かけた。自宅にいてネットで最寄りのハローワークの求人一覧と各求職票を閲覧できるが、何十台ものパソコンが並び、空席がないほど賑やかに求人者がディスプレイを操作している情景に和みさえ覚えていた。求職者がみな必死に現行貨幣を求めているように思え、古銭蒐集時の情熱と同類の共感を深めていた。安いラーメン一杯分の現行コインを一枚でも引き出そうとするかのように、パチンコ台の前に座って睨んでいるような真剣さがある。彼の場合、定額の年金は光熱費と通信費だけで消え、ガソリン代どころか、日々の食費さえ残らない有様だった。もう貯金も底をつく。でも、かつての高齢者の指標であった還暦と現今の高齢者である六十五歳の間で、宙ぶらりんな失業者にありながら、自虐的に自由を楽しんでいるのも確かである。相談役のカウンターも三方ずらりと並ぶハローワークの雰囲気はそれを助長し、若き浮浪者の快活なヒッピー感覚をも蘇らせていた。

ある日、ハローワークからの帰途、スーパーに寄って安弁当でも買おうとしたら、スーパーに入っていく彼女を見にした。彼は何の躊躇もなく彼女のもとへ駆け込んだ。彼女は憂い顔であり、旧知の間柄から零れる懐かしそうな笑みを交えていた。その憂いと笑みというコインの表裏のようにどちらが真の表情か分からぬまま、変わらぬ髪型と眼、頬に鼻筋、そして何よりも触れたこともない唇に魅了されていた。そしてネックレスに驚いた。胸の上に目立つそのペンダントは、ギリシャ神話に登場する名医アスクレピオスをあしらった、コモドウス帝かカラカラ帝かの皇帝コインの裏面の図柄である。彼はそのペンダントをどこかで見た記憶がある。そうだ、ネット上でだ。誰かのフェイスブックか、いや確かブログであったような気がした。彼は帰宅するや、アスクレピオスすなわち一方的な恋敵に嫉妬するかのように、そのペンダントの画像を探した。割合短時間で探し当てた。

M子様、以上、初めても同然ながら、長々とメールを出して申し訳ございません。どなたかの関係でフェイスブック友達でおりましたが、M子様にあっては、個人情報はすべて伏されおり、どんな方か存じ上げませんでした。M子様は滅多に自ら情報発信することもなく、そのために忘れがちでした。ただ時々、リンクを貼られたM子様同名のブログも覗かせていただいており、この度そのブログの中でアスクレピオスの図柄のペンダントを確認させていただきました。愛する人を失ったその形見としてのペンダント。悲しみを

託しアップで写したその画像が強烈に印象に残っておりました。M子様、あなた様のペンダントなのですね。

M子様は、そう、Sさん、あなたのハンドルネームだったのですね。驚きました。しかも、フェイスブックは実名使用で許可される信用あるソーシャルネットワークだけに、驚きました。M子様のお名前は何らかの筆名か雅号でしょうか。

M子様、ハンドルネームの私は、追ってネット上で、Sさんにではありません、M子様に結婚の申し込みをいたす所存です。二人で仮想結婚し、バーチャルな式場で祝い合い、蒐集した各国の貨幣で世界一周し、古銭で歴史を遡及し古代のアジアやヨーロッパを一緒に旅行したい所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

ふたりトンボ

郊外の南側は東西に広がるなだらかな丘陵で、連綿と林檎畑に占められている。街から最も近い山らしき林に向かって、そんな小高い林檎畑の尾根風な高みを走る農道があった。農道が狭いだけに、左右やや下方気味に長閑な景色が眺められた。西に壮大な岩木山、東に遠く八甲田が据え、正面はほぼ久渡寺山である。その農道を進んでまもなく、その最も近い杉林に沿うことができた。そして、杉林の中へ右に折れる目立たない脇道がある。それを下っていくと、農業用水と治水を兼ねた溜池（ためいけ）があった。険しくない谷の、下流側にただ土を盛り上げて堤を作り、川を塞（せ）き止めただけの簡易な谷池である。

奈良岡は初めてこの溜池を訪れた。五月中旬のことである。

数日前、奈良岡はちょっとドライブでもしようと、アップルロードを走った。街の南側のこの林檎畑が中心の丘陵地帯を、東西に二十キロほど走る農道兼観光道路である。三十分ぐらいで走れるのだが、途中何度も駐車した。延々と続く春らしい林檎の花園に、その景色と薫風を楽しんだ。そんな景観の中、アップダウンする走行にも快感を覚えた。見晴らしの効く幾カ所での岩木山の展望も目的だった。

帰宅してからネットでアップルロードについて復習した際、地図でこの溜池の所在に気づいたのである。アップルロード沿いにある街の霊園の奥の山際に、大きめの溜池があるのに驚いたのだ。行ってみたくなった。晴れの日を待ち、早速出向いたのである。

溜池は街に近いのに、想像以上に杉林に隠れ秘められた佇まいを呈していた。堤に立つと、平日だというのに三人の太公望らしきが、離れて静かに釣り糸を垂れている。堤の斜面は波打ち際から上の方へ三分の二ほどコンクリート張りで、三人とも水面ぎりぎりに木製の椅子に腰かけていた。斜面に対し椅子の前の脚が長く後脚は短く、座席は水平になっている。上手い手作りである。時々魚が水面を跳ねる音とその水輪が揺れる。外来種の放流を禁止する立札があった。「ゴミとバスは持ち帰りましょう」という文句もある。ヘラブナの釣り場でもある。池は左右正面が雑木林に囲まれ、水口の正面の方は湿地も少し広がっているようだ。それにしても大きな池である。奈良岡は近隣の溜池は八カ所も訪れているが、それらの何倍もある大きな池だ。船着き場を設けて漕ぎボートを幾艘か置いてもよいと思った。そして、自然味溢れて静寂であり、長閑に覚えた。

「驚いたね、美紀江。こんな近くにこんな立派な溜池があったとは」

百数十メートルの長さの真っ直ぐな堤は、水面からどれぐらいの高さだろう。三メートルはあるだろうか。堤に立って後ろを振り向くと、斜面は数倍も深く、すぐ田圃である。耕作地はまだ狭く、少し棚田になっている。田圃は徐々に広くなっていくが、まもなく両岸は急に小山に狭まれて川だけとなる。そして、小山の向こうは林檎畑に変わる。

ちょうど、堤のすぐ下の棚田で三人の女が腰を屈め苗の手植え作業をしていた。田植えは既に終わっており、二番植えのようだ。二番植えであろうと

年配者であろうと、早乙女と呼びたくなる懐かしさを覚える場景である。左右の丘陵に挟まれて、早乙女がいる棚田が続いては林檎畑に挟まれ、その向こうに大きく岩木山だけが見える。

「美紀江、胸が洗われるような、泣きたくなるような景色だね」

この溜池は、下流に沿った田圃への、田植えや真夏の渇水の恐れに対する水量の調整と、多雨時の災害防止を兼ねた潅漑なのであろう。それなりの大きさの池であり、北国だけに、上から流れる冷涼な雪解け水を貯えておき、田植え時の田圃に温んだ水を供給し冷害を防ぐ目的も兼ねているのかもしれない。そんなことを思いながら、この川が街中へ流れるまでに、飛び飛びにある三つの溜池を思い出した。三つ目は、底を掘り上げてだろう低い周囲をコンクリートの堤で囲んだ皿池である。昔はこの川に七つの溜池があった、と人から教わったことがある。

溜池の東岸の手前は少し草地になっている。雑木林の隙間に入口らしき踏み跡があり、草地に行ってみた。水辺に向かうと次第に草地が湿ってきて、長靴で良かったと思う。水辺に沿って進むと、時に魚が跳ねる。更に沿っていくと、低いながら小山が突き出ていて先を阻まれたが、小山をぐるり迂回するらしき踏み跡がある。迂回路は山中を思わせる太い蔓が絡まった雑木林だった。冒険心をそそるその中を通り、突如として湖にでも出たかのような明媚な景色に出くわす。水辺は綺麗な地面で縁取られ歩きやすい。岸は入り江に入っていくようになだらかに曲がり、その先に立ったままの釣り人がいた。その背後を静かに通り越し、入り江らしき端に辿り着く。農業用溜池なのに、実に山中の綺麗な沼のように感じられる。時々ここを訪れてみよう。心の慰めになる。釣り人がいるものの、ここは街から近いにもかかわらず隠れた場所に思えた。生き物たちがたくさんいるような気がした。

「美紀江、こんな池があったなんて。また来よう」

奈良岡は高校の生物の教師だった。生まれ育った街にある大学の理学部で生物学を専攻し、難なく高校教師になった。まもなく大学時代の後輩美紀江と結婚し、一男一女を得た。街周辺の高校を幾つか歴任し、近くの郡部に一度出たあと希望通り市内の女子高に赴任となり、長らくそこで教鞭を執った。その間、市内ＪＲ駅付近に新築を構え、頭金を半分以上も捻出したので住宅ローンに頼った月賦はそれほどの額ではなく、しかも十年で返済できた。管理職を意識したのは五十歳を超えてからである。教頭職への受験は四十歳から可能であったが、その頃は分掌主任とか学年主任を担ってはいたものの、むしろまだ子育てに夢中であった。やがて長男も大学を終えて就職し、娘も嫁ぎ出すと、何よりも仕事に専念するようになり、次第に脂が乗って若い教師たちを指導するようになった。そして、管理職が脳裏にちらつくのだった。まずは教頭職試験に挑戦する必要がある。折しも、教科教育や学級運営、課外活動等の現場だけではなく、教育法規や学校経営にも関心を深めていた。殊に、単に勤務校の進学率を高めるだけではなく、むしろ校風を強め高揚す

ることに意欲を持ち出していた。本来の担当の生物クラブより、非常勤講師に頼っていた美術に関心を持ち、奈良岡は美術部の顧問も買って出たのである。女子高だけに生物クラブは細々としたもので、美術部の方が活発だった。街では高名な画家である高齢の非常勤講師は体調不良で休むことが多く、そんな時、教務主任であった際の奈良岡が代行していた。単に前回の授業の継続として、生徒たちには制作を続けさせていればいい。自分が何ら指導をしなくても、生徒たちは制作に夢中になっている。顧問になってからは、自ら具体的に指導ができないため、年配の卒業生に中央でも著名な女流画家がおり、その作品の複製を模写することも始めさせた。かつてこの女子高から街ではすぐれた絵描きが数多く輩出し、彼女らは高齢になっても現役として活躍している。その伝統を復活しようと思った。次第に部員には自由に描かせ、時に洋服や肌の表し方の参考にと図書室から画集を借りては、それを指し示しながら言葉で助言していた。そんな課外活動をしながらも、普段勤務校を引けて車で十分もあれば帰宅でき、七時前後にはもう家で着替えをしている。夕食後は書斎にこもり管理職試験の勉強ができた。

もし教頭になったら、口の悪い教師が使う底辺校という言葉は嫌いだが、敢えて教育困難校といおう、そんな辺陬（へんすう）の高校や、全然経験したことのない定時制に赴任させられるに違いない。勤務中の学校の教頭になることはないし、今までに勤務経験のあった学校に赴任する可能性も極めて少ないであろう。そう思いながら、他校への転勤を覚悟で、教頭になるための管理職試験を受けた。

青森県の場合、教頭になるためには教職経験十年以上で四十歳以上、校長は教頭歴二年以上で五十八歳未満という制限がある。奈良岡は年齢的に躊躇する余裕などない。選考試験は筆記試験と面接試験の両方を実施している。面接試験は志望動機や運営方針、同僚の教員に対する心構えや指導の仕方当たりを下書きしておけばいい。奈良岡はますます試験勉強に励んだ。

二度目の挑戦で教頭になった。最も遠い下北に単身赴任となった。その時、美紀江は病んでいて、街の大学付属病院に通院する必要があった。

夏ももう盛りである。美紀江とずっと離れていた時と同じような思いで、しばらくぶりに奈良岡は再び溜池を訪れた。

例の東側の池畔へと雑木林の間を進むと、禊萩（みそはぎ）の群落が開けて驚いた。一茎の上部に、茎に沿って紅紫色の花びらを多数つけている。それが無数に立ち並んでいるのだ。釣り人たちによる乾き切った細い踏み径を進むと、まるで西洋式の人口庭園をぬって歩いているように思えた。茎の下方、細長い葉が対生で交互に直角の方向に出ているのも面白く、茎を折ってくるくると回したくなる。そして、風車より後生車（ごしょうぐるま）を思い出した。これは萩に似ていて、禊（みそぎ）に使う盆花だった。精霊花（しょうりょうばな）なのである。以前から近くの幾カ所かの溜池を訪れていて何度も見ている花であり、図鑑やネットでいろいろ調べていた。これほどの群落は初めてだった。タテハ類やセセリ類の蝶たちが舞い、殊に

姫赤立羽(ひめあかたては)が美麗に思われた。そんな池畔、広がる水面、向こう岸の林と、一人には勿体ないほど妖しく美しい風景に思えた。

「美紀江、おまえにこそ相応しいお花畑だ」

奈良岡は、お百度の代わりに、襖萩を摩尼車(まにぐるま)としていつまでもくるくると回したくなった。祈りのためではなく、後悔を、振り払うのではなく音に出して散らすためである。

水辺では塩辛蜻蛉(しおからとんぼ)がたくさん飛び交っている。尾を舐めると塩辛いと言われる。綺麗な水色に、複眼の青。メスは一般に麦藁蜻蛉(むぎわらとんぼ)と言われ、少年の頃の夏休みの川原を思い出した。遠く魚が跳ねている。

以前と同様、迂回路の雑木林を進んだ。夏だから、葉群がかさばり鬱蒼としていた。油蝉(あぶらぜみ)が鳴いていて、身近に眺められた。涼しさを感じた。

抜け切ると清々しい景色である。池畔だからか、暑さは感じられない。少し風も感じられる。水辺をなだらかに曲がるように進むと、今度は草連玉(くされだま)の群落である。前年に近くの溜池で知ったばかりの花であり、こんなにも群落になるのだと驚いた。名は「腐れ玉」と誤解されがちだが、漢字では「草連玉」である。直立の茎に、葉柄のない葉が段上に輪生し、円錐状に多数の花をつけている。花は光沢のある濃く鮮やかな黄色である。反射というより自ら光を放っているような、そんな眩しさに眼が痛むほどであった。それが何本も重なるかのように群れているのである。

先ほどの襖萩にせよ、この草連玉にせよ、これらが野の花であることが信じられなかった。どちらも類似の外来種が生態系を危うくしながら全国的にはびこりつつあると言われるが、この辺のものは自生種のようだ。未だ身近に野の花が健在であることに、深い喜びを覚えた。何でもっと早く気付かなかったのだろう。野の花の好きな美紀江に申し訳ない気がした。自分だけ触れて、寂しい思いが募った。

「そうだ。おまえも一緒だ」

塩辛蜻蛉が頻繁に飛び交い鬼蜻蜓(おにやんま)が時に往復する水辺を更に進むと、丈の低い水草が水中から這い出ている場所になる。実は糸蜻蛉(いととんぼ)を探しに来たのだ。改めて糸蜻蛉を意識したのは、ちょうど一年前、街中の広い公園の濠で青い糸蜻蛉を間近に見た時だった。その瑠璃色の美しさに感激したのだ。まずは美紀江に見せたかった。早速『トンボ図鑑』を買い大青糸蜻蛉(おおあおいととんぼ)であることを知り、他の糸蜻蛉も見たくなった。近くの溜池や奥の林道の小さな池を訪れては、瑠璃糸蜻蛉(るりいととんぼ)や蝦夷糸蜻蛉(えぞいととんぼ)の濃い水色の美しさに感嘆していたのである。そして、この溜池にも何かいはしまいかと期待を膨らませ訪れたのだ。

ここにも大青糸蜻蛉がいた。瑠璃色を輝かせている。何匹いるだろう。雌雄二匹で見事なハート型を成して交尾もしている。一緒に初めてハートの連結を目にしたのは、隣県にある美紀江の実家に近い大きな池沼公園であった。二人とも小柄で痩せていた。奈良岡は今になって改めて糸蜻蛉に共感を覚え、二人を糸蜻蛉になぞられていた。

黒糸蜻蛉(くろいととんぼ)もいた。腹部が黒っぽいだけに尾の濃い水色の斑紋が鮮やかだ。

浮草の上で、オスが尾の先でメスの後頭部をつかまえ真っ直ぐに繋がっている。離れた箇所で、オスがホバリングしながらメスをつかまえて、メスは腹の半分を水中に入れ産卵しようとしている。連結したままメスは少しずつ沈んでいく。

「ああ、美紀江、おまえは見てはいけない」

やがて、雌雄は連結したまま、すっと水面から飛んでいった。

奈良岡は心で繋がりながらも、北端の下北に四年も単身赴任していた。下北の高校では、美術部は数人で幽霊部に等しく、逆に生物クラブが活発だった。前任者の顧問は奈良岡の大学の後輩で、昆虫好きだった。彼は西北津軽や十和田周辺の高校の赴任歴が多く、赴任校付近の野山を逍遥していた。下北も希望の一つだった。そして、生徒たちをよく連れて野山を探索していた。それゆえ、奈良岡が赴任した初めの頃は、生徒たちから逆に教わっている有様だった。探索場所だけではない。昆虫の種類や、果ては花や木の名前まで生徒に教わっている始末だった。実は、「生物」と言っても、奈良岡の大学での専門は細胞・生理学の生化学に近い分野であって、フィールド・ワークを重んじた分類学や生態学、行動学とはかけ離れていた。女学校にいた時も、それまでと同様、生物クラブでは顕微鏡で人体や動植物の細胞や機能を種々の試薬を用いて比較することが主だった。それが、下北の赴任では野生の動植物に興味を深めることとなった。と言っても、種名と分類の知識を広めるだけで精一杯だった。

奈良岡が高校生だった時、生物クラブで一緒だった一人に加藤がいた。加藤は一人でよく野山に昆虫採集に出かけていて、クラブで最も目立っていたが、大学には進学せず、しかし運よく希望であった街にある交通公社の支店勤務となった。全国へ出かけられるだろう業務に、あちこちでの昆虫との出会いを期待してもいた。だが若くして病気で亡くなった。またクラブの一人に、採集したものを資料としてきちんと整理するなど極めて真面目な三浦がいた。三浦は中央の私立大学の文系の学部に進学したが、卒業後、戻って来て県職員になり、休日は県庁所在地あるいは勤務地近辺の野山を頻りに探索していた。彼も四十代半ばにして亡くなった。山中の旧鉱山跡で倒れていたのである。高校の同期たちが中心になって、彼の撮影した貴重な花や風景写真が遺稿集として刊行された。そのことを当時、奈良岡は何も知らなかった。

奈良岡が下北から県庁所在地にある高校に転任して間もない頃だった。三浦の死の幾年後のある日、勤務校に近いかかりつけの歯科医院にしばらくぶりに行った時、待合室の書架にその写真集があった。初めのうちは写真が中心のその本を、よくもこんな花を見つけたな、うまく撮れているなどと感心しながらページを捲っていた。次の予約日に訪れた時に再びその遺稿集を手にし、あとがきと経歴を見て驚いた。三浦だったのである。婿に行って苗字が変わっていたので、初めのうち気づかなかった。同じ県職員である刊行代表者の名前で気づいた。代表者は同期では誰しもが知っている目立つ存在だ

った。その時、全身が震えた。突然の死が口惜しかった。名を呼ばれて治療室に入り、宛がわれた席にじっとして三浦について知っている限りを追懐した。先生が「お待たせしました」と近寄って来て、言われて口を明けた途端、溜まっていた涙粒がぽろりと落ちた。

「どうされました？　どっか痛いんですか」

先生は驚いた。奈良岡は事情を話した。

「待合室の花の写真集を見て、高校の同期の方だと知って、つい……」

実は先生も同期なのだ。ここの歯科医にお世話になってしばらくは同期の方だとは知らなかった。先生が常にマスクをかけているからではない。素顔を見ても同期とは分からないだろう。クラスが一緒になったことはなく、高校当時の顔をおぼろげに覚えているに過ぎない。県庁所在地に住む人たちだけによる高校の同期会が年一回開催されているが、奈良岡は自らを新米同然な上に一時的な滞在と見なしていたため、一度も参加したことがなかった。やがて、県庁所在地に住む歯科医師会の副会長と道端でばったり出会い、彼から教わったのだ。副会長はクラスが同じことはなかったが、通学電車が一緒だった。先生も同期だった。だが、その後も奈良岡は一患者として訪れていた。

「ほんとに何といっていいか……。いつかゆっくりと。さあ～、治療を始めます」

先生の方は、奈良岡が同期であることに大分前に気づいていた。後で知ったのだが、患者の中に奈良岡の他に数人同期がいたのである。その後も親切な応対を受けながらも、残念ながら先生宅の玄関の方を訪れることは無かった。

その翌年のことである。美紀江は大学付属病院で亡くなった。その年に奈良岡は定年を迎えたのである。

溜池の紅葉がどんな状態になるのか気になり出かけた。いや、ずっと待ちかねていて、紅葉にこそ亡くなった美紀江と一緒に訪れたかった。

小高い林檎畑の尾根風な高みを走る農道から、いつものように杉林の中へ右折しゆっくり曲がり下る。ゆるいカーブの外側に、極めて目立つ白い花が凛と立っていた。秋明菊（しゅうめいぎく）の白花である。農家の庭によく植えられていて、時に街中の玄関付近でも見かけられる。古い時代に中国から入ってきた栽培種だが、野生化し人里近くの林縁などにも生えると言われる。郊外の林では初めて出会った。奈良岡はその花にどこか仏教的なものを覚えていた。花びらに見えるきりっとした萼片の固まりが、蓮の花を思わせるためであろう。

秋明菊の近くを蝶が飛び立った。が、蛾の碇紋蛾（いかりもんが）だった。日中に活動し、前翅に碇の形をした大きなオレンジ色の紋があり、ぱたぱたと実に蝶に思えてしまうのだ。まだ黄色い頭花を散房状につけた反魂草（はんごんそう）の方へ飛んで行った。

「反魂」の名前の由来は、葉が五つ前後に深く割け下向きになり、それが魂を呼び戻す人の手招きに例えられてのことである。逝った魂を反り返すよう

に招けることができるならば、と一瞬美紀江を思ったが、反魂草全体の容姿はどうも似つかわしくない、そう思わざるを得なかった。

池の周辺はまだ紅葉に早かった。堤では紋白蝶や紋黄蝶が飛び交っていた。堤の下方の棚田は黄金色の絨毯を成していた。

胸の高さまで生えた草の葉に、よく見る横這(よこばい)がいた。カメムシ科だがスマートな体型で、縁が黒く体全体がバナナ色をした綺麗な虫である。イネの害虫でもある。学名は「小さなセミ」の意味である。日本語では「横這」の字のごとく、警戒時に横にずれながら歩くと言われるが、奈良岡はまだそんな動作を目にしたことがない。いや、視力が弱いのだろう。近づいてはいつもすぐ葉裏に逃げられたり飛び逃げられたりだった。美紀江の面影を追うと、葉裏に隠れられるように……

池側の斜面に姫紫蘇(ひめじそ)が咲いている。雑草のような茎葉に、小さく淡い桃色の花が可愛い。葉に鋸歯が少なくしっかりしているが、もしかしたら区別が難しい類似の犬香需(いぬこうじゅ)かもしれない。そう思いながら、奈良岡は上着のポケットから観察用ルーペを取り出し、ルーペカバーを外した。茎葉に毛がどれほどあるか見ようとしたが、他に比較点が何であったか分からず、ショルダーバッグから携帯用図鑑『秋の花』も取り出す。花弁の上唇や下唇の相違を比較すべきと分かっても、ルーペで覗いても結局よく分からなかった。

そして、近くにあった谷空木(たにうつぎ)の遅咲きだろうか、その濃くした紅色にも驚いた。田植え花とも言われるだけに信じがたい。別種なのだろうか。遅咲きよりも、復活、いや再生という言葉が脳裏に浮かぶ。

斜面下方に、いつものように釣り人たちがいた。

例のごとく池の東側へと雑木林に入り出すと、樹木にこんもり重なった蔓草に、小っちゃなお供え餅が何個か重なったような果実が目に触れた。葉は三角形で、その上に丸い葉状があり、そこにひょこんと小っちゃなお供え餅。不思議さも然(さ)りながら、とても可愛く思えた。もっと身近に見ようと茎を引き寄せようとすると、棘が刺さり痛かった。茎に下向きの鋭い刺があるのだ。近くに向き様々に幾つものお供え餅があり、中には果実が緑白色と紅紫色、青藍色と重なって三色団子そっくりのものもあった。奈良岡は石見川(いしみかわ)という名を知らなかった。秋から冬にかけて、林縁でよく見かけられる果実である。

紅葉をと、数週間後に再び訪れた。池畔の美しい雑木林が池の水面に静かにそのままの色で映っている。堤から下流の眺めも、小さな丘の紅葉に林檎畑の赤い斑点も光っている。遠く、こちらを覗くかのように岩木山が迫っている。

「美紀江、きれいだね。紅葉を思うと特に、この世って不思議だ」

眼下の棚田は既に稲刈りが終わっている。稲藁の束が円錐状にあちこち立っていた。農家の人たちには喜びの跡かもしれない。種々のお祭りがあることだろう。もの作りでない奈良岡は、逆に寂しさが募ってきた。何を社会に残したのだろう。教師という職業も中途半端で何ももたらさず終わった思いに駆られた。

「ごめんね。おれは何にもできなかった」

生物部や美紀江のこともあり校長試験は考慮の余地はなくなっていて、奈良岡は教頭職で退職した。退職後は目的もなく気力の減退で無聊をかこっていた。

退職した翌年に同期会に初めて出てみる。会の責任者は岩崎で、元高校教師、しかも生物の同僚だった。が、赴任校が一緒になったことはない。生物の教師は一校に一人いればいい。岩崎の方は最後に母校の校長で退職している。旧帝国大の大学で、それこそ分子・細胞を専門にしていた。奈良岡はとうから敵うはずがない。嫉妬心はなく同輩である喜びを覚えながら敬意も懐いていた。同期会だから岩崎も自分のクラスのテーブルに席があるものの、時々責任者として前に出て司会者のマイクを借りて何ごとかを語る。常に参席者の笑いを誘う語りである。奈良岡は会場に入るや、目立つ岩崎に近寄ってまずは挨拶を交わし、それで彼に関してはことを終えていた。

奈良岡は学生時代、同期や後輩らと茶店で雑談をする際に、時に当時の最新科学として分子生物学を取り上げ自分の頭を整理するかのように熱心に語っていたが、話の途中で誰からか岩崎の名が出ると、口をつぐんでしまいがちだった。自ら誇ったように岩崎の名を出す時もそうだった。ただ、岩崎の名が会話の途中に出ても、相手が哲学教室に在籍していた同期生の八木橋の場合は、遠慮なく語り続けた。一九七〇年代前半のことである。哲学の学生が、遺伝子の二重らせん構造を発見したワトソンとクリックを始め、その前後の、分子生物学の生みの親とも言われる理論物理学からのデルブリュックや量子力学のシュレーディンガー、渡辺格（いたる）が中村桂子や生松敬三との共訳で次々と紹介したテイラー、モノー、ステントまで言い出すのに吃驚したものだった。当時の最新学説・生命観である。八木橋はそれらについて思想雑誌や哲学の授業で知り、興味津々に読んでいたのだ。八木橋は三、四年次の時に、理学部の二年次の必修科目である数学の幾科目を始め、物理学と生物学の概論程度の講義を受講していた。彼は哲学のクラスの仲間とラッセルや誰とかを原書で読み、分析哲学や科学哲学に夢中であった。彼は高校の倫理社会の教諭になり、県南の高校を転々とし、奈良岡と赴任校を同じくすることはなかった。

岩崎を気にすることなく、奈良岡はクラスのテーブルでの話に精一杯だった。だが、時に前に出た岩崎の声を聞くと、ふっと八木橋を思い出すのだった。座席表を取り出してみた。彼は確か八組だったはずだと、座席表を適度に眼に近づければいいものを、眼鏡をはずして顔をしかめテーブルに置いた座席表に裸眼を近づけるのだった。八組で先に岩崎の名前を見つけてしまい苦笑したが、八木橋の名もあった。八木橋は最初から文系の学部を狙っているのに理系のクラスにいた。岩崎と同じ大学希望であったが、「サクラチル」で滑り止めの街の大学に甘んじた組だった。奈良岡も同様なのだが、奈良岡は受験浪人という寄道を経た上での話だった。八木橋の席へ行こうと思いき

や、偶然にも八木橋の方からやって来たのである。何十年ぶりだろう。会話が弾んだのは言うまでもない。八木橋の読書ぶりは相変わらずであり、彼から少し勉学意欲をそそられた。

読書の秋に入り浸りだった奈良岡は、ふっと冬めく池林が恋しくなった。何も期待せずに溜池を訪れた。池は人影どころか、生きものの気配も水輪もなく、晩秋が身に沁みる。雨が零れ、水面を打つ。水輪があちこち起こり、雨が強くなって水輪が次々と重なっては消える。やがて雨は霙に変わり、そして、あっという間に雪となった。晩秋なのか初冬なのか判断に迷った。初雪後に降った雪が林床に薄っすらと残っており、もう師走に入っていたのだ。この池もやがて雪に埋もれるのだろう。ここに至る林檎畑の高みの農道も深い雪に埋もれるのだろう。末枯れる景色に侘しくなり、美紀江を思い出すのだった。

奈良岡は美紀江との初めての出会いの場面を思い出し、次々と思い出が走馬燈のように過っては、しばらく若い頃のような安らかな死に顔を偲んでいた。美紀江が亡くなってからずっと後悔の念に駆られていた。なぜもっと仕事よりも休日はたっぷりと二人で何処かに出かけるなり、のんびり会話を楽しむなりしなかったかと。役職などどうでもいい。もっと大事なことを犠牲にしてきた悔恨が胸を締めつけるばかりだった。一緒に生きていることをもっと噛みしめ謳歌すべきだった。いずれ死を迎えるのである。この世に受けた生の喜びを分かち合った方がどれほど幸せなことだろう。年中仕事ばかりに囚われて、美紀江のことをあまり考えていなかった。美紀江といる時が一番幸せなのは、最初からずっと変わりなかった。特に子供たちが居合わせた時にはなお一層そうである。ただずっとそれを確信はしてきた。しかし、美紀江はどう思っていたのだろう。

「美紀江、来年はもっとここに来よう」

奈良岡はこれまで詩集を四冊上梓していた。彼は赴任校でよく卒業文集の編集に関わり、自らも詩を寄稿し、時に巻頭を飾っていたという。クラスの文集などでは、時に短歌や俳句も書いていたという。どの結社にも属さず、一人しばしば書いていたのである。第一、第二詩集は多少シュールな技法を用い日常を、第三詩集は幻想的に追憶を、第四詩集は旅情に溢れた流離いを詩い、いずれも言葉を濾過した密度の高い作品群である。だが、街の詩人仲間には知られていなかった。そして、五冊目を「イトトンボの詩」にするつもりだった。

そう、私は奈良岡について語っているのだ。いや、語らされているのだ。彼から聞いたことと詩集の内容、そして彼の同僚であった私の友人や同期、知人である元教師らから耳にしたことに基づいている。

私は彼と高校、大学が同じである。高校時代に同級になったことはないが一度会話したことがある。大学では理学部と人文学部と離れており交流はほ

とんどなかった。やがて、彼が一時大学の文芸部の部長をしていたことを仄聞する。その頃、哲学教室に所属していた私は、生命哲学や進化論、生態学、環境論、そして何よりも流行り出した分子生物学に興味津々だった。文学を媒介に彼に接近したくなり、キャンバスで出会った時に眦を決し近くの茶店に誘ったのである。そして、私の方はワトソンやクリック、モノーやステントを始め主に分子生物学について訊きたかった。彼の方は文学について語ろうとしていて、会話はちょっとちぐはぐな状態であったのを記憶している。そう、私の名は八木橋である。

奈良岡が詩集を上梓しているのを岩崎から聞いた時には、実に寝耳に水だった。ペンネームだから気づかなかったのだ。彼は美紀江が逝去して四年も経ぬうちに家を捨て、消息を絶った。一人晩年を流離うために、あるいはどこかの山中に隠遁するためにとか、ある女性と出奔したとかの噂である。彼ともっと話をしたかった。彼と一緒に飲んで笑いたかった。

せめて、彼のことをもう少し続けてみたい。溜池に関わる描写は、彼の遺稿詩集、いや失礼な表現だった、残されたノートやファイルの中にある幾編もの詩編と幾つかの付記を主に参照している。

先に進む前に、彼の手記をひとつ紹介しておきたい。具体的な描写から離れた、彼の人生観の片鱗が伺えるかもしれない。

「妻の死によって、愛の大切さを知った。今、糸蜻蛉がその感慨を助長している。妻への愛が不十分であった後悔と、それ以上に妻の生の儚さを思い、精神的な流離いの旅に出たい。それが今、まず身近な野山の逍遥となって現れている。

愛、強いては生、今日ではもう矮小なことに過ぎなくなった生。単に死と対峙するしかない生。今や少しは過酷な肉体の酷使からは解放されたものの、生を忘却の深淵に追いやったのは、時間の搾取によって自由を奪う労働以上に、自由な時間を奪っているのは商品の氾濫だろうか。そんな商品の傀儡となりながら、人のいない影ばかりの多様なメディアによる雑多な流言、押しつぶされそうなとてつもなく横流する情報。商品に関しては最低必需品に甘んじており機能的にしか考えていないが、情報に関しては虚偽でないかぎり、小さな情報でも私には大切な知識に思えてならなかった。だが、それさえ捨てるべきなのだ。ヒトを含め自然だけが存在なのだ。存在こそが重要なのだ。存在そのものに自由があるような気がする。もともと「自由」とは仏教用語であり、そこに本来の「自由」があるのかもしれない。その自由を妻だけに。

妻のことをどれだけ知っていただろうか。妻という女性を。ひとりの生きた存在を。確かに、同僚たちのこともよく知らなかった。これまでどれほど多くの同僚と職場を同じくしただろう。だが、いま取り立てて交流している人はいない。クラスや部活で受け持った生徒たちにしても然り。自分の子供

たちでさえ、電話で時に会話するものの、それはかつての日常のイメージのまま変わりない。子供らをもどれほど知っていると言えるのか。何十年も連れ添った妻でさえ、何を知っていたというのだろう。ふっと、これから人との交流もより少なくなるだけに一期一会を重んじるべきだとしみじみと感じている。だが、もう遅い……

命って何だろう。命こそ存在なのかもしれない。糸蜻蛉のような小さな生き物の中でも頑張っている命。胞子を出す苔のような小さなものにもある命。細胞はどうなのだろうか。その中に命はないのだろうか。命って、もっと小さなものに感じられてきた。人の体には数えきれないほどの極微な生きものたちが棲んでいる。私もたくさんの命を抱えている。人の命も本当はとっても小さいように思えてきた。ちょっとした命で生きるのが可能に違いない。ああ、逝った人たちにも、ちょっと命を吹きかければ……　もしかしたら、自分の中に幾つか命があるのかもしれない。その一つ二つを美紀江に……」

それでは先に進もう。もはや私が語っているのではない。彼が語っているのだ。

春を待ちきれず、二月初旬に林檎畑の高みの農道へ行ってみた。真冬である。意外にも車が通れる状態である。ただ、雪道であり車の底を雪にこすりつけながら、轍の通り進まないといけない。しかも、対向車と出会えば、入り口までずっとバックするしか仕様がない。恐る恐る進むと、農道は途中までしか進めず、むしろ安堵した。路上に車を捨てても問題がない。そこから雪の原同様の道を池へと歩いた。雪はそんなに深くないのに、重い雪だけに一足ごとに長靴を引き上げるのに力が必要であり、筋肉不足もあってすぐ足腰が疲れた。

そんな中、蔓梅擬（つるうめもどき）の実が目の保養になる。白銀の世界に、三裂して開いた黄色い実殻が鮮やかだ。そこに垂れて付いているはずの橙赤色の種子は鳥に皆食べられている。

普通の徒歩より二、三倍の時間を要してどうにか池畔に辿り着く。もう左足の踵の上が靴擦れしていて痛い。案の定、池はまだ雪に覆われている。多くの生きものたちは眠っており、魚たちでさえ半分じっとしているように思えた。木々も真っ白な世界に、清楚な死者の霊界を覚えた。踏み入るべき世界ではないように思われた。が、池の上の雪の原に獣の足跡が真っ直ぐ林の方に続いており、春への憧れがぶり返してきた。林の影が池の雪の原で青味がかっては、その周辺で陽光を浴びて雪欠片がキラキラしていた。

三月初旬に再訪した。池から流れ出るコンクリート造りの小さな堰のような場所では、幾カ所からか水鉄砲のように流れ出ている。その辺は少し雪融けしており、その周囲は薄い氷が張って輝いている。氷には、定まらぬ方向に何本かの筋が幾何学的なデザインを施していた。近くの林に馴染みの頬白（ほおじろ）

いた。冬の頬白を間近に見るのは初めてだった。しばらく見つめ合える小鳥である。

もう春だ。待ち兼ねたように溜池を訪れた。四月初旬である。林檎畑の高みの農道を走っていると、左右あちこちに煙が上がっているのが見える。剪定された林檎の枝を集めて燃やしているのだ。津軽野の初春の風物であろう。陽気に誘われて、溜池へ下る右折を無視して真っ直ぐ進んでみる。右側の高みは処々樹木がなく高原風で牧歌的雰囲気を醸し出す。わがもの顔に飛んでいる鵐や鳶、林や叢に小鳥たちが賑やかである。

警戒心の強い猶子鳥だ。「集まる鳥（あつとり）」が名の由来らしい。冬鳥でもまだいた。普通に見られるとはいうものの、なかなか市井の雑輩には出会えない。丈夫そうな嘴に、胸や肩の羽の赤茶色が美しいと思った。鮮やかなオレンジ色が、花が咲いたように見えることから「花鶏」の別名も持つ。

煙立つ春の果樹園花鶏群れ

途中、威勢よく水が噴き出た水溜がある。コンクリートでできた畑用である。小さな丘なのに何でこうも水の威勢がいいのだろうと不思議に思ったが、丘の上部に二メートルほどの高さの水溜があった。どちらが縦か分からないが、四メートルに三メートル四方ほどの立方体が半分埋まっている。そこに雨水を溜め、そして冬期間の積雪が溶けて地中の水管を通って下の水溜に流れ出ているのだ。そう思った時、農家の知恵に感嘆し、同時に今まで何で知らなかったのかと恥じた。周辺に笹薮や木立があり、四十雀や青鵐がいた。どちらも双眼鏡で見ると色鮮やかで綺麗な小鳥である。そして驚いた。紅猿子だ。猿子とは猿のことで、名の由来は猿のように顔が赤いためと言われる。紅猿子はアトリ科であり、冬鳥である。羽を除いて全身が濃いピンク色で、実に美しく思えた。

小高きに春の林檎か紅猿子

溜池の方に戻った。もう釣り人がいて驚いた。しかも七人もいた。双眼鏡で覗くと、池の水口の方に、何か水鳥がいる。堤を通り池の西側に行く。西側は杉林で、岸辺は雑木が多い。軽鴨の小群れに小鴨が少々混じっていた。そして、冬鳥の金黒羽白もいた。体は頭や胸、羽が黒く、腹が白い。そして、双眼鏡に目は金色に輝く。

翌日も好天となり紅猿子などをまた見たく出かけた。前日に見た箇所にはいなかった。農道を更に進んでみた。道路はやがて畑の中に消える。車を降りて気づいたが、木立に何か小鳥がいる。しばらくじっとしていると、近くの地面に下りてきた。懸命に餌を探しているようだ。尉鶲である。少しずつ近づいても逃げない。やがて低木の茂みに隠れたが、またじっとしている

と、近くの枝に飛んで来た。間近に、しかも双眼鏡で詳細に見られた。冬鳥として少数渡来するから、幸運と思った。咽や背、翼は黒いが、その翼の白紋が目立ち、気持ちよく感じた。そして、胸や腹は明るい赤茶色で、それこそ「火焚(ひた)き」である。

気をよくして溜池の方に戻った。金黒羽白はいなかったが、今度は軽鴨と小鴨に混じって馴染みの冬鳥の真鴨(まがも)がいた。そしてもう夏鳥の鴛鴦(おしどり)もいた。オスの見事な容姿である。いつも玩具を思ってしまう。街の公園の濠にもいるが、本当に美しい。美紀江を思った。

「公園で初めて鴛鴦を見た時、こんな格好してみたいもんだ、とあなたは言いましたね」

五月初旬である。弘前公園の桜が終わりを告げる頃、丘はずっと林檎の花の帯である。津軽はまだ春だ。むしろ、春たけなわと言っていい。

溜池では、距離を置き太公望三人が糸をたらしていた。その下で、今度も二人の早乙女が手植えをしていた。残雪を載せた岩木山が迫る。この時期のお山が最も美しいことは異口同音に云われる。

溜池に釣り人閑(しず)かその下に
早乙女二人お山ほがらに

「もう一度見たかった。連れて来てくれたんですね」

田んぼの小川に下りると、泥鰌(どじょう)や塩辛蜻蛉がたくさんいた。そして足元に亜細亜糸蜻蛉(あじあいとんぼ)だ。見事な橙色をしたメスの未成熟、いや若いメスだろう。尾の端が淡い青色をしたオスが近くにいる。

橙を若やかに出しアジアイト

春だけでこの年に四度もこの溜池を訪れ、夏はもっと頻繁に訪れた。特に糸蜻蛉の季節なのだ。糸蜻蛉を主題にした詩集を書いてみたい。勿論、美紀江へ捧ぐためである。

溜池に着く手前に金銀木(きんぎんぼく)があった。走りながら車窓で気づいた。何度も通りながらここにもあったのだと初めて気づいた。

一本の木に金色と銀色の両方の花がたくさん咲いている。めでたい気分にさせる見事な木である。花の形も、花弁(はなびら)が元気に跳ねているようで面白い。果実は二個並んでつき、基部が合着して瓢箪の形になるから瓢箪木(ひょうたんぼく)とも言われている。幸先がいいと思った。

池の堤を渡って西側の池畔へ行く。そこからしばらく池にほぼ沿って通行禁止の林道が続いており、左は杉林で右は高みの雑木林で薄暗い。少し進むと、脇道の奥に熊を捕獲するために仕掛けられた檻がある。少し開けてくると、塩屋蜻蛉(しおやとんぼ)だ。日本特産種である。塩辛蜻蛉に似ていて、ちょっとずんぐ

りで尾に白い粉が吹いている。メスもいた。塩辛蜻蛉の方は尾が先端から三分の一も黒いから区別がつきやすい。よく見ると、翅の基部にオレンジ色、時に翅の先にもオレンジ色が輝く。傍らの空木（うつぎ）の花が美しい。大き目な白い花びらに黄色い雄しべ、そんな花が密に咲き、鑑賞花と思うほど幸せにしてくれる。

「今日は特に、おめでたく感じちゃう」

林道から適当に杉林の中に入り池畔に出る。水口に近い辺りは湿地帯である。ここもまずは襞萩と草連玉が咲き誇っていた。もう茜（あかね）の仲間や熨斗目蜻蛉（のしめとんぼ）がたくさん飛び交っている。りす茜（りすあかね）もいた。腹部だけが赤い。胸の横の黒い条二本が平行である。黄立羽（きたては）も美麗に感じる。

蜻蛉来て胸のバッジや鯉ばしゃり

そして、丈の低い葦に囲まれて小さな沼があった。鮮やかな瑠璃糸蜻蛉である。ここにもいた。前身の深い水色の輝き。頭の後に同じ水色の大きな水玉模様も鮮やかだ。この糸蜻蛉にも頗る幸せを覚える。

一月も経ぬうちまた溜池を訪れる。今度はいつもの東側の池畔である。まだ草連玉が咲き誇っている。それにしても、襞萩は花期が長い。トンボの中に眉立茜（まゆたてあかね）がいた。顔に眉班がある馴染みの茜である。翅が無班の型のメスと思われるが、かすかに班も感じられる。傍にいるのは、顔を撮れなかったが、尾の先が反り返りオスのような気がした。お花畑だけに馴染みの蝶も色々といる。茶羽拝（ちゃばねせせり）や黄斑拝（きまだらせせり）の仲間もいた。そして、蜂に擬態し日中活動する大きな蛾がいた。種名は忘れた。

数週間前、岩木山の麓の高原にある沼で、地元では著名な昆虫、特に鱗翅類の研究家で知られる津軽昆虫同好会の方に出会った。この蛾のフィールド調査中であり、その時この蛾の名を教わった。最新技術による世界的な調査で、日本では調査員が三人しかおらず、その一人であるという。高校の生物部の七年後輩だが、地方公務員であり交流は少ししかなかった。同時に教わった、『青い山脈』の作家石坂洋次郎のお孫さんの、ハーバード大学の先生でありシジミ蝶の世界的権威であるナオミ・ピアーズのお名前は忘れないでいたが、この蛾の名はすっかり忘れていた。

水辺では塩辛蜻蛉が占有し、すっと鬼蜻蜓（おにやんま）が往復しては、離れて銀蜻蜓（ぎんやんま）が通る。

迂回の林を抜けて水辺に近寄り、そのまま池畔に沿って進む。例の草連玉の群れだ。水辺の小さな草や浮草に大糸蜻蛉（おおいとんぼ）や黒糸蜻蛉、亜細亜糸蜻蛉など数種類の糸蜻蛉が賑やかだ。

「何か、天上にいるみたいね」

瑠璃糸蜻蛉が交尾をしている。水辺でハートの形を成してじっと交尾をしている。小さな愛。広大な宇宙の小さな小さな場所で、小さな小さな命。不思議に思えた。こんな小さな命が、大宇宙の中で懸命に生きている。小さな

愛が宇宙で輝いている。

その入り江風な端はカヤツリグサ科の寒枯藺（かんがれい）が立ち並び、人の背丈を越えもう林のようだ。茎は鋭い三つの稜形であり、その先に花序がある。そこから苞葉が伸びて、あたかも花序が茎の途中についているかのように見える。その近くの背丈の低い草群に青糸蜻蛉（あおいとトンボ）や物差蜻蛉（ものさしトンボ）がいる。

入り江風な端から先へ初めて進んでみる。襞萩と野花菖蒲（のはなしょうぶ）が咲いていて、水辺には、数は少ないが、腰空蜻蛉（こしあきトンボ）が縄張りを争うかのように飛び交っていた。全身は黒っぽく、腹の先半分が白いので、確かにそこが空いているように見える。水際に何度も接近して産卵しているメスがいた。オスが見守るかのように水辺に沿って往復をくり返しては、メスの近くで時々ホバリングする。メスが最も水際に接近した途端、大きな魚が顔を出しメスを呑み込んだ。

「あっ！」

オスはそれでもしばらく往復していたが、やがて飛び去って行った。

更に水辺を奥へと進むと、時折り清楚で小さな擬宝珠（ぎぼし）に出会う。近くで、半ば体を水辺に上げて大きな鮒が死んでいた。

もう岸辺も林となり、水口が近くなると径らしきも消える。そこに羽黒蜻蛉（はぐろとんぼ）が、何ごともなかったかのようにじっとしていた。いや、黒も美しいことを誇るかのように、そして尾の濃い緑色の金属光沢を誇るかのようにじっとしている。やがて、蝶のようにひらひら水口の方へ飛んでいった。

「ああ、あの呑まれたトンボの化身かしら」

数週間後、今度は朝早めに溜池に向かう。農道から溜池へ下る林の中で、赤小灰蝶（あかしじみ）と出会った。蜆蝶（しじみ）の中では大きな蝶であり、名のごとく色彩と紋様も悪くない。かつては津軽にいなかった赤小灰蝶。数年前にひとつ山を越えた山間の方で突然群生し、先の津軽昆虫同好会の方が紙面で紹介し話題になったが、この辺でも見られるようになった。近くの樹でニイニイゼミが鳴いている。近づいても逃げない。ニイニイゼミの漢字表記は「蟪蛄（けいこ）」だが、蟪蛄はむしろ蜩（ひぐらし）を指すらしい。『荘子』逍遙遊篇に「蟪蛄春秋を知らず」があり、蟪蛄は夏だけの命の夏蝉であり春と秋を知らない、という意味である。結局は、夏というのも知らないという無知の知のような自覚に繋がっていくようである。多くの命に、人間という自分も蟪蛄だと思った。

池畔の近くの茂みで、糊空木（のりうつぎ）の葉にいた鮮やかな山吹色の小黄斑挵（こきまだらせせり）を撮っていたら、姫黄斑挵（ひめきまだらせせり）が飛んで来て驚いた。そして、赤花天牛（あかはなかみきり）も飛んできたのである。全身、見事な紅色である。そして、エダシャク（枝尺）の仲間の蛾がたくさん、蝶のようにパタパタしながら吸蜜している。

車を溜池際に移動し、左手にレンズバッグとカメラを持って車を降り、バッグを肩にかけようとしてカメラを落してしまった。装着していた五十ミリマクロレンズからガチンと落ち、先がへこんでしまった。オートフォーカスが効かなくなってしまったのだ。落胆し、レンズを手動で何度も回してみる。被写体からどうにか五十センチから二十センチぐらいの間の距離でレンズ

がオートで動くようになり、少しは安堵した。どうにか使えるだろう。堤の方では、夏真っ盛りに花が咲いている。いま野で最も目立つ綺麗な犬胡麻(いぬごま)も咲いている。野の花とは思えないほど綺麗である。

溜池にイヌゴマ映えてカケス群れ

他にピンク色の花が可愛い車花(くるまばな)が目立つ。花が輪状に付き、それが数段になっている。一見雑な感じもするが、花がより密で段も明瞭な容姿のものは実に素敵である。そして、山薄荷(やまはっか)、藪萱草(やぶかんぞう)もあった。そんな花たちの周りを、蝶たちが飛び交っている。

池畔に至るまで大分時間を使い果たし、大事な用を足す時間が迫っていたので、あとは真っ直ぐ入り江風な端の方へと、雑木林の中を通り近道とした。

水辺に糸蜻蛉は少なくなった。全身真赤な猩々蜻蛉(しょうじょうとんぼ)がいた。眼や翅の付け根まで赤いのである。見事なものだ。その未成熟もいた。全体的に淡い黄色で、翅の黄色い紋も印象的だった。

「ねえ、もう私のお墓に会いに来るのでしょう」

八月中旬、前回訪問時の続きとして、溜池の西側を主に訪れた。林道の中央を草群が一本の太線のように走っているが、そんな線に白い目立つ花があった。靭草(うつぼぐさ)に似ている。靭草は夏枯草(かごそう)とも呼ばれているように既に花期は終わっているはずである。これは西洋靭草(せいようのうつぼぐさ)という外来種だろうか。

野の花か園芸種かは知らねども
沼の畔に真白にぞ咲き

林道から杉林に入って池畔に出る。そして湿地の沼に期待した。

池畔の木の葉に緑小灰蝶(みどりしじみ)がいた。樹頂でテリトリーを張っているオスである。黒く縁取られた表翅全体が金属的な光沢を持つ鮮やかな金緑色だ。しかし、種を同定するには難しかった。緑小灰蝶にいつも神秘を感じていた。

「いつだったか。初めて緑小灰蝶を見た時のことを思い出します。渓流の暗い林の中で、一方が深い緑色を他方が肌色を時々輝かせ二匹が舞い合っているのを見て、この世のものとは思えませんでしたね」

沼に狸藻(たぬきも)が咲いていた。驚いた。浅いのだろう沼に目立たないが、小さくも鮮やかな黄色い花をつけている。狸藻は広義のタヌキモ類のことで、種として野狸藻(のたぬきも)、犬狸藻(いぬたぬきも)、そして、一か月前に街の新聞で話題になった総狸藻(ふさたぬきも)などがある。犬狸藻を除いていずれも絶滅危惧種であるが、総狸藻は県内では既に絶滅したとされていた。それが某溜池で約五十年ぶりに発見されたのだ。某溜池とは西北津軽の方らしい。その翌年には、つがる市の沼で大学の先生や津軽植物の会によってヒルムシロ類のガシャモクというのが発見されている。漢字表記は不明で、幻の水草といわれる。そういうこともあって、

狸藻に歓喜した。自分、いや自分たちが愛している溜池にも何かいないかと訪れたのである。例え、他の狸藻であったとしても喜びは計り知れないものであった。

「ああ、ふたりの沼にも、狸藻がいてくれましたね」

林道に戻ってもまだ気分が高揚しており、林道の先を少し進んでみた。蝶があちこち飛んでいる。姫蛇目や一文字挵、そして久々に山黄斑日陰蝶に出会えた。やがて林道に沢が沿うようになり、ここにも赤立羽がいた。

アカタテハ猛暑に沢の葉に清まし

引き返し始めてまもなく、樹上から道端の草に何か落ちてきた。木の実か何かだと思ったら、挵蝶の仲間である。高山性の黄羽挵だ。

もう晩夏である。集中豪雨もあって長く悪天候が続いた後、ため池の西側にある林道を進み、水口の上へと左に折れる廃道のような狭い道を進む。もしやと思い付近の雑木林を探索する。ラン科の深山鶉が咲いていた。他に、いずれもツツジ科とは思えない腐生植物の銀竜草と錫杖草が季節を告げるように立っていた。正に幽霊茸なのだが、霊魂そのものに思えてならなかった。

元の林道に戻り、杉と檜の病害虫防除のパイロット林の中、この車両通行止めの林道を最後まで歩いてみる。時々見かける畔筵とも言う溝隠に似た花が咲いていた。花は踊ったまま飛んでいきそうな面白い形であり、キキョウ科だろうだけに美しい。道がカーブして明るい路肩によく草牡丹が小群れていた。淡い紫色の花を円錐状に多数つけている。花は鐘状になり、先端は四つに裂けて反り返る。見事なカールだ。付近の草葉や低木の葉に種々の昆虫がいる。

道の終端は明けた林檎畑だった。林檎の木はいずれも小さい。開墾してそんなに年数が経っていないのだろう。その畑の上の明るい雑木林を探った。種々の箒茸が目立つ。そのうち、ピンク色の濃い珊瑚のような箒茸に目が行った。これが花箒茸と言うのかもしれない。他にも茸らしい茸が種々あったが、茸に無知だった。

のんびり歩いて池に戻った時、折しも雨が零れてきた。堤を通っていると、

シオカラが黄蝶つかみて飛び逃げる
池を雨打ち水輪の狂騒

「雨って、台風でなければ、いつでも好き。イトトンボたち、どうしてるのかしら」

秋立つ頃のことである。

池はいつも釣人だけがいるのに、カメラを持った青年がいた。街の大学の理工学部一年生で、日本野鳥の会弘前支部に入ったばかりだと照れ臭そうに言った。望遠ズームレンズをつけており、最近撮った写真の小さなアルバムを見せてくれた。鶫（のすり）や頬白（ほおじろ）などの他、他所での青鷺（あおさぎ）や大鷺（だいさぎ）、燕、猿など上手く撮れていて感心する。野鳥撮影だから朝早くから来ており、もう帰る頃だと言う。学部の名称は変わったものの後輩に当たり、頼もしく思った。

この日、池の西側を主眼にしていた。林道に入ると、引起（ひきおこし）や山薄荷（やまはっか）が目立つ。普段、人は雑草扱いするだろうが、狐の顔をも連想させる青紫色の花一個はやはり花だ。縮み笹（ちぢみざさ）はもっと多い。花が咲いても雑草だろう。それどころか、ズボンに粘り付く嫌なひっつき虫の一種である。でも、マクロレンズで覗くと、小穂から極めて長い三本の毛がピーンと生えており、垂れさがった紫色の葯と織りなすモダンなデザインは、イネ科とは思えないほど素晴らしい。いかにも道端の野の花らしい有り触れた野紺菊（のこんぎく）や白嫁菜（しろよめな）も、風情があり愛おしく思った。そして、蔓人参（つるにんじん）に気づく。久々に出会った。

湿地の沼に、箆沢潟（へらおもだか）が咲いている。かつては稲作で嫌われる雑草だったが、いま余り見られなくなった。萼片と淡い桃色の花弁が三枚で、雄しべが六本と三の倍数であり、逆に雌しべが多数ある。

湿地は私の背丈ほどの油茅（あぶらがや）が占有している。小花序と果実である小穂に、巨大な稲を思い圧倒される。

油茅小穂目線夏放る

湿地の端に行くと、薄翅黄蜻蛉（うすばきとんぼ）がいた。お盆に成虫が多数発生するため、精霊蜻蛉（しょうりょう）とも言われる。背中の模様と、大きな四枚の翅の端についた、黄色い斑紋、そして、頭の後ろが大きく開いていることが、この蜻蛉の特徴である。沖縄か更に南の熱帯地方から飛んで来たのかもしれない。

多くの蜻蛉は、ヤゴから羽化するまでに一～三年ほどもかかるが、薄羽黄蜻蛉は、ヤゴから四週間程度で羽化するので、何代かの世代を交代しながら飛んで来ると言われる。図鑑『トンボのすべて』にはこう書かれている。

「熱帯地方から太平洋を渡って飛来し、日本の各地で世代を繰り返しますが、冬には全滅します」

湿地から、水口の沢を遡って林道の脇道へ出る。辛うじて林の径に射す日を受けて、アカネ類の蜻蛉に混じって緑豹紋（みどりひょうもん）の雌雄が飛び交い、一文字蝶（いちもんじちょう）がじっとする。その脇道の終点から更に雑木林の中の踏み跡を進んでみる。曙繻子蘭（あけぼのしゅすらん）だ。夜明けの空の色を写し出すには難しい花だ。

「ああ、ここにもいたのね。県境の山で、ふたりで初めてこの花に出会いましたね。しかも、たくさん。あの時の感動を思い出します」

小さな命たちが集まるこの溜池に惹かれたのは、美紀江、おまえによる。可愛い小さな花々、小さくも綺麗な昆虫たち、そして蝶や小鳥に、殊に糸蜻蛉に出会う度におまえを思い出す。

しばし雨の零れる曇天だが、秋たけなわと思うと居ても立ってもいられなかった。溜池に呼ばれているような気がした。

途中の小高い林檎畑の農道でいつもの景色を楽しむ。林檎が実っていて畑の人々も景色も賑やかだ。どちらを向いても山々は紅葉が美しい。

池の堤から見下ろす棚田は黄金色の原だ。岩木山はもう冬の準備に入ったごとく雲に隠れている。

目的のもう一つはこの時期に湿地に一杯生えている草の撮影である。やや赤みを帯びた実をつけているが、その実や葉、茎を何枚も写し、茎に触ってみて葉をこすってみて珍しくメモをしておく。帰宅してから図鑑やネットで調べるつもりである。この時、おまえの記憶をも記録しておかなくてはと思った。

湿地の林側の際で、草の葉に越年蜻蛉（おつねんとんぼ）がぶら下がっていた。蜻蛉の多くはヤゴとして越冬するが、この蜻蛉は成虫のまま越冬する。翅の先端付近にある縁紋が、前翅と後翅で重ならず前後にずれて並ぶことが特徴である。越冬する蜻蛉のうち、この辺で見られるのはこれぐらいだろうか。

「ああ、愛しいイトトンボ。みんな隠れちゃったけど、私のようにならないでね。頑張ってね」

細葉垂れ越年蜻蛉しがみつき

春の夢見つ何処（いずこ）に潜む

即興　林の溜池 ― 秋

もみじ近づき　林檎はたわわ
ときおりの鈴ふりは　だれのよろこび
黄金の稲原が刈られつつ
ときおりの穂波は　だれのよろこび
棒掛けの金箔のならびは
みんなの踊る袴

風の波紋が深く押しよせる
もうオニヤンマはいない
よわよわしくアカネがまばら
止水のたまりに
アカネの四枚の翅だけがそのままに浮く
水の空を飛んでいるかのように

イトトンボたちよ
小さな霊たちよ
繁華街通りのハロウィンに来ておくれ
巨大なかぼちゃや林檎パイと一緒に
巨体となって踊っておくれ

遅い秋晴れでもあり、一年も終わりに近づいたかと思うと、また気がそそるのだった。

溜池は一週間前の台風の強雨でまだ水かさが増しており、池畔の東側のいつもの径は埋没している。堤を渡って西岸へ行くも湿地そのものも埋まっている。仕方なく林道を進み左への脇道を進む。実を残した曙草（あけぼのそう）が幾株かあった。ここにもあったのだ。来年は咲いてくれるだろうか。そして、大姥百合（おおうばゆり）も立っていた。立ち枯れたまま開いた実殻を残していて、その中で翼を付けた種子が重なって風に飛ぶ順番を待っている。花が咲いた株はこれで一生を終えるのだ。

即興　オオウバユリの実

立ち枯れて路傍に一本
環境の変化にとても弱い
一度だけ花を咲かせて生涯を閉じる
枯れても雪が重なってもひたすら立つ

雨の日は閉じるが　縦に三つに割れた実
それぞれの部屋に種子がまだだいぶ残る
羽根がついた平らな種子がぎっしり

何気なくふっと強く吹き飛ばす
サラサラ、黄金色にキラキラと跳んだ
後悔した
風に及ばないことを

誰かが私にふっと息を吹きかけ
いのちが飛び去りはしないか
ひたすら　天命に待ちたい

「あなたには私が最初に息をふっと吹きかけます。私の死水を取ってくれたように」

晩秋、それとも初冬。既に池の堤にも雪が斑（まだら）に残っている。堤の端の出水口からの小川で、牡丹蔓（ぼたんづる）の綿毛が半透明にキラキラしている。木の株に、毛糸の手袋を思わせる猿の腰掛（さるこしかけ）の仲間が侘しい。

堤の径で日不見（ひみず）が死んでいる。土竜（もぐら）によく似ているが、長い尾をもつ日本固有種である。低山帯の森林や草原の落ち葉の下で生息している。

半地中生活をしていて、夜になると地上を徘徊することもあるが、日光が照る所には出てこないと言われる。「日見ず」という和名もここに由来している。

ヒミズ（日見ず）

もぐらのように深くは掘れない
その前足を上げ　地面にさようならと
そして　そのままその前足で
空に踏んばって　よじ登ろうと
雲の向こうのお日さまをめざして

おまえ　小さないのちよ
おまえは　その小さないのちのために
ふんばったのだ

もう　わたしのこころへおいで
わたしも　小さなこころだが

「わたしのところにも、おいで」
「おれも、一緒にいきたい」
「一緒に、もっと翔んで行きましょう」

初出一覧

春の蝶と花鳥　『無名群』98号　二〇二〇年　八月
書物のほこり　『無名群』95号　二〇一七年　六月
部屋と大通り　『無名群』97号　二〇一九年　九月
イタチごっこ　『無名群』99号　二〇二一年　八月
熊と花　『無名群』100号　二〇二二年十二月
古銭を振り　『無名群』94号　二〇一六年　一月
ふたりトンボ　『無名群』96号　二〇一八年　八月

文芸誌「無名群」百号　二〇二二年十二月発行
題字：石坂洋次郎　表紙：棟方志功　一九五二年十一月創刊

あとがき

二〇二三年二月十日

街の古くからの文芸誌で、小説が中心の「無名群」。いつか同人になれればとの思いがずっとあり、有難くも二〇一五年の秋に同人の北畠京さんからお誘いを頂いた。弘前ペンクラブ主催の古本市でともにお手伝いをしていた時である。

高校三年時に文学を趣味にしようと密かに決意した。三十代は野山行きや追懐により事実と真実を重視した随筆的あるいは随想的な短編が中心となる。四十代はフィクションである小説に懐疑的になり、完全に自然科学的志向であった。いや、実は最初から小説というものには無関心であった。文学とは読み書きであり、構成上の虚構を設けることはあるが、内容にフィクションは必要ではない。余りにも現実離れした空想を読むことに、あまり価値を覚えないのである。

ここに上げた七編も主に身近なあるいは過去の体験に基づくもので、小さな感動や喜びを表現し、思考させられた随想的で随筆的な短編である。このような姿勢・作法は、かつての無名群の代表であった横山氏が唱えた「随小説」に相当するかもしれない。この随小説の考えに、これなら書き続けられるとかつて鼓舞されたものだった。

七編は逐次拙ホームページ「シエカの風」にもアップしてきたものだが、ここにウェブ短編集としてまとめ、改めてアップする。

瀬川紀雄：

一九五一年平川市生まれ。

弘前高校、弘前大学文学科卒。

詩集『石っころの詩』（水星社、2001）

短編集『道端に風光り』（路上社、2002）

ウェブ詩集『風景に命と人』『命たちの輝き』

『野山と海辺』『高嶺と湿原』『池畔と川辺』

『自然と芸術』

ネット詩集『自省から逍遥へ』『儚くも一日一詩』

詩誌「風」編集・発行人

自作詩朗読の夕べ「麗日の会」会員

文芸誌「無名群」同人、俳句誌「千青」執筆

詩誌「ゆすりか」元同人(2001～2019)。

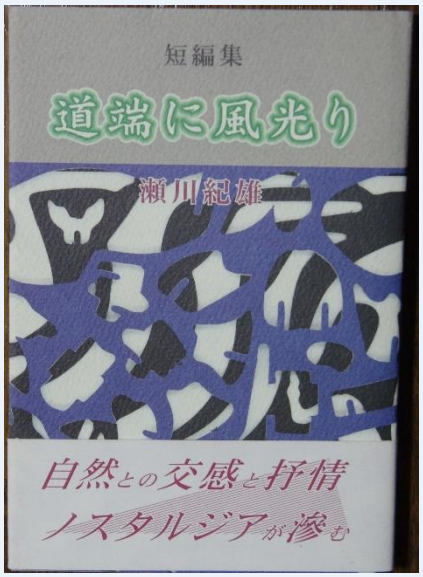
弘前ペンクラブ常任理事

青森県詩人連盟事務局

日本詩人クラブ会員

俳句・短歌各グループに所属

ホームページ「シエカの風」



短編集『道端に風光り』（B六版 一九七頁）

道端に風光り
幻の花
半島の薄曇り
白い森の頂きで
部　屋

路上社　二〇〇二年一月